

枚方市

# 津田遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



2区全景（北から）



# 序 文

津田遺跡は、大阪府枚方市の東北部、交野台地に広がる段丘面と生駒山地との接点に所在します。調査地は、山際の台地上に位置しており、ここから西を望めば眼前に交野台地、やや左手に目を移せば枚方丘陵、遠くには淀川から摂津山系まで見渡せる眺望の好所に位置しています。

今回の調査は、一般国道1号バイパスおよび第二京阪道路建設に伴うもので、弥生時代の集落や鎌倉時代の居館が確認されました。

弥生時代中期前葉の集落は、住居跡が3棟と小規模なもので、一般に集住を指向する弥生時代の集落とは趣を異にしています。生活を常に営む集落とは別に、山の資源を活用する為のベースキャンプ的なものと考えられます。この時期は、交野台地の開発が、河川沿いから山際に近い奥部へ進む時期でもあり、弥生時代の人々が山との関りをどの様にもったかを考える上で貴重な成果といえます。

鎌倉時代になると台地の上に居館が設けられます。調査地は、用水を掌握できる位置にあり、眺望の利くこの場所は、農業経営を行う上で好立地であったといえます。また、谷部の調査ではこの時期のものとして他にほとんど例をみない、土石流対策の為に築かれた土塁状の堤防が検出されました。これまでの交野地域における調査によって、この時期に山が荒れ、たびたび土石流が起きていることは確認されていました。今回の調査により、初めて当時の人々が、自然災害に挑む姿を具体的に知る事の出来る資料を確認する事が出来たのです。この他にも、縄文時代早期の押型文土器、中期の船元式土器が出土しており、この地に縄文時代の人々の生活が営まれた事を示しています。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社関西支社、大阪府教育委員会文化財保護課、枚方市をはじめとする地元関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも文化財の保護に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2008年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

# 例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設に伴って実施した津田遺跡05-1の発掘調査報告書である。なお、津田遺跡は枚方市津田南町に所在する。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社 関西支社（平成17年10月1日付けで日本道路公団関西支社より社名変更）から財団法人 大阪府文化財センターが委託を受け調査を行った。委託・調査期間は以下の通りで、平成19年度の本書の刊行を以ってすべての業務を完了した。

委託期間：平成17年12月1日～平成20年3月31日

調査期間：平成18年12月21日～平成19年3月30日

整理期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

3. 調査および整理は以下の体制で実施した。

〔平成17年度〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本 彰

調査第五係長 秋山浩三、主査 上野貞子 [写真]

技師 平田 泰、南 孝雄、専門調査員 遠藤啓輔、大竹正裕

〔平成18年度〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本 彰

調査第五係長 秋山浩三、主査 上野貞子 [写真]

技師 南 孝雄、長戸満男、専門調査員 遠藤啓輔

〔平成19年度〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本 彰

調査第三係長 秋山浩三、主査 上野貞子 [写真]

技師 南 孝雄

また、樹種同定は中部調査事務所 主査 山口誠治が行った。

4. 今回の調査において、以下の分析・鑑定業務を委託して行った。

〔平成19年度〕 花粉・珪藻・植物珪酸体分析 …… パリノ・サーヴェイ株式会社

土壌剥片作成鑑定・熱残留磁気測定

・X線解析分析 …… パリノ・サーヴェイ株式会社

放射性炭素年代測定（AMS）分析 …… 株式会社パレオ・ラボ

5. 本書に用いた写真は、遺構については調査担当者が撮影した。遺物については京阪調査事務所主査 上野貞子が撮影した。
6. 本書の編集は南 孝雄が主に行った。執筆分担は、第4章第2節第1項と第3節を和田大作（京阪調査事務所専門調査員）、第4章第2節第2項と第5章2を松岡淳平（京阪調査事務所専門調査員）、付章第1節をパリノ・サーヴェイ株式会社、付章第2節を株式会社パレオ・ラボが担当し、その他の項目は南が執筆した。また、遺物観察表については松岡が作成した。
7. 発掘調査および整理作業においては、財団法人大阪府文化財センター職員をはじめ、以下の諸氏・団体からご協力、ご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）



宇治田和生・大竹弘之・久本真美・小川暢子・木建雅郎・高正龍・櫻井敬夫・積山洋・高村夏美・西田敏秀・野島稔・濱口和弘・濱田延充・真鍋成史・槇原美智・馬部隆弘・三宅正浩・丸吉繁一・森永速男・若林邦彦・大阪府教育委員会・枚方市教育委員会・交野市教育委員会

8. 本調査に関わる、遺物・写真・実測図等の資料は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。

## 凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図・地形図などに付された方位はすべて座標北を示している。
2. 本書で使用した測量基準線・地区割方法は、世界測地系による国土座標軸第Ⅵ座標系を基準に、当センターが定めた『遺跡調査マニュアル(暫定版)』(2003)に準拠している。また、座標値はすべてmで表記している。
3. 本書で使用した標高値は東京湾平均海水位(T.P.)を使用している。本文中並びに実測図の表記はすべて「+」の記載を省略している。
4. 実測図の縮尺については、竪穴建物・掘立柱建物は60分の1を基本とするが、一部異なるものもある。遺構についてはそれぞれ縮尺を明記し、各図にスケールを付した。なお、断面図・見通し図の位置は、平面図中に「L」字形で示し方向を矢印で表した。
5. 遺構番号は、全調査区にわたって発掘調査の段階で付加した通し番号をそのまま使用している(例：306竪穴建物、276溝など)。ただ、掘立柱建物および柵の遺構番号は、整理作業の成果から順次新たに付したものである(例：掘立柱建物1、柵1など)。
6. 遺物実測図の縮尺は、基本的には4分の1に統一したが、一部は他の縮尺を採ったものもあり、別途スケールを付して示した。遺物番号は図ごとに番号を付している。遺物説明の項以外である遺物を表すときは、挿図番号-遺物番号として表記する。
7. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』2000年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修 を基準としている。

# 目 次

第1章 調査の経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査方法	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構	9
第1節 遺跡の基本層序	9
第2節 1区の遺構	11
第3節 2・3区の遺構	21
第4節 4～7区の遺構	41
第4章 遺物	48
第1節 遺物の概要	48
第2節 土器類	48
第3節 石器・石製品	63
第4節 その他の遺物	66
第5章 総括	68
付章 自然科学分析	91
第1節 44焼土坑・1区開析谷埋土の自然科学分析概要	91
第2節 306竪穴建物、44焼土坑の放射性炭素年代測定	99



# 目 次

図1	調査地位置図	1	図32	2区723焼土坑実測図	39
図2	地区割り模式図・調査区配置図	2	図33	2区55・756落ち込み、3区243落ち 込み断面図	40
図3	調査地周辺地質図	5	図34	7区東西セクション断面図	41
図4	調査地周辺遺跡分布図	7	図35	4～7区平面図	42
図5	断面柱状図位置図	10	図36	4・5区溝配置図	43
図6	各調査区断面柱状図	10	図37	6・7区溝、土坑配置図	44
図7	1区第4面平面図	11	図38	4～7区溝、土坑、井戸断面図	45
図8	1～3区平面図	12	図39	7区49土坑実測図	46
図9	1区西壁断面図	13	図40	7区44焼土坑実測図	47
図10	1区東壁断面図	15	図41	縄文土器拓影・実測図	49
図11	1区第2・3面平・断面図	16	図42	2区出土弥生土器拓影・実測図	51
図12	1区255堤防断面図	17	図43	6-2区包含層出土弥生土器実測図	52
図13	1区第1面255堤防(古段階)平面図	18	図44	2区308竪穴建物、7区22・49土坑 出土土器実測図	54
図14	1区第1面255堤防(新段階)平面図	19	図45	1区出土土器実測図	54
図15	2区305竪穴建物実測図	20	図46	2区158溝出土土器実測図	55
図16	2区306竪穴建物炭化材検出状況 実測図	21	図47	2区ピット、土坑、276溝出土土器 実測図	56
図17	2区306竪穴建物実測図	22	図48	2区ピット、土坑出土土器実測図	58
図18	2区730竪穴建物実測図	23	図49	2区728土間、731ピット出土土器 実測図	59
図19	2区730竪穴建物土器出土状況 実測図	24	図50	2区包含層、55・301落ち込み出土 土器実測図	60
図20	2区308竪穴建物実測図	25	図51	4・5・7区出土土器実測図	62
図21	2区掘立柱建物1実測図	27	図52	石鏃実測図	64
図22	2区掘立柱建物2実測図	28	図53	石皿実測図	64
図23	2区掘立柱建物3実測図	29	図54	石匙、スクレイパー、楔形石器、剥片 実測図	65
図24	2区柵1実測図	30	図55	砥石実測図	66
図25	2区柵2・3、158溝実測図	31	図56	軒平瓦拓影・実測図	67
図26	2区北東部溝、土坑配置図	32	図57	津田遺跡周辺の調査	69
図27	2区南西部溝、土坑配置図	33	図58	調査地周辺の地形	69
図28	2区溝、土坑断面図	34			
図29	2区53・122・157土坑実測図	36			
図30	2区363・389土坑実測図	37			
図31	2区ピット実測図	38			

# 表 目 次

表 1 土器観察表……………	73	表 2 石器・石製品観察表……………	89
----------------	----	--------------------	----

# 付 章 図 目 次

図 1 採取土壌試料の磁氣的性質（帯磁率と 残留磁化強度の関係）……………	91	図 4 パイロット試料の段階交流消磁結果……………	93
図 2 被熱変色部試料の交流磁場消磁前・後 の残留磁化方向……………	92	図 5 44焼土坑土壌剥片画像……………	94
図 3 被熱変色部、17試料の交流磁場消磁前 の平均方向と近畿地方における標準考 古地磁気曲線（shibuya, 1980）との比較 ……………	92	図 6 1区開析谷内の分析試料採取位置……………	95
		図 7 主要珪藻化石群集の層位分布……………	96
		図 8 主要花粉化石群集の層位分布……………	97
		図 9 植物珪酸体の層位分布……………	98
		図 10 暦年較正結果……………	100

# 付 章 表 目 次

表 1 測定試料及び処理……………	99	表 2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の 結果……………	101
-------------------	----	---------------------------------	-----

# 付 章 写 真 目 次

写真 1 中世土石流砂礫層堆積状況……………	95	写真 2 中世土石流砂礫層堆積状況 （部分）……………	95
------------------------	----	--------------------------------	----

# 図 版 目 次

巻頭図版 2区全景（北から）	図版三 遺構 1 255 堤防古段階（南東から） 2 255 堤防古段階断面（北から）
図版一 遺構 1 1区第1面全景（南東から） 2 1区第1面全景（北西から）	図版四 遺構 1 1区第2面全景（南東から） 2 1区第3面全景（東から）
図版二 遺構 1 255 堤防新段階（北西から） 2 255 堤防新段階断面（北から）	図版五 遺構 1 1区第4面全景（南東から） 2 260 流路断面（東から）



- 3 259 水田東西セクション (南から)
- 4 1区東壁、260・838 溝断面 (西から)

図版六 遺構

- 1 2区全景 (北東から)
- 2 2区全景 (西から)

図版七 遺構

- 1 2区西半部 (北東から)
- 2 2区南東部 (北西から)

図版八 遺構

- 1 305 竪穴建物 (西から)
- 2 305 竪穴建物東側拡張後 (西から)
- 3 305 竪穴建物土器出土状況 (西から)

図版九 遺構

- 1 306 竪穴建物 (南から)
- 2 306 竪穴建物炭化材検出状況 (南から)
- 3 306 竪穴建物炭化材検出状況 (南西から)
- 4 306 竪穴建物断面 (南西から)

図版一〇 遺構

- 1 730 竪穴建物 (東から)
- 2 730 竪穴建物土器出土状況 (東から)
- 3 730 竪穴建物断面 (西から)
- 4 730 竪穴建物中央炉 (西から)

図版一一 遺構

- 1 308 竪穴建物、カマドは古段階 (西から)
- 2 カマド新段階検出状況 (西から)
- 3 カマド新段階断ち割り状況 (南西から)
- 4 カマド古段階検出状況 (西から)
- 5 カマド支柱痕跡検出状況 (西から)

図版一二 遺構

- 1 2-1区全景 (北から)
- 2 2-1区全景 (東から)
- 3 242 ピット遺物出土状況 (南から)
- 4 157 土坑石検出状況 (南から)

図版一三 遺構

- 1 掘立柱建物1、柵1 (東から)
- 2 掘立柱建物3 (北から)
- 3 728 土間検出状況 (北から)
- 4 728 土間断面 (北から)

図版一四 遺構

- 1 掘立柱建物2 (南から)
- 2 730 竪穴建物上層、中世灰捨場 (西から)
- 3 389 土坑 (東から)
- 4 362・363 土坑 (西から)

図版一五 遺構

- 1 276 溝北東コーナー部 (南東から)
- 2 276 溝南端部 (北から)
- 3 柵2、158 溝 (南から)

図版一六 遺構

- 1 158 溝遺物出土状況 (南から)
- 2 723 焼土坑 (北西から)
- 3 731 ピット (東から)
- 4 3区243 落ち込み (南西から)

図版一七 遺構

- 1 4-2区全景 (東から)
- 2 6 溝 (北東から)
- 3 4-1区全景 (東から)

図版一八 遺構

- 1 5区全景 (南東から)
- 2 5区西半部 (南西から)
- 3 35 溝 (南西から)
- 4 38 池 (南西から)

図版一九 遺構

- 1 6-1区全景 (北西から)
- 2 6-2区全景 (西から)

図版二〇 遺構

- 1 7-1区全景 (南西から)
- 2 7-2区北半部 (南西から)

図版二一 遺構

- 1 7-1区北西部 (南西から)
- 2 16 井戸 (北西から)
- 3 44 焼土坑 (南西から)
- 4 49 土坑 (北東から)

図版二二 遺物

- 1 縄文土器 (押型文、繊維土器、表裏条痕文)
- 2 縄文土器 (船元I式)

図版二三 遺物

- 1 6 - 2区出土弥生土器
- 2 2区、6 - 2区出土弥生土器

図版二四 遺物

土師器、須恵器、瓦器

図版二五 遺物

土師器、瓦器、青磁、白磁

図版二六 遺物

- 1 石鏃
- 2 石匙、スクレイパー、楔形石器、剥片

図版二七 遺物

- 1 砥石
- 2 石皿
- 3 軒平瓦
- 4 壁土



# 第1章 調査の経緯と調査方法

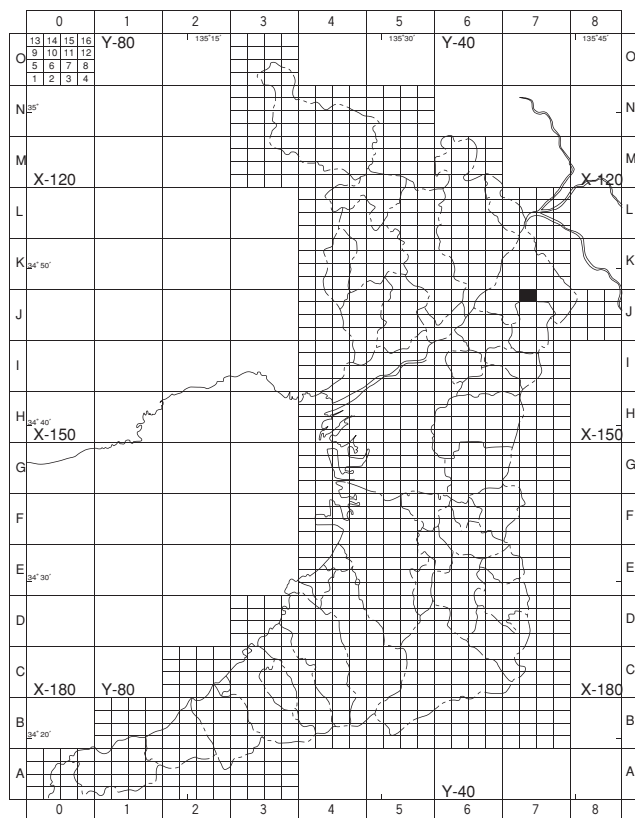
## 第1節 調査に至る経緯と経過

今回行われた津田遺跡の発掘調査は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴うものである。この道路建設に伴う調査は、平成8年度より財団法人大阪府文化財センターが継続して行ってきたものである。発掘調査に先立って遺跡の有無や遺構面までの深度を確認するため、平成15年度に確認調査が実施されている。この確認調査は、幅2.5m、長さ10～30mのトレンチを地形の変化などを考慮して、南北400mの範囲で計17ヵ所に設けて行われた。その結果、今回調査の対象地となった範囲で弥生時代から中世の遺構・遺物が存在する事が確認された<sup>(註1)</sup>。この成果を受け、国土交通省・西日本高速道路株式会社の委託により、大阪府教育委員会の指導のもと、当センターにより発掘調査が実施される事となった。現地での調査作業は、平成18年2月より本格的に開始し、平成19年2月にはほぼ終了した。

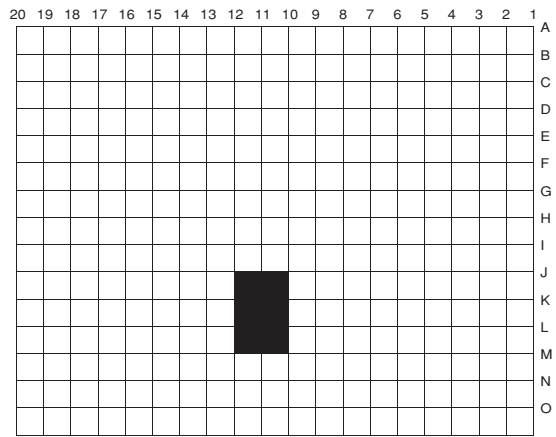
発掘調査対象地の中央には、「新池」と呼ばれる用水池があり、調査地はこの池を挟んで大きく2つに分かれる。調査はこのような地形および残土置き場などを考慮して、北から順に1～7区まで調査区



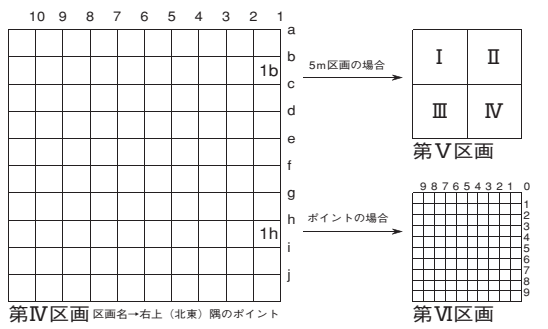
図1 調査地位置図



第Ⅰ・Ⅱ区画



第Ⅲ区画



第Ⅳ区画 区画名→右上(北東)隅のポイント

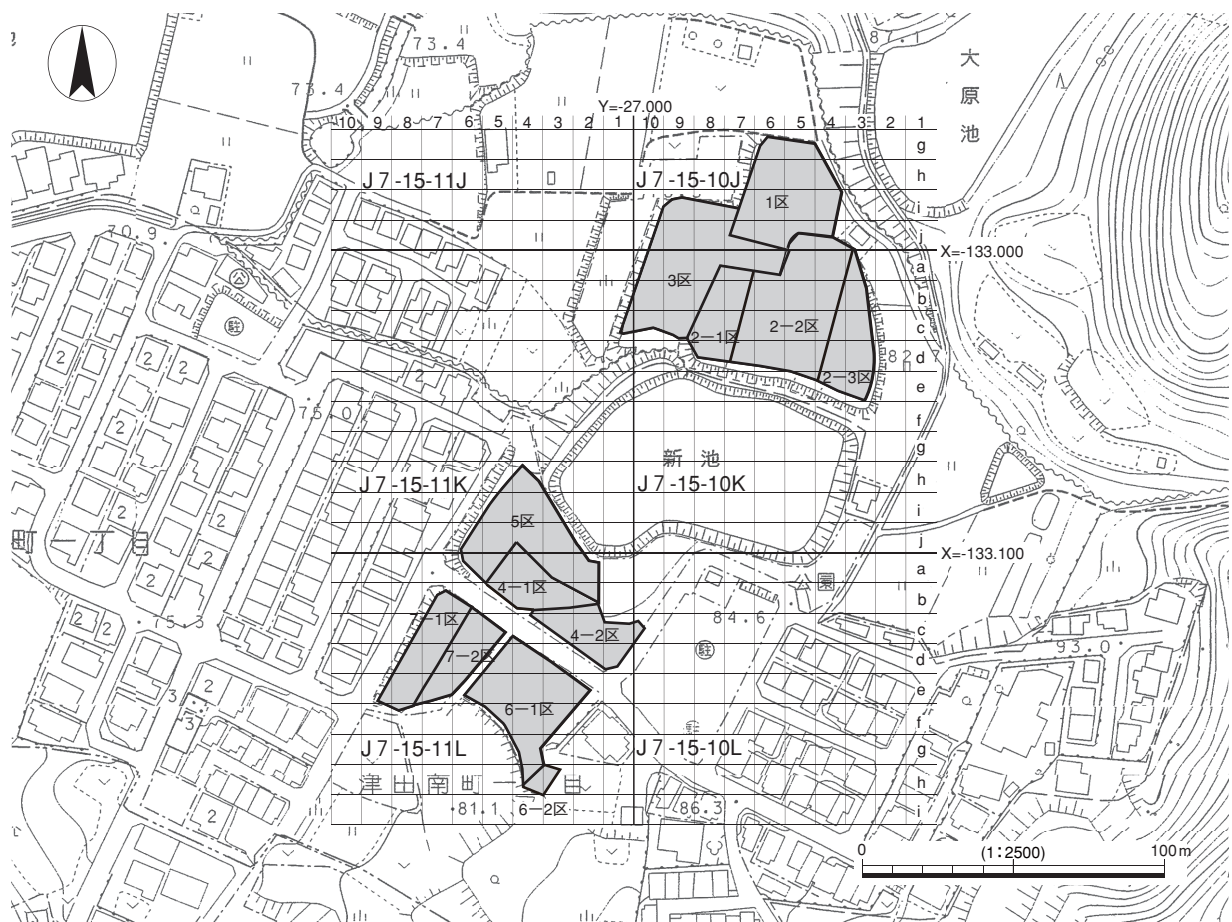


図2 地区割り模式図・調査区配置図



に分けて設定した。さらに2・5～7区ではそれぞれ2～3区の小調査区に分けて調査を行っている。調査実施面積は合計7881㎡である。

なお、2区において弥生時代の竪穴建物や中世の居館などが検出された為、事業者と協議の上、平成18年10月19日に地元住民向けの説明会を、平成18年12月12日には地元教育委員会など関係機関向けの説明会を実施している。

## 第2節 調査方法

当調査の名称は、津田遺跡05-1として表される。これは遺跡名に受託契約年度（西暦の下2桁）と発注番号を示す1を付けたものである。先にも述べたように調査区は1～7区に分けて行っており、それぞれの調査区は正式には05-1-1～7区となる。但し、煩わしさを避けるため、単に1～7区として記す事とする。また、2区は3つに、5～7区はそれぞれ2つに分割して調査を行っているが、これも以下では省いて述べる。但し、6区の記述については、地形や出土遺物の時期が異なる為、6-1区と6-2区と分けて述べる。また、遺構写真では撮影部分を明確にする為、2-3区などと使用する場合もある。

調査前、調査地に近づくには、4・5区と6・7区の間にある市道と6・7区南側まで設置されていた工事用道路しかなく、1～3区への進入路は存在しなかった。この為調査は、最も南の7区からを開始し、調査の終了した部分から工事用道路敷設を行いながら、順次、南側から北側地区へと調査を進めた。

調査は、盛り土や現代耕土など表土を重機によって掘削、これより下の遺物包含層などは人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査区内の地区割り及び測量記録については、当センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」に基づいている。これは、世界測地系によって測量した国土座標第IV系を基準として設けたものである。この地区割りは大から小へ6段階の区画を設け、それぞれ第I～第VI区画とし、それぞれの区画の表示は南北をアルファベット、東西はアラビア数字を用いて行う。第I区画は東西8km・南北6kmを1区画とし、第II区画はこれを東西2km・南北1.5kmで16分割し、これを第III区画では100m毎に東西20、南北15に分割、第IV区画は更にこれを10m毎に分割したものである。

記録図面の作成はこの区画割を用いて行っている。各調査区の平面測量は、ラフタークレーンによる写真測量を計8回に分けて行った。図化は50分の1の縮尺、等高線は0.5m間隔で図化している。また、これ以外にも遺物の出土状況などは10分の1、20分の1縮尺の作図を人手によって行っている。

遺構名は各調査を通して検出順に番号を付している。溝・土坑などの遺構の種類は遺構番号の後ろに付し、例えば「16溝」などと呼称している。また、遺物の取り上げは上記の第IV区画を用いて、地区割・層位・遺構・日付を明示して取り上げ、登録番号を付している。

また、当地の自然環境の復原、遺物の僅少な重要遺構の年代測定や調査地周辺の自然環境復原などを目的として、自然科学分析も併せて行っている。

(註)

(1) (財)大阪府文化財センター 2004 『津田遺跡、東倉治遺跡、茄子作遺跡他』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第124集

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

津田遺跡は生駒山系北端部西麓の大府枚方市津田南町に位置する。調査地は台地状の高台にあり、西を望めば正面に交野台地、左手に枚方丘陵、正面遠方には淀川から摂津の山系までが一望できる。

遺跡が所在する交野地域は、淀川左岸の交野台地と呼ばれる標高20～30mの段丘面が広がる。この台地には東西に流れる3本の主要河川、北から船橋川、穂谷川、天野川があり、大きく3つに分断される。また、生駒山地の西縁には山地から小規模な河川が流れ出している。これによって扇状地性の多数の段丘面が形成され、台地には多数の起伏が存在する。台地の北側には、最頂部の標高142.5mの男山丘陵、南側には最頂部の標高80.9mの枚方丘陵、東側は生駒山地に囲まれ、船橋川と穂谷川の間には最頂部の標高86mの長尾丘陵が東から西へ張り出している。

遺跡の所在する津田は、長尾丘陵の南側、穂谷川と天野川に挟まれた交野台地の最も東側の交野山地との接点、交野台地全体から見ればやや奥まった感のある交野山麓の扇状地上に位置する。交野山地は、生駒山系の北端になるが、標高343.5mの交野山や標高345.0mの旗振山などいくつかのピークが存在する。

調査地は、扇状地と山地との接点に位置し、標高80m前後の中位段丘面上に相当する。これは古期扇状地面が段丘面化したもので、発掘調査による地山面の観察から細礫混じりの砂層を主体とする堆積物によって構成されていることが分かる。この扇状地は、山地から連続する開析谷によって深く侵食される部分もある。現在の調査地周辺には住宅地が広がり、耕作地は狭まりつつあるが、昭和40年代までは耕作地が広がっていた事が過去の航空写真などにより分かる。耕作地は段丘面、開析谷、扇状地上に広がっている。調査地に隣接する「新池」「大原池」、また、この西側にはこれらの池と同じ開析谷を水源とする「大池」があり、古くからこの谷の水が調査地西側に広がる耕作地の重要な水源であった事が分かる。なお、枚方市図書館所蔵の元禄六年（1693）写しの『津田山絵図』には「大池」以外の池は描かれていない。今回の調査で、「新池」の前身となる18世紀以降に埋められた水溜が検出されており、池の築造がこれ以降である事が判明した。

津田周辺の交通路をみると、調査地の西側には、津田の集落と山麓の村々を結ぶ山根街道が南北に通じ、津田の集落内を抜けて、北に約1km行けば北河内から南山城を結ぶ田辺街道に至る。山根街道を南に行き天野川沿いに東に行けば、磐船街道を通り、清滝街道から大和へとつながる。また、津田の集落から西へ延びる道をいけば春日環濠集落の「四辻」から、京あるいは中河内へ至る東高野街道へと通じる。これらの諸道がいつ整備されたのか必ずしも明らかではないが、津田の地が交野地域の中で交通の要衝となっていた事が分かる。

### 第2節 歴史的環境

津田遺跡周辺では旧石器から近世までの多くの遺跡が確認されている。津田遺跡から南西約2.1km、山地から中位段丘面への変換地点には、神宮寺遺跡が存在する。交野山に源を発する免除川と私部北川の間位置し、安定した好立地になっている。ナイフ形石器や剥片、縄文時代早期の押型文土器も出土

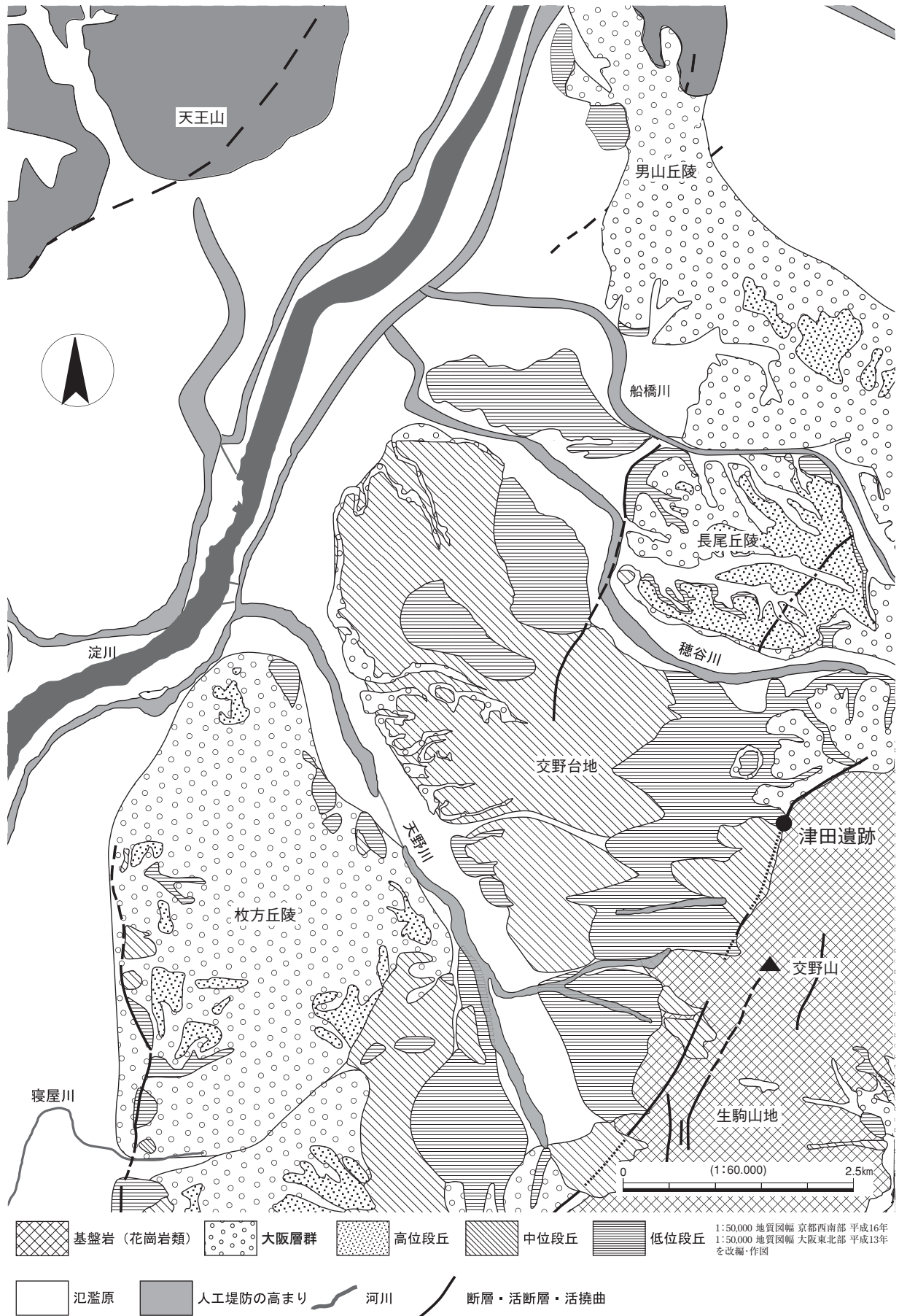


図3 調査地周辺地質図



しており、当該時期の標識遺跡となっている。縄文時代中期から後期初頭の星田旭遺跡、後期の交北城ノ山遺跡は以前から知られているが、最近、天の川右岸の茄子作遺跡でも早期から晩期の土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡は立地から低地部と台地縁辺部の2つに分かれる。磯島先遺跡は、淀川と天野川の合流地点の低地にある遺跡で遠賀川系土器が主として出土する。台地縁辺部では、天野川流域に禁野本町、星丘西、私部南遺跡が存在し、穂谷川流域では招提中町遺跡が、船橋川流域では招提北遺跡がある。私部南遺跡では当初長原式土器が主として出土し、その後、遠賀川系土器が主体となる。当初から遠賀川系土器を使用する磯島先遺跡とは対照的なあり方を示している。

弥生時代中期には河川沿いの台地縁辺部で遺跡数が増大する。低地部に存在するのは楠葉野田遺跡のみで、穂谷川水系の交北城ノ山遺跡、田口山遺跡、天野川水系では星丘西遺跡、上の山遺跡などがこの時期の比較的規模の大きな拠点的な集落跡とみられ、この他にも招提中町、禁野本町、岡東、私部南、茄子作遺跡などがある。

弥生時代後期は小規模な集落が増える。この時期は台地縁辺部のみでなく、谷の奥部、丘陵上や山地に接する場所にまで集落が展開するのが特徴的である。津田遺跡の周辺だけでも新たに展開する遺跡に長尾西遺跡、ごんぼう山遺跡、藤坂東遺跡、津田ばばん谷遺跡、東倉治遺跡、寺村遺跡、南山遺跡などがある。また、天野川下流左岸の鷹塚山遺跡では環濠を伴っており、地域に緊張関係が存在した事を伺わせる。

古墳時代になると交野山から西へ延びる丘陵部に森古墳群が造営され、これに続いて車塚古墳群が扇状地先端に造営される。車塚古墳群は前方後円墳1基、前方後方墳1基、円墳3基、方墳1基で構成される。古墳群の時期は前方後方墳の1号墳が5世紀初頭に始まり、その後6世紀初頭まで続く。5世紀後半には車塚古墳群の南側で森遺跡が成立する。ここからは、5世紀後半から6世紀の遺物と共に多量の鉄滓・鞆羽口や製塩土器が出土しており、大規模な製鉄が行われていた事が分かる。この他、古墳時代中期の生産遺跡の可能性のある遺跡として、茄子作遺跡がある。ここでは焼け歪の著しい初期須恵器が多量に出土しており、窯本体は検出されていないものの須恵器窯が存在したとみてよい。また、交野地域の諸遺跡から出土する古墳時代の須恵器には、明らかに陶邑産と異なるものが一定の割合で存在しており、窯本体は未確認ではあるが、古墳時代中期から後期の須恵器窯が交野地域に存在した事は間違いない。このように交野地域では、森遺跡の製鉄や、須恵器生産が行われており、古墳時代中期以降、当該地域では人間の森林資源への積極的な関与の存在を窺わせる。この事は土壌の植物遺体分析からも証明されている。

古墳時代後期は、山麓部に多数の群集墳が造営される。津田遺跡の近辺では8基の古墳で構成される倉治古墳群がある。この古墳群は6世紀前半から造営が始まり、7世紀初頭には追葬を含めた埋葬儀礼が終了する。また、津田遺跡のすぐ南側には清水谷古墳がある。この古墳は、堅穴系横穴式石室を持ち、渡来系氏族との関係も指摘されている。この時期の大規模な集落遺跡として上私部遺跡があり、集落内は溝によって区画されるという特異なあり方を呈する。

奈良時代の集落遺跡はこれまであまり明らかではなかったが、最近、私部南遺跡でこの時期の遺構・遺物がまとまって確認されている。山麓部では、寺院や須恵器窯、又はその存在を伺わせる遺物が出土している。大谷窯跡は6世紀末から7世紀初頭、大谷北窯跡は7世紀前半と8世紀の2次期の操業が確認されている。この他にも津田窯跡や城坂窯跡では、灰原などから7世紀末から8世紀の須恵器が出土



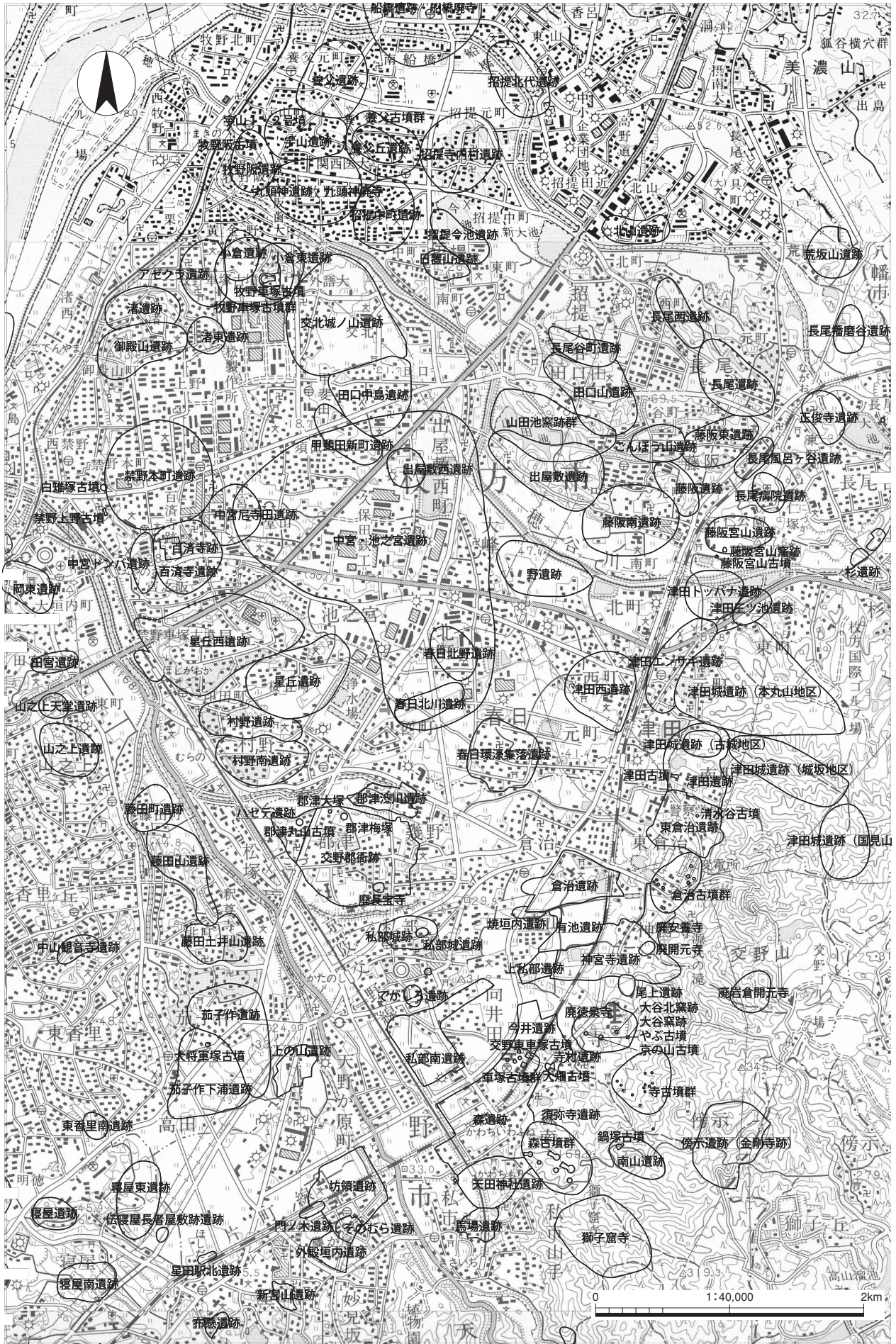


図4 調査地周辺遺跡分布図



しており、窯の存在が確認されている。

平安時代になると、森遺跡で9世紀後半の溝や井戸などが確認されており、『石清水文書』などに記載される三宅山荘園などとの関連が指摘されている。平安時代以降の耕地の整備が進んだ事は、交野の平地部に方画地割の水田が現在も広がる事から推測できるが、上私部遺跡では鎌倉時代の水田の調査が行われており、現在の水田区画は基本的には、この時に行われた耕地整備の区画を踏襲したものである事が確認されている。これに隣接する有池遺跡では12世紀から14世紀の大規模な集落遺跡が確認されており、古代末から中世にかけての大規模な開発の様子を窺う事ができる。

鎌倉から室町時代の遺跡として、津田トッパナ遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物や大溝が確認されている。この中には、鎌倉時代の溝で区画された一辺約20mの方形居館もある。この南側、現在の津田地域の北西部に位置する津田エンサキ遺跡では、室町時代の多数のピット群と区画溝が検出されており、津田集落の始まりとの関係が注目される。また、この時期、津田遺跡周辺では山麓や山中には城が築かれている。津田城遺跡の古城地区では断面V字形の堀が検出されており、本城地区でも断面V字形の堀、平坦面が検出されている。これらの城郭と津田の集落との有機的な関係が存在した事は想像に難しくなく、「市」など「町」の存在を示す字名も残されており、現在の津田の集落の直接的な始まりは津田城との関連が深いと思われる。

#### 参考文献

- 地質調査所 2001 『大阪府東北部地域の地質』  
枚方市史編纂委員会 1986 『枚方市史』第12巻  
枚方市史編纂委員会 1997 『枚方市史』別巻  
大阪府住宅供給公社・(財)枚方市文化財研究調査会 1992 『津田城遺跡発掘調査概要報告』(財)枚方市文化財研究調査会  
(財)枚方市文化財研究調査会 1976 『大阪府住宅供給公社津田団地内遺跡発掘調査概要報告』(財)枚方市文化財研究調査会  
(財)枚方市文化財研究調査会 1992 『大阪府住宅供給公社津田団地内遺跡発掘調査概要報告』(財)枚方市文化財研究調査会  
交野市史編纂委員会 1992 『交野市史』考古編  
交野市教育委員会 1989 『1988年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』  
交野市教育委員会 1994 『森遺跡1992-6次調査報告・交野郡衙跡1993-1次調査報告』交野市埋蔵文化財調査報告1993-I  
交野市教育委員会 1989 『森遺跡I』  
交野市教育委員会 2000 『古代交野と鉄II』交野市埋蔵文化財調査報告1999-II  
交野市古文化研究会 1975 『倉治古墳群発掘調査概要』交野市古文化同好会記録1  
交野市教育委員会・(財)交野市体育文化協会 1987 『清水谷古墳調査概要』  
交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団 2004 『須弥寺遺跡』交野市埋蔵文化財調査報告2003-II  
(財)大阪府文化財センター 2006 『東倉治遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第146集  
(財)大阪府文化財センター 2007 『私部南遺跡I』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第154集  
(財)大阪府文化財センター 2007 『上の山遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第155集  
(財)大阪府文化財センター 2007 『有池遺跡I』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第152集  
(財)大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第165集  
(財)大阪府文化財センター 2007 『茄子作遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第174集

## 第3章 遺構

### 第1節 遺跡の基本層序

調査地は、生駒山地西側斜面の山麓部に位置する。調査地の北東側と中央にはそれぞれに用水池である「大原池」と「新池」が存在する。これらの池は、東側の山地から延びる東西方向の開析谷の一部を堤防によって堰き止め、池としたものである。また、6・7区の南側にも通称「清水谷」と称される東西方向の浅い谷があり、各調査区はこれらの谷に挟まれた段丘面上に位置する事になる。但し、1区のみは北側の開析谷内に位置する。調査区の配置は、「新池」のある谷を挟んで1～3区と4～7区の南北に分かれる。地形的には、1区は標高80m前後の開析谷内、2～7区が標高80～82mの段丘面上に位置し、更に新池北側に位置する2・3区は標高82m前後の段丘面上位面（2区）と標高80m前後の段丘面下位面（3区）に分かれる。谷内に位置する1区と段丘面上の3区の現地表面の標高が同じであるのは、1区には近世耕作に伴う盛土と13世紀以降の土石流の砂が厚く堆積することによる。2・3区の境界は現在崖面となっており、これは直接的には、近世以降の水田耕作に伴う削平によるものであるが、周辺の地形観察などから旧地形もこれに近い斜面になっていたと思われる。弥生時代の竪穴建物や中世の掘立柱建物群などが検出されたのは段丘面上位面の2区である。

1区の基本層序は、近世以降の耕作に伴う盛土と、山地からの夥しい量の土砂流出による分厚い堆積が認められる。第1層は耕作土。第2層はこの水田造成に伴う盛土。18世紀以降の肥前系磁器が出土する。第3層は粘性の強い黄褐色シルト。これは層の上面が水平堆積を示しており、水田耕作に伴う床土と考えられるが、この直上で耕作土は検出されなかった。近世以降に行われた第2層による水田の嵩上げの際に耕作土を再利用した為とみられる。第4層は土石流により堆積する粗砂。この粗砂は、1区で検出された13世紀の堤防遺構を覆っている。粗砂の堆積は、厚いところで1m以上あるが、下部の堆積物の粒子が粗く、上部の方が細くなっており、通常の洪水堆積とは逆の状態を呈している。このような堆積は砂質土石流堆積物特有のものである。第5層は粘性のあるシルトと粗砂が互層に堆積する。山側からの洪水堆積層。第6層は13世紀の耕作土と洪水砂層が交互に堆積する。厚さ約0.2mの2～3層の耕作土が確認されており、13世紀代の瓦器が出土する。これより下では遺構・遺物は確認されなかった。第2層から第6層の堆積によって、13世紀以降調査区背後の山地から度重なる土砂流出が存在した事が分かる。

2区は、東から西へなだらかに傾斜する平坦地である。2区東端で標高83m前後、西端で80m前後を測る。第1層が耕作土、第2層が近世耕作土、第3層が中世遺物包含層、これより下の地山が遺構面となる。

3区は、第1層が耕作土、第2層が床土、これより下の地山が遺構面となる。近世以降の水田耕作に伴う削平により、顕著な遺構・遺物は殆ど検出されなかった。

4～7区は第1層が盛土、第2層が近世から近代耕作土、第3層が中世耕作土（室町時代）、これより下の地山が遺構面となる。但し、6-1区では中世耕作土の堆積はなかった。6-2区は山際の傾斜地に位置しており、遺構・遺物の項で述べるが、ここには弥生時代後期の遺物包含層が堆積する。

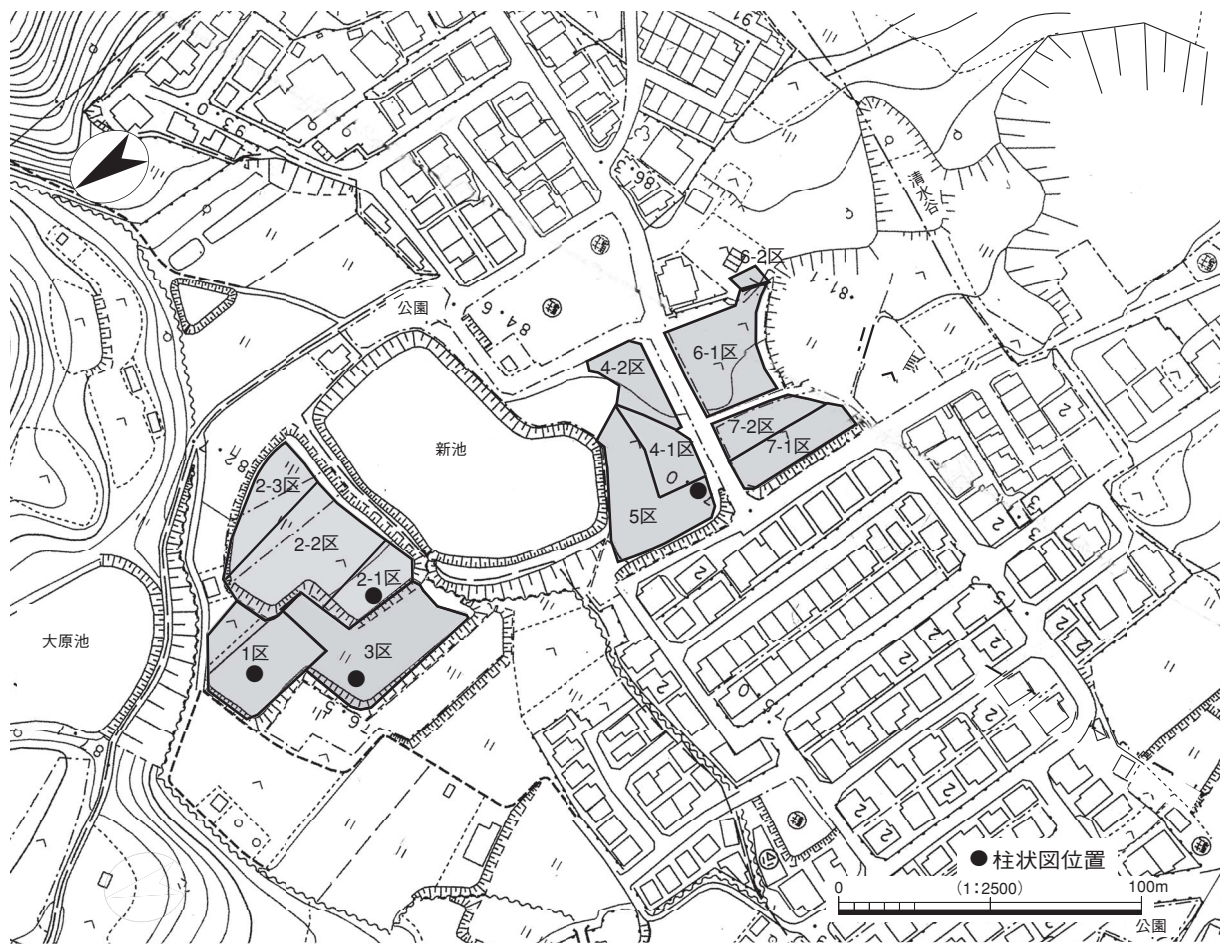


図5 断面柱状図位置図

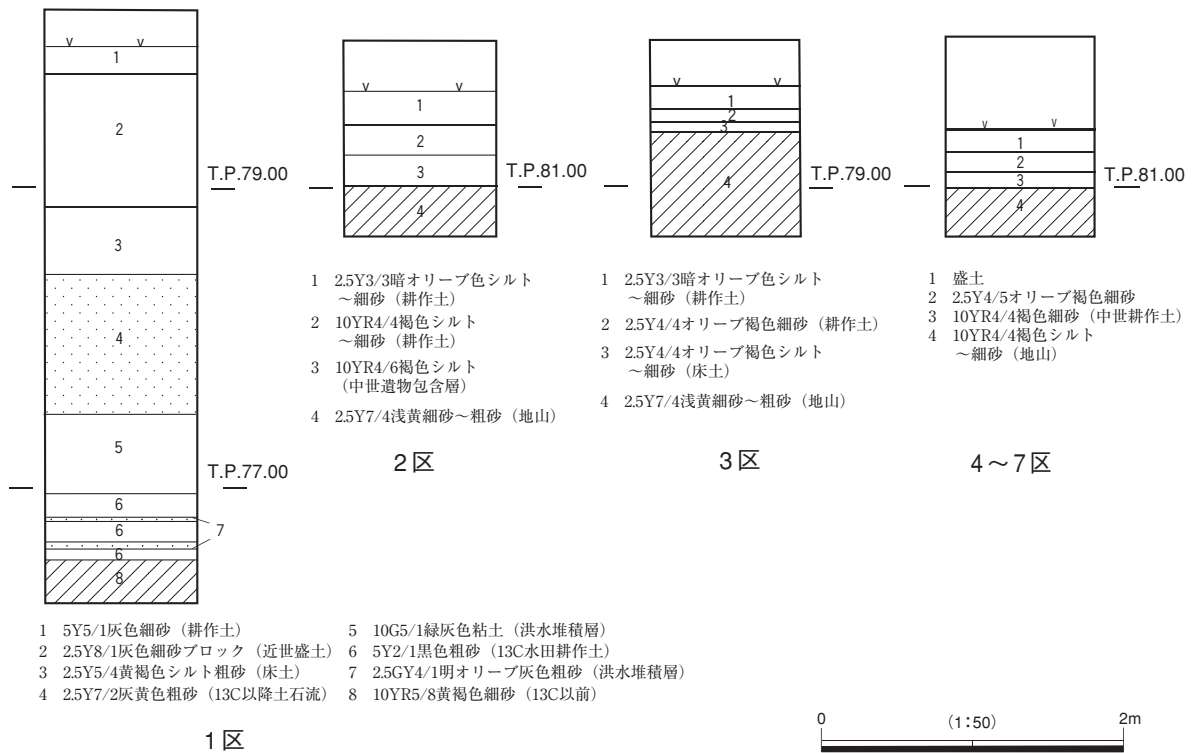


図6 各調査区断面柱状図



## 第2節 1区の遺構

1区は、開析谷内に位置する調査区で、調査前は標高80m前後の平坦面であったが、これは近世以降に行われた水田の造成による埋め土と中世以降の開析谷内の洪水に伴う土砂の堆積の為であり、この洪水砂の下で4面の遺構面が検出された。第4面は現在の地表面から2.5m下である。第1面は鎌倉から室町時代の堤防遺構の検出面。第2・3面は鎌倉時代の水田面。第4面は鎌倉時代の自然流路検出面である。第1面は1区の全面を、2～4面は1区の西半部のみで調査を行った。以下、第4面から順に述べていく。

### (1) 第4面 (図7・9、図版五)

第4面は北半が高く標高77.1m前後、南半がこれより約0.6m低い標高76.5m前後となる。南端部はほぼ垂直の崖面となっている。検出最下面は北半部は硬く締まる黄褐色細砂の地山面を検出しているが、南半部は南北幅9mの範囲で東西方向の260・261流路を検出し、その底面は締りのない灰色粗砂であり、谷地形は更に深くなる。なお、260流路の南側では、東西方向の溝状遺構を検出しており、後述する第3面の水田に伴う可能性もある。

**260流路** 幅約2m、深さ0.4mの東西方向の流路。底面の傾斜から、東から西へ流れていた事が分かる。埋土は植物遺体を多く含む黒色粗砂である。13世紀前半の瓦器片が出土する。

**261流路** 幅約1m、深さ0.3mの東西方向の流路。北から南へ低くなる地形の変換線に沿って流れる。底面の傾斜から、東から西へ流れていた事が分かる。埋土は植物遺体を多く含む黒色粗砂である。

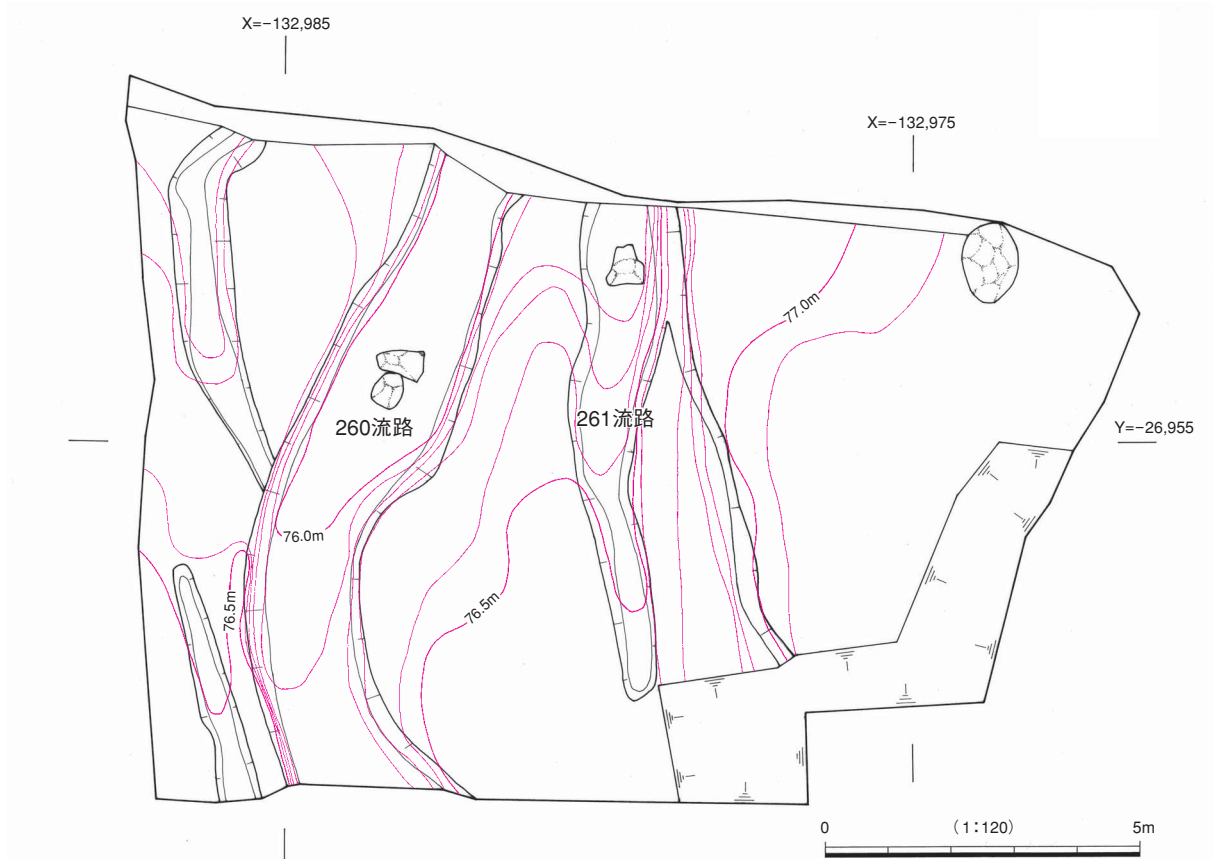


図7 1区第4面平面図

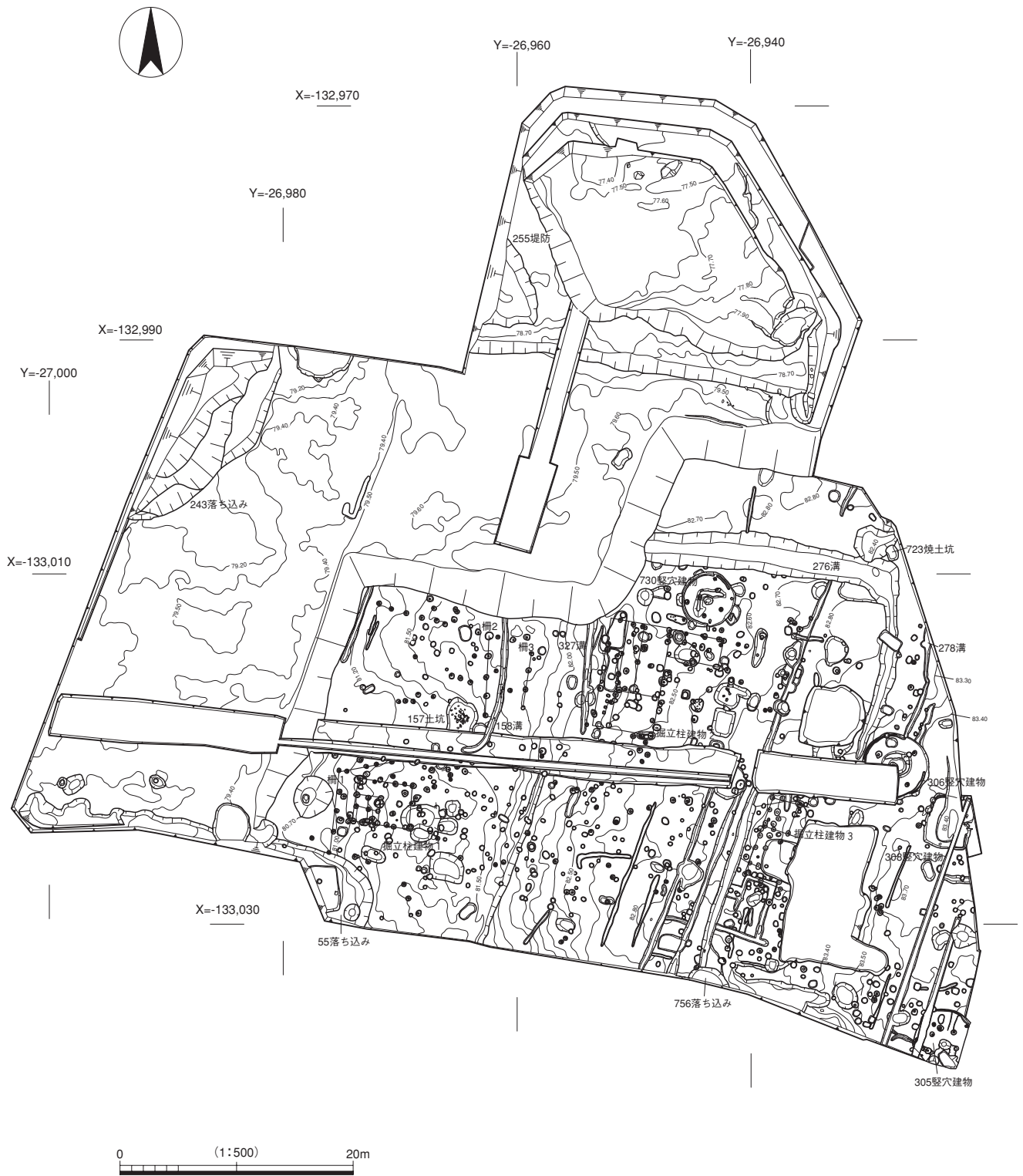
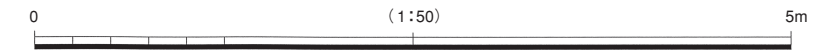
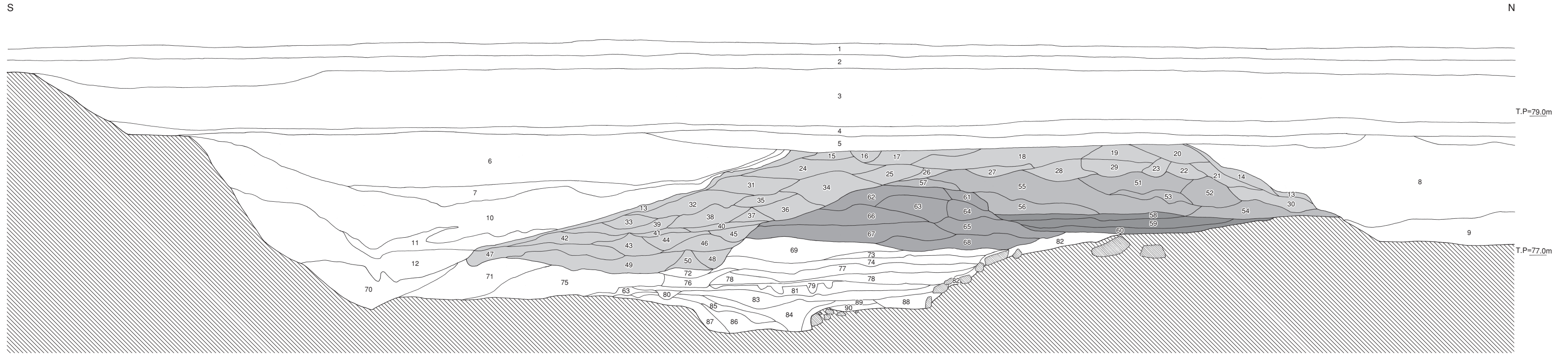


図8 1～3区平面図



- |                                       |                                 |   |  |
|---------------------------------------|---------------------------------|---|--|
| 1 5Y5/1 灰色細砂(現代耕作土)                   | 31 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂           | 61 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり細砂                   | <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: flex-start;"> <div style="margin-bottom: 5px;"> <span style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #d3d3d3; margin-right: 5px;"></span> 255堤防新段階         </div> <div style="margin-bottom: 5px;"> <span style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #808080; margin-right: 5px;"></span> 255堤防中段階         </div> <div style="margin-bottom: 5px;"> <span style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #696969; margin-right: 5px;"></span> 255堤防古段階         </div> <div style="margin-bottom: 5px;"> <span style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #404040; margin-right: 5px;"></span> 255堤防古段階側溝(257溝)         </div> </div> |
| 2 10YR7/6 明黄褐色シルト 粘性有り(床土)            | 32 2.5Y5/6 黄褐色粗砂混じり細砂 粘性有り      | 62 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり細砂                |  |
| 3 2.5Y8/1 灰白色粗砂 (近世水田造成土)             | 33 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂           | 63 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂                   |  |
| 4 2.5Y5/4 黄褐色シルト(床土)                  | 34 5Y5/3 灰オリーブ色細砂               | 64 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂混じり細砂                |  |
| 5 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト 粘性有り(床土)           | 34 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂混じり細砂        | 65 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり細砂                   |  |
| 6 2.5Y1/2 灰黄色粗砂 φ3cm礫多く含む(255堤防埋没洪水砂) | 35 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂混じり細砂         | 66 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂                     |  |
| 7 2.5Y5/4 黄褐色シルト 粘性有り(255堤防化粧土)       | 36 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混じり細砂         | 67 5Y5/4 オリーブ色細砂 粘性有り                   |  |
| 8 2.5Y7/2 灰黄色粗砂に2.5Y7/4 浅黄色細砂の互層(洪水砂) | 37 2.5Y5/6 黄褐色粗砂                | 68 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混じり細砂                  |  |
| 9 10Y5/2 オリーブ灰色シルト                    | 38 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂           | 69 10YR5/6 黄褐色粗砂 ラミナ有り                  |  |
| 10 2.5Y5/3 黄褐色粗砂 (洪水砂)                | 39 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり細砂           | 70 7.5GY5/1 緑灰色粗砂                       |  |
| 11 2.5Y4/3 黄褐色細砂 (洪水砂)                | 40 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂             | 71 10YR4/1 灰色粗砂混じり細砂                    |  |
| 12 2.5Y6/6 明黄褐色粗砂 (洪水砂)               | 41 2.5Y5/6 黄褐色粗砂混じり粗砂           | 72 7.5GY5/1 緑灰色粗砂混じり粗砂                  |  |
| 13 2.5Y5/4 黄褐色シルト 粘性有り(255堤防化粧土)      | 41 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり細砂(固く締まる) | 73 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗砂混じり粗砂 粘質有り         |  |
| 14 10YR6/6 明黄褐色粗砂混じりシルト 粘性有り          | 42 2.5Y5/6 黄褐色粗砂                | 74 5G4/1 暗緑灰色粗砂混じり粗砂                    |  |
| 15 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂(固く締まる)          | 43 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり細砂           | 75 10GY5/1 暗緑灰色粗砂混じり粗砂(838溝)            |  |
| 16 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂混じり細砂(固く締まる)       | 44 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂           | 76 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗砂混じり粗砂              |  |
| 17 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂(固く締まる)          | 45 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混じり細砂          | 77 7.5Y6/1 灰色粗砂混じり細砂(耕作土)               |  |
| 18 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混じり細砂(固く締まる)        | 46 5Y4/3 暗オリーブ色粗砂混じり細砂          | 78 5BG4/1 暗青灰色粗砂混じり粗砂(258水田)            |  |
| 19 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂混じり細砂(固く締まる)        | 47 5Y5/4 オリーブ色粗砂混じり粗砂 粘性有り      | 79 5G5/1 緑灰色粗砂(洪水砂)                     |  |
| 20 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂(固く締まる)          | 48 5Y5/4 オリーブ色粗砂混じり粗砂           | 80 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂(溝状遺構)                 |  |
| 21 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂(固く締まる)       | 49 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂混じりシルト 粘質有り  | 81 5Y2/1 黒色粗砂混じり粗砂(259水田)               |  |
| 22 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり細砂                 | 50 10Y5/1 灰色粗砂混じり粗砂             | 82 7.5GY4/1 暗緑灰色粗砂混じり粗砂 φ8cm礫多量に含む      |  |
| 23 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり粗砂              | 51 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂混じり粗砂         | 83 7.5Y2/1 黒色粗砂混じり粗砂 植物遺体多く含む           |  |
| 24 2.5Y5/6 黄褐色粗砂混じり細砂                 | 52 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト混じり粗砂 粘性有り  | 84 5Y2/1 黒色微細砂(260流路)                   |  |
| 25 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂混じり粗砂 φ10cm礫を含む    | 53 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり粗砂           | 85 2.5GY2/1 黒色粗砂 粘質有り 植物遺体多く含む(260流路)   |  |
| 26 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂混じり粗砂              | 54 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂混じり粘土          | 86 5GY2/1 オリーブ黒色粗砂混じり粗砂 植物遺体多く含む(260流路) |  |
| 27 2.5Y5/6 黄褐色粗砂                      | 55 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂              | 87 10GY2/1 緑黒色粗砂(260流路)                 |  |
| 28 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり粗砂                 | 56 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり粗砂 粘性有り    | 88 5GY2/1 オリーブ黒色粗砂混じり粗砂 植物遺体多く含む(261流路) |  |
| 29 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり粗砂                 | 57 2.5Y5/4 黄褐色粗砂                | 89 10BG3/1 暗青灰色粗砂混じり粗砂                  |  |
| 30 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じり粗砂(固く締まる)       | 58 2.5Y7/2 灰黄色粗砂(257溝)          | 90 5G3/1 暗緑灰色粗砂                         |  |
|                                       | 59 2.5Y6/3 にぶい黄色微砂(257溝)        |   |  |
|                                       | 60 2.5Y5/4 黄褐色粗砂                |   |  |

図9 1区西壁断面図

(2) 第2・3面 (図9～11、図版四・五)

第2・3面では鎌倉時代の258・259水田を検出した。この面では南半と北半で約0.5m程の高低差があり、南半が小さな谷地形となっている。水田は、この地形を利用して作られる。水田1枚の規模は、南北幅は9m、東西の幅も谷地形を利用する事から、水田の区画は小さなものになる。

検出した水田面は2面であるが、第2面と第3面の間にも耕作土と思われる土層の堆積を確認している。これらの耕作土は、260流路の堆積土と極めて似た色調・質の細砂混じりの粗砂である。また、耕作土の上面では、それぞれに洪水による粗砂の堆積が確認されており、そのたびに水田を復旧した事が分かる。第2面で検出した258水田上面の洪水砂より上層には、泥状の細砂及びシルトが堆積しており、258水田を最後にこの場所での水田耕作を放棄している。泥状堆積物は約0.5mの厚さがあり、この上面で255堤防が構築される。また、耕作土を植物珪酸体分析した結果、イネ属の機動細胞珪酸体が数百個/gと通常平野部で検出される水田耕作土と比べて極めて少なく、谷水田の立地による生産性の低さを反映したものとも思われる。

**259水田** 第3面で検出された水田。南北幅約7mを測る。水田中央で南北方向の畔畦によって区画され、東から西へ下がる棚田状を呈する。この畔畦に沿って西側には幅0.9mの西へ曲がる溝が存在する。下段の水田面の中央には東西方向の畔畦が検出されており、田面を更に小さく区画している。南西へ傾斜する水田面の水の調整を行う為のものと思われる。

**258水田** 第2面で検出された水田。水田中央に第3面とほぼ同じ場所で畔畦を検出しており、東から西へ下がる棚田状を呈する。水田の北肩部の一段高くなる部分には、東西方向に30cm大の石を多く含む土手状の幅1m、高さ0.3mの高まりが検出されており、北側からの土砂の流入を防ぐ為に構築されたものと思われる。

**838溝** 調査区の南端で検出した東西方向の溝。幅1.8m、深さ0.4mを測る。調査区西端で北へ曲がる。この溝は258水田の埋没後のもので、この場所での水田廃絶後も谷内の水の管理を行い、これより下流では水田耕作が行われていた事を伺わせる。

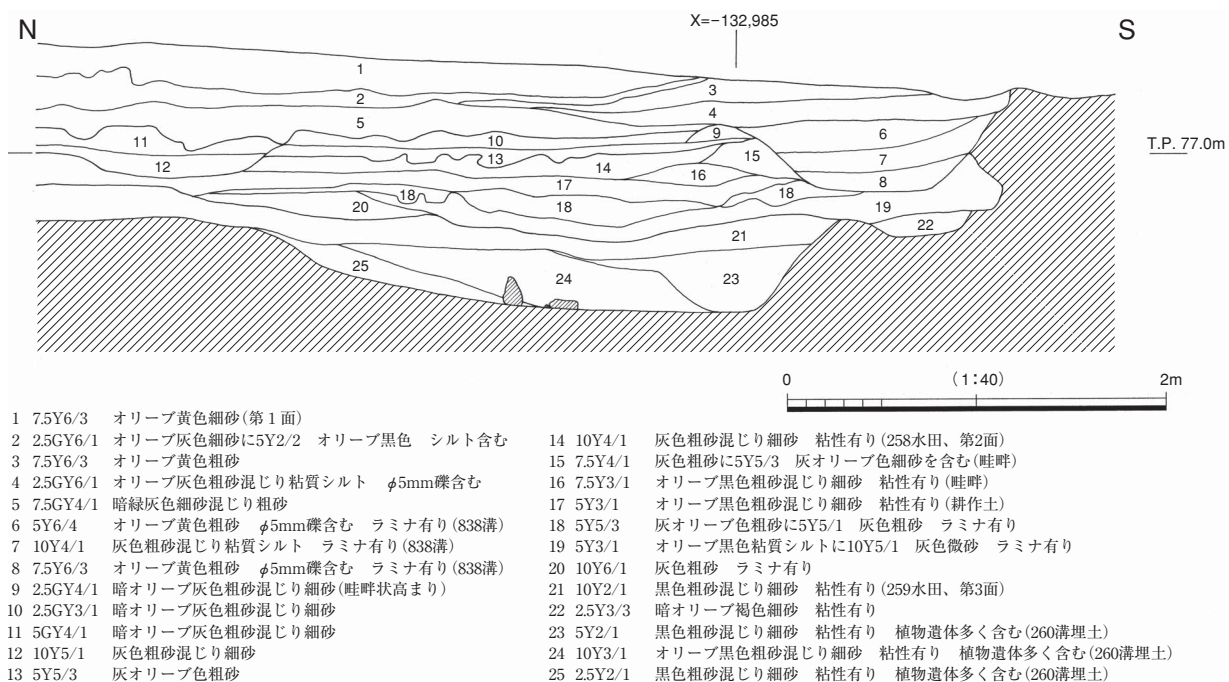
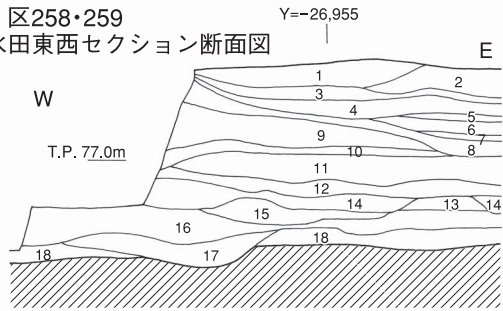


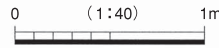
図10 1区東壁断面図



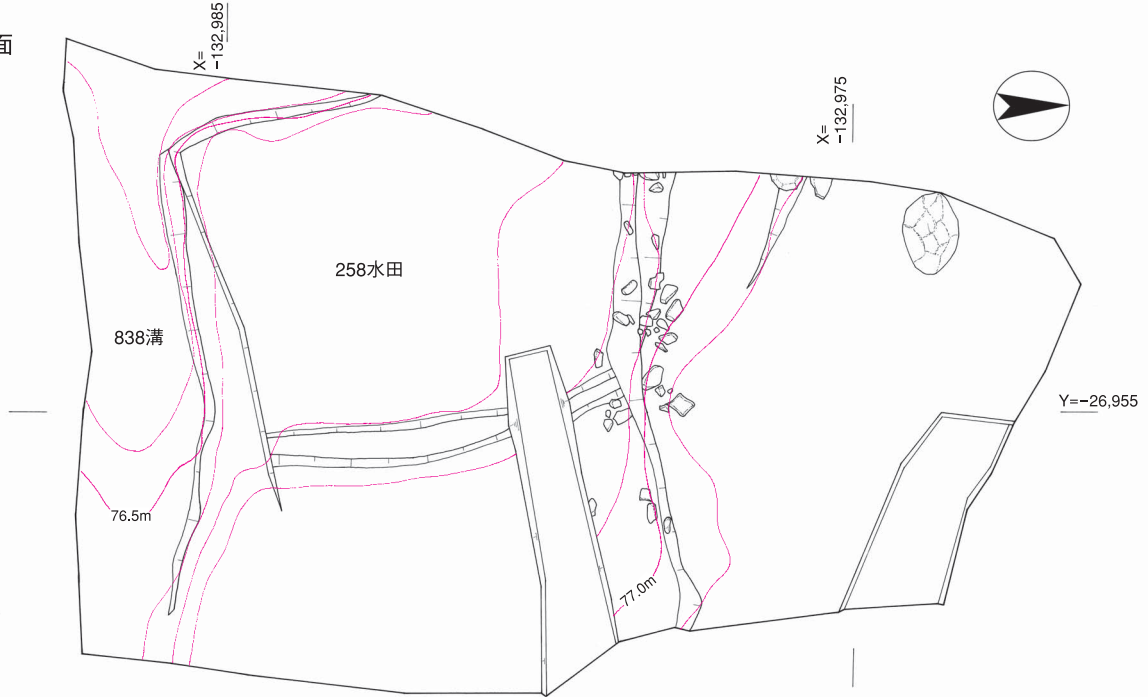
1区258・259  
水田東西セクション断面図



- |            |                         |             |                             |
|------------|-------------------------|-------------|-----------------------------|
| 1 2.5GY6/1 | オリーブ灰色シルト<br>下半分粗砂(第1面) | 9 7.5GY6/1  | 緑灰色微砂                       |
| 2 5Y7/1    | 灰白色粗砂<br>ラミナ有り(洪水砂)     | 10 7.5GY5/1 | 緑灰色粘土                       |
| 3 7.5GY6/1 | 緑灰色シルト                  | 11 2.5GY7/1 | 明オリーブ灰色粗砂<br>ラミナ有り(洪水砂)     |
| 4 10Y4/1   | 灰色粘土 植物遺体多く含む           | 12 5G4/1    | 暗緑灰色細砂 ラミナ有り                |
| 5 10Y5/1   | 灰色粘土 植物遺体多く含む           | 13 5G2/1    | 緑黒色細砂(畦畔)                   |
| 6 7.5GY6/1 | 緑灰色粘土                   | 14 2.5GY4/1 | 暗オリーブ灰色粗砂混じり細砂<br>(水田面、第2面) |
| 7 10G5/1   | 緑灰色シルト                  | 15 2.5GY3/1 | 暗オリーブ灰色粗砂(溝)                |
| 8 10GY4/1  | 暗緑灰色粘土                  | 16 2.5GY2/1 | 黒色粗砂混じり細砂                   |
|            |                         | 17 10Y7/1   | 灰白色粗砂(溝)                    |
|            |                         | 18 10Y2/1   | 黒色粗砂混じり細砂<br>(水田面、第3面)      |



第2面



第3面

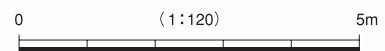
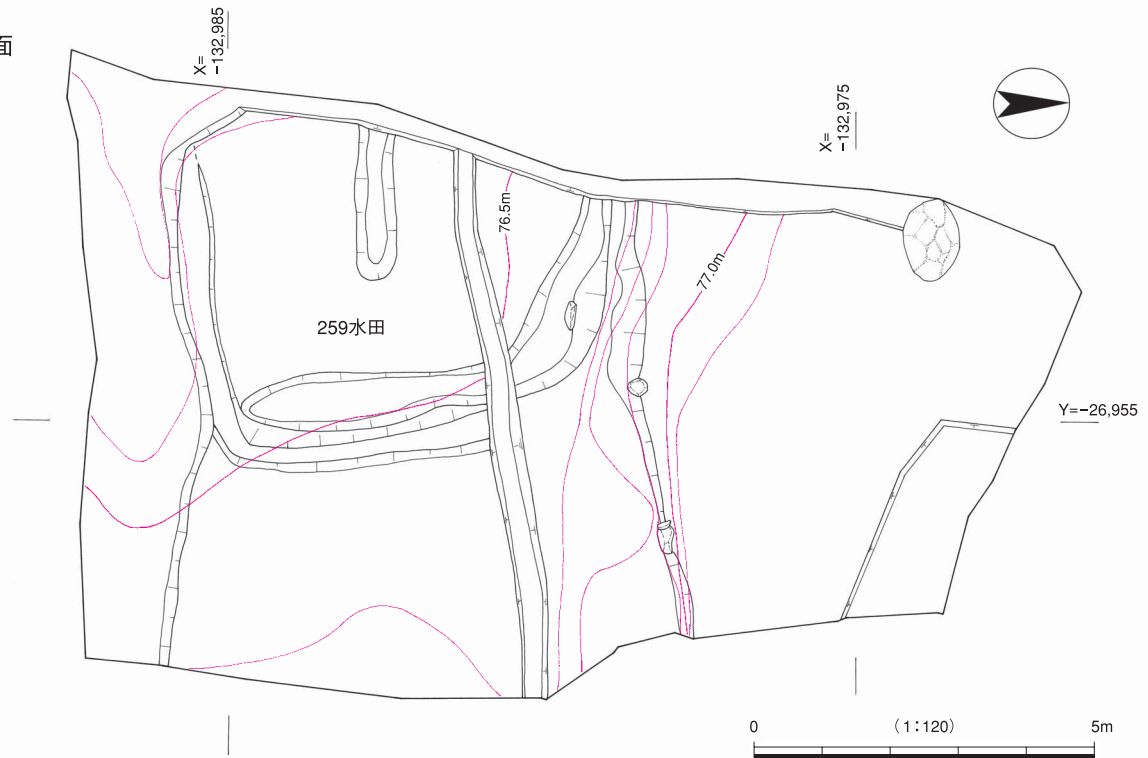


図11 1区第2・3面平・断面図



### (3) 第1面

第1面では、水田廃絶後に構築された土塁状の堤防遺構を検出している。255堤防の検出面では、多数の人間、動物の足跡を検出しており、一定程度の人の往来が存在した事が分かる。

255堤防（図9・12～14、図版一～三） 255堤防は、1区南西部で南北方向に検出された。南端は段丘崖面に取り付き、北側は調査区外へ伸びる。断面観察により2度の作り替えによる、3段階が確認されている。平面的には古段階と新段階の調査を行っている。調査区の北西側にある東西方向の開析谷と直交するように構築されており、機能としては、山側から流れ出す土砂を堰き止める為に設置されたものと思われる。段階ごとに規模は大きくなっているが、最終的には東の山側から流れてきた粗砂によって埋没している。

古段階は基底部幅3.0～3.5m、上端部幅0.5m、高さ0.9mを測る。基底部は西側で地山を高さ0.3m、幅1.5mで台形に削り残し、これより上方に細砂と粗砂を交互に積んで構築していく。これを中位まで行った後、上半部は粘性のある細砂を積み完成させている。堤防南端東側の崖面に接する部分は大きく抉ら

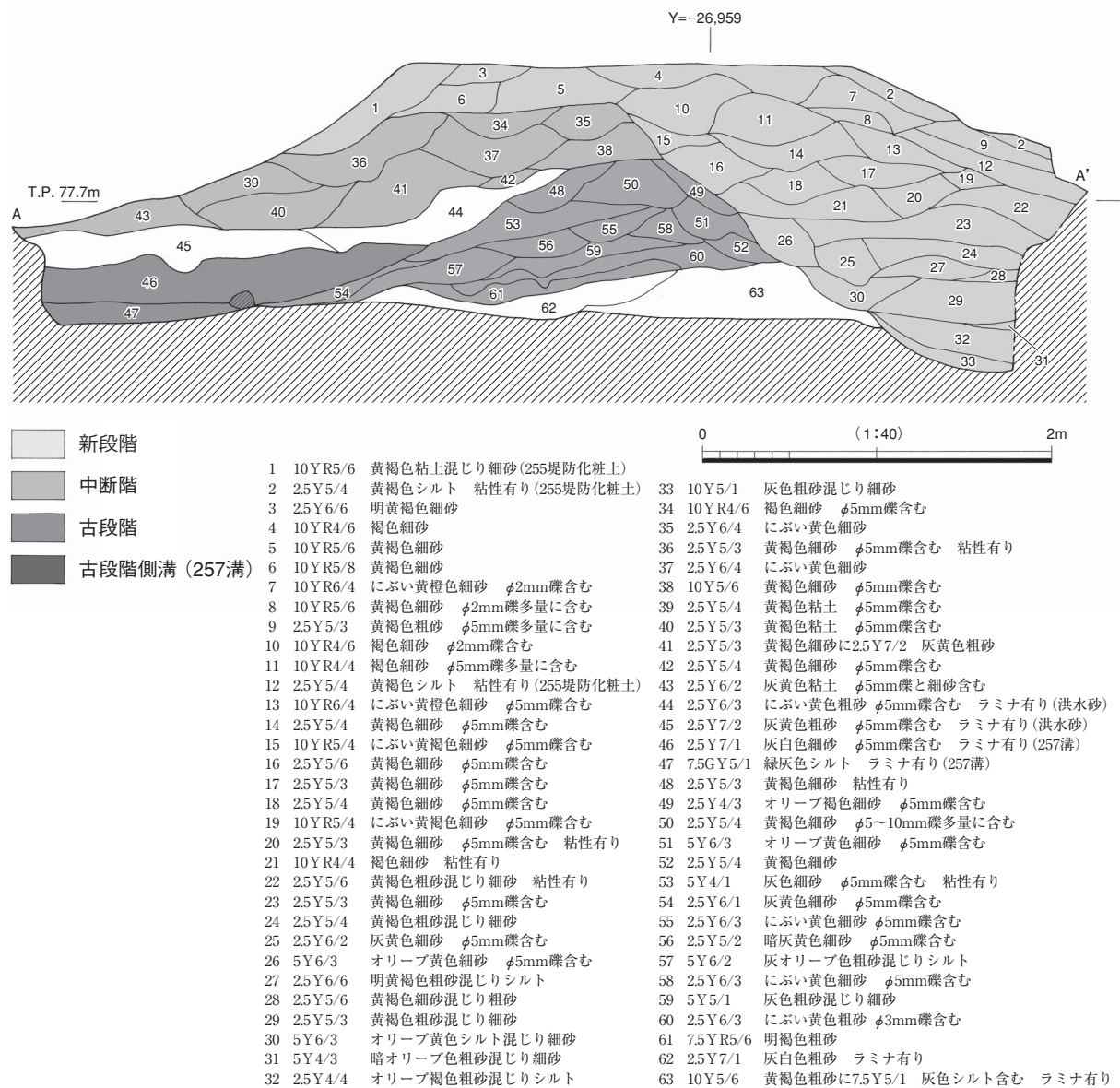


図12 1区255堤防断面図

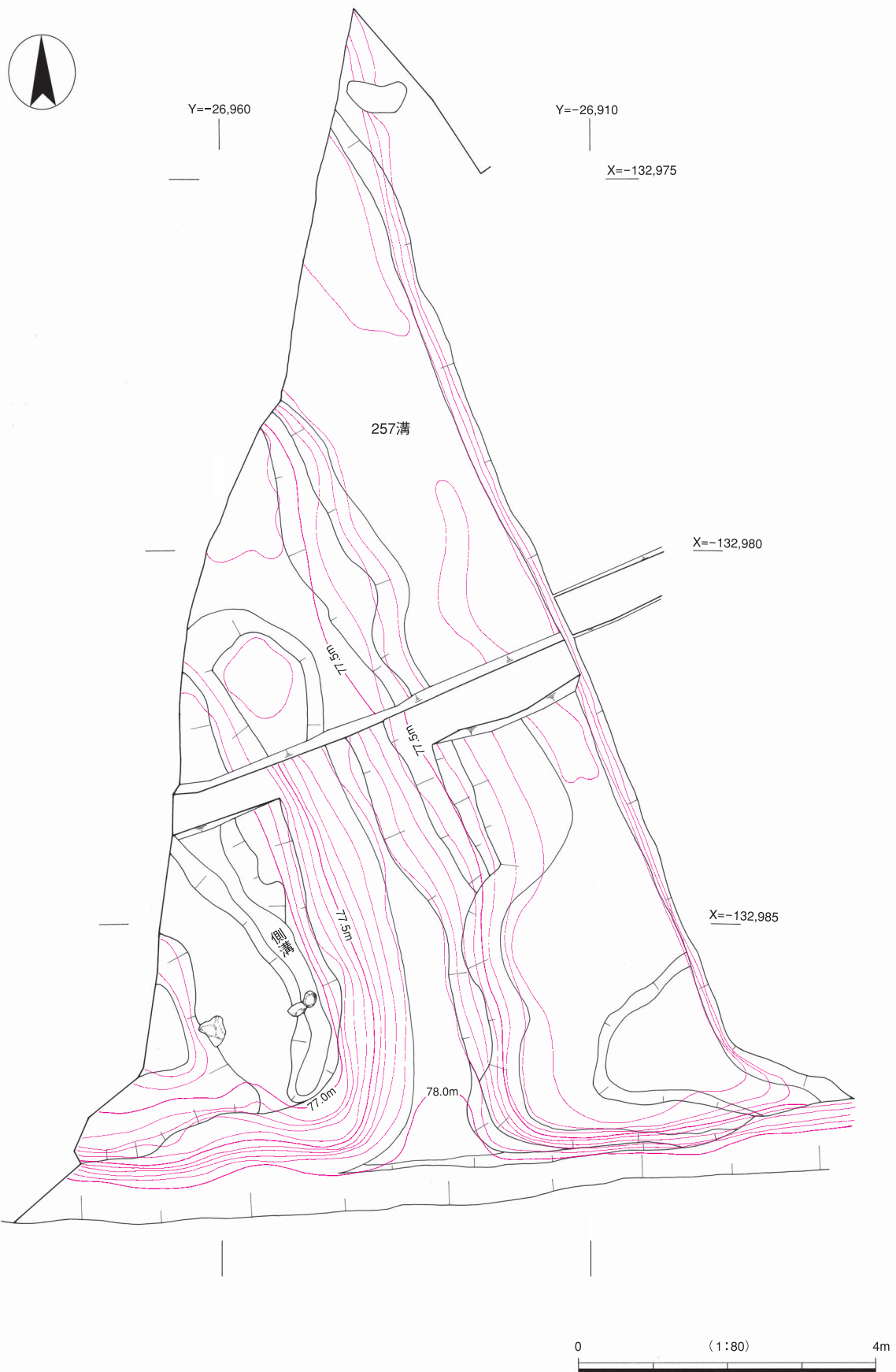


图13 1区第1面255堤防（古段階）平面图

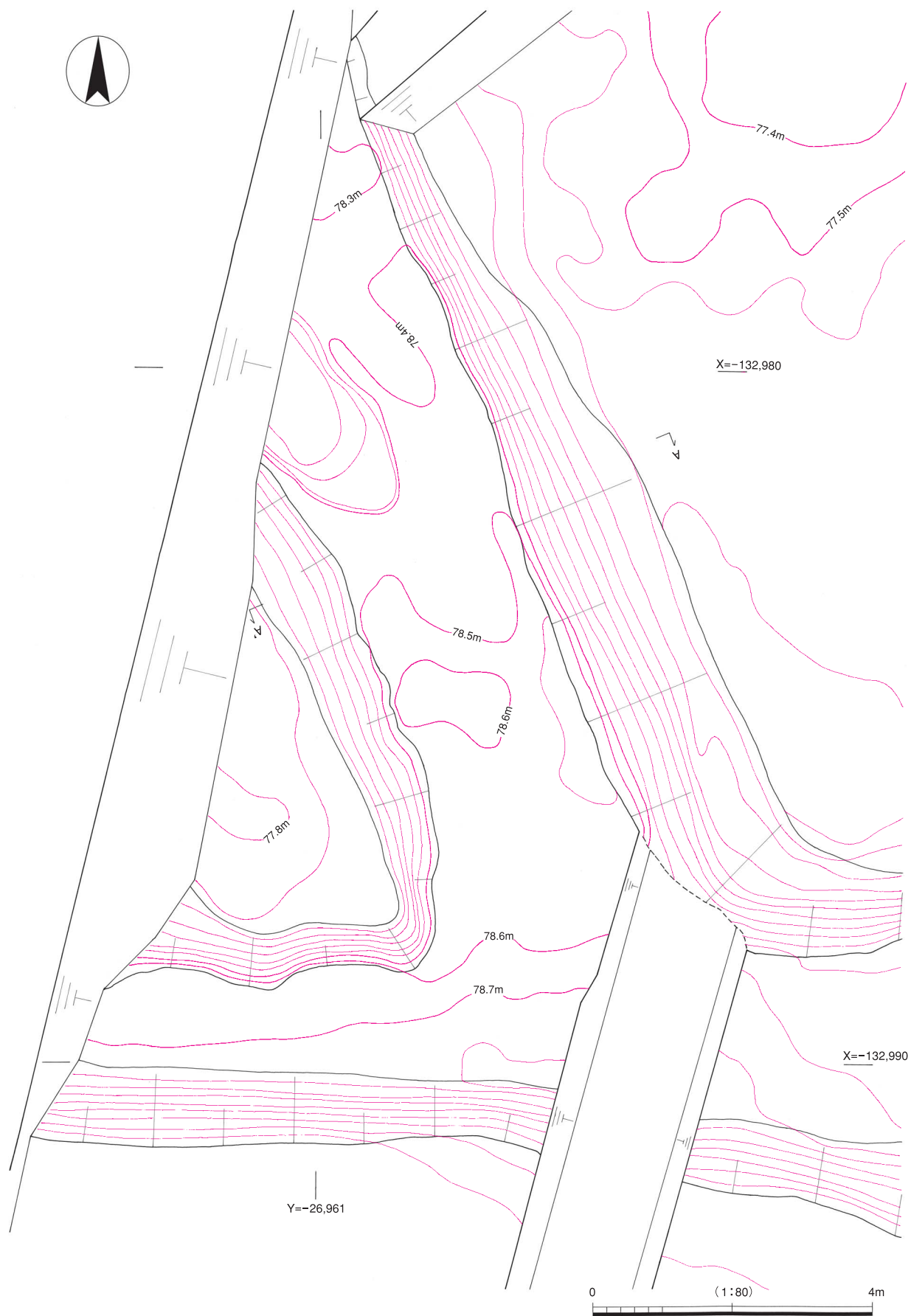


图14 1区第1面255堤防（新段階）平面图

れているが、この部分には粗砂が堆積する事から、谷内を山側から流れくる土砂や水の影響によるものと思われる。この段階には堤防の東西両側に溝を備えており、特に山側となる257溝の規模が大きい。257溝は粗砂によって埋まっているが、この粗砂は古段階の堤防の上端にまで及んでおり、土砂が堤防を越えて西側に及んだ事が分かる。

中段階は、古段階の西端から257溝の東端まで土を盛り上げ規模の拡張を行っている。基底部幅約5m、上端部幅1.3m、検出面からの高さ0.5mを測る。土を積む単位はこの段階が最も大きく、積み方が粗いことが分かる。堤防の両側には溝を備えなくなる。

新段階は、中段階の上にさらに土を積み上げ、西側にも拡張し規模は最大となる。基底部幅5～6m、検出面からの高さ約1m、上端部幅は2.5～3.0mを測るが、上端は近世の水田耕作に伴う削平を受けており、本来の高さと上端幅は不明である。構築方法は、やや質の異なる細砂と粗砂を交互に積んでいくのは古・中段階とおなじであるが、新段階に拡張される西側部分では断面観察により上下に2つの水平面が観察され、大きく3つの工程に分けて構築されている事が分かる。また、この段階は表面を黄褐色の粘質土によって覆っており、古・中段階より入念に仕上げられている。

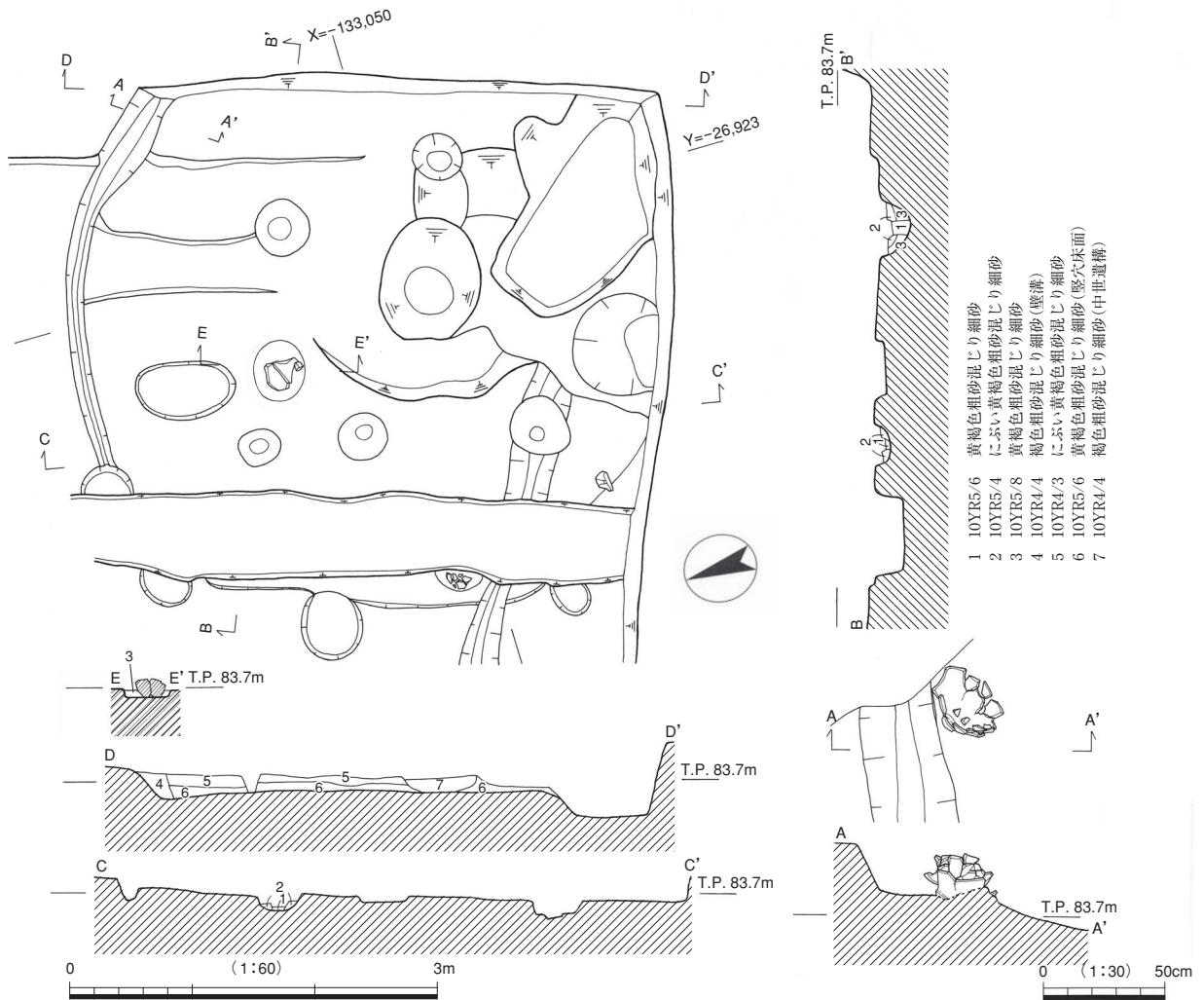


図15 2区305号竪穴建物実測図

### 第3節 2・3区の遺構

2区は標高81.5m前後の段丘面上位面、3区は標高79.5m前後の段丘面下位面に分かれる。3区は近世以降に行われた水田造成に伴う削平により、遺構・遺物は殆ど検出されなかった。2区は今回の調査で最も集中して遺構・遺物が検出された。調査区東部に近代以降の長大な土坑が存在するが、これは肥料と土を混ぜ合わせた後、一定期間寝かせ耕作土を作る為のものである。遺構はすべて地山面で検出され、弥生時代中期前葉の竪穴建物、奈良時代の竪穴建物、中世の大溝・柵などにより区画された建物群などが検出された。また、中世以降の包含層からではあるが、縄文時代中期の土器・石器類が比較的まとまって出土しており、この時期の遺構も存在した事が推定される。

#### (1) 弥生時代の遺構

**305竪穴建物**（図15、図版八） 2区南東隅で検出され、東壁と南壁の大部分が調査区外になる。北東部の遺存状況は比較的良好であったが、これ以外の部分は中世以降の削平及び攪乱を受けており、遺存状況は悪い。特に西側は削平の為に検出面と床面の差がほとんど無かった。この為、規模・平面プラン共に明らかにしがたいが、北壁の屈曲具合などから径6～7mの円形と思われる。検出面から床面までの深さは遺存状況の良い東側で約0.1m、西側では約0.02mであった。床面は地山面まで掘り込んだ後、厚さ0.08mほどの黄褐色粗砂混じり細砂により床が形成されている。壁溝は北側でのみ検出され、幅0.25m、深さ0.2mを測る。推定される建物の中央よりやや北西部に、径30cm、厚さ15cmの台石が据えられている。北東隅部で弥生時代中期前葉の甕が出土する。

**306竪穴建物**（図16・17、図版九） 径5.5mを測る平面プラン円形の焼失住居である。検出面から床面までの深さは0.3m。住居の壁に沿って幅0.15～0.25m、深さ0.1mの壁溝が巡るが、北東部には巡らない。

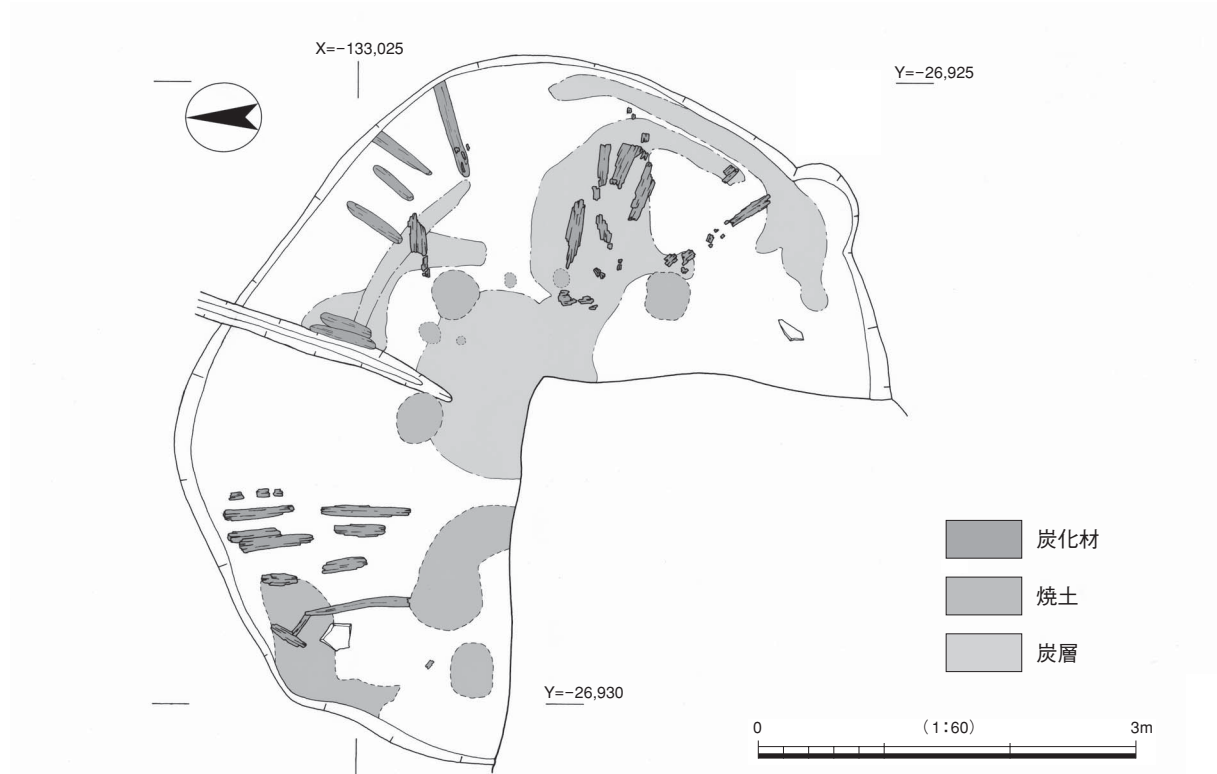
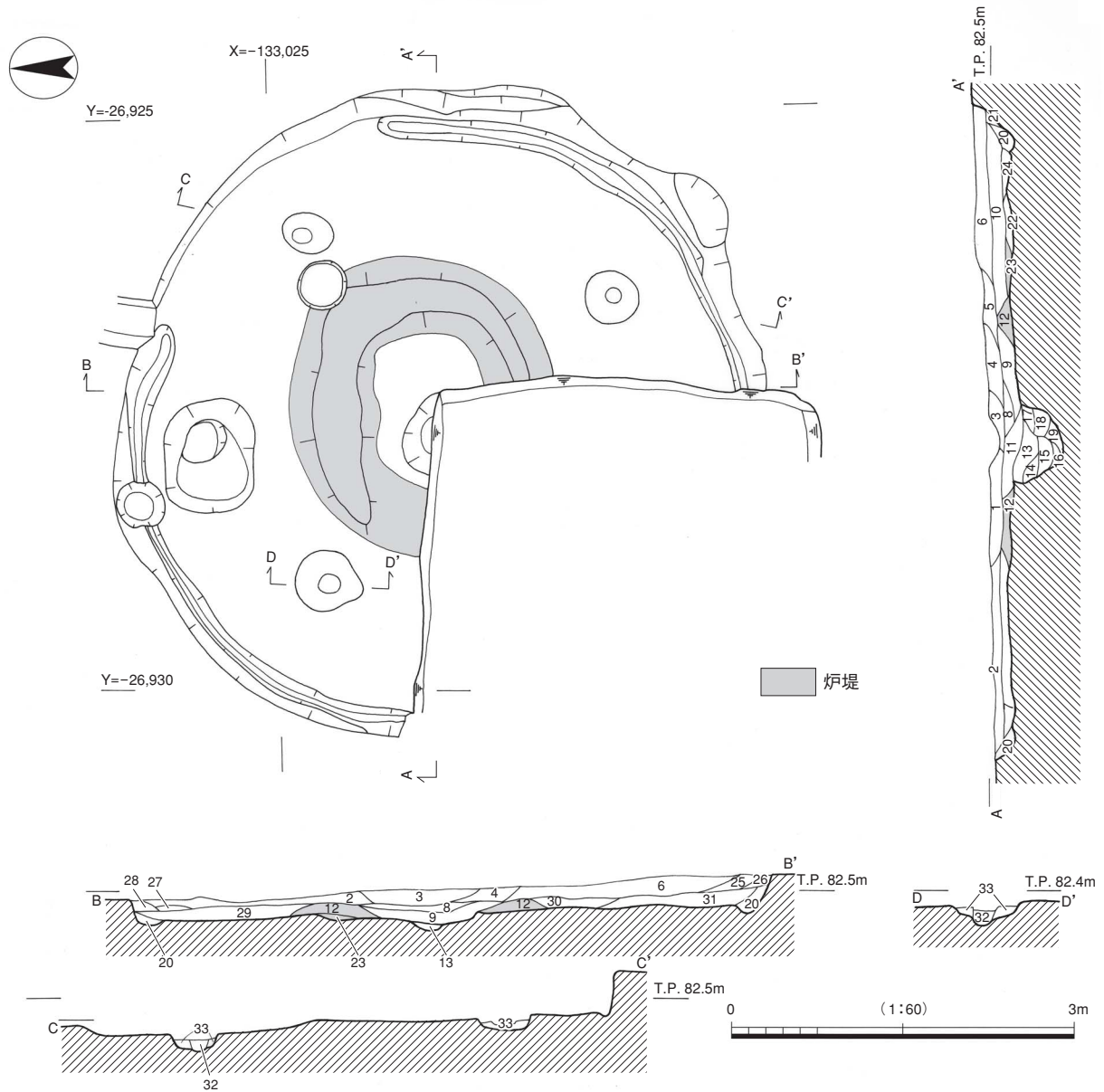


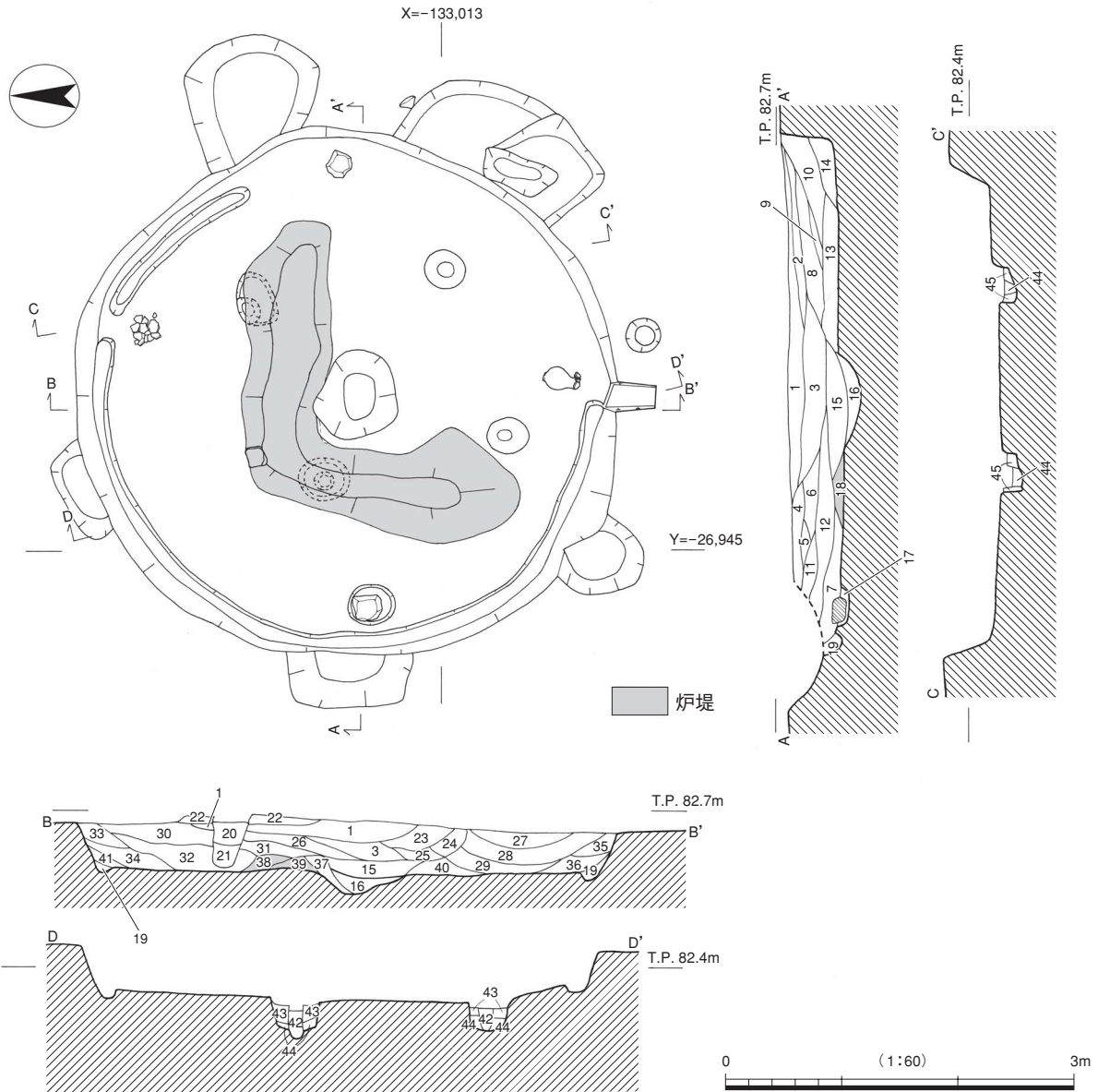
図16 2区306竪穴建物炭化材検出状況実測図





- |    |          |                          |    |          |                       |
|----|----------|--------------------------|----|----------|-----------------------|
| 1  | 10YR4/4  | 褐色粗砂混じり細砂 φ5mm礫含む        | 18 | 7.5YR3/2 | 黒褐色細砂 灰多量に含む          |
| 2  | 10YR5/6  | 黄褐色細砂 φ5mm礫含む            | 19 | 10YR4/4  | 褐色粗砂 灰含む(掘形)          |
| 3  | 10YR4/3  | にぶい黄褐色粗砂混じり細砂 φ5mm礫含む    | 20 | 10YR5/3  | にぶい黄褐色粗砂混じり細砂(壁溝)     |
| 4  | 10YR3/2  | 黒褐色細砂 炭化材含む              | 21 | 10YR5/6  | 黄褐色粗砂混じり細砂            |
| 5  | 10YR3/4  | 暗褐色粗砂混じり細砂               | 22 | 10YR4/3  | にぶい黄褐色細砂 φ5mm礫含む      |
| 6  | 10YR4/4  | 褐色粗砂 灰含む                 | 23 | 5YR4/6   | 赤褐色粗砂混じり細砂 焼土含む(炉堤)   |
| 7  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色粗砂混じり細砂 炭化材含む      | 24 | 2.5Y3/1  | 黒褐色粗砂混じり細砂(火災時堆積層)    |
| 8  | 10YR3/3  | 暗褐色細砂 φ3mm礫含む            | 25 | 10YR5/4  | にぶい黄褐色細砂              |
| 9  | 10YR3/3  | 暗褐色粗砂混じり細砂(炉埋土)          | 26 | 10YR4/3  | にぶい黄褐色細砂              |
| 10 | 10YR4/3  | にぶい黄褐色細砂 φ5mm礫含む(堅穴埋土)   | 27 | 10YR5/4  | にぶい黄褐色粗砂混じり細砂 φ5mm礫含む |
| 11 | 10YR4/2  | 灰黄褐色粗砂混じり細砂              | 28 | 10YR4/3  | にぶい黄褐色粗砂混じり細砂 φ5mm礫含む |
| 12 | 2.5YR3/4 | 黒褐色細砂粗砂混じり φ5mm礫・炭含む(炉堤) | 29 | 10YR4/4  | 褐色粗砂混じり細砂             |
| 13 | 10YR4/3  | にぶい黄褐色細砂 φ5mm礫含む(床面整地土)  | 30 | 10YR4/2  | 灰黄褐色細砂 φ5mm礫・炭化材含む    |
| 14 | 10YR3/2  | 黒褐色粗砂                    | 31 | 10YR5/6  | 黄褐色粗砂混じり細砂 φ5mm礫含む    |
| 15 | 7.5YR3/4 | 暗褐色細砂 焼土・灰含む 弱く被熱(炉床新)   | 32 | 10YR4/6  | 褐色粗砂混じり細砂             |
| 16 | 7.5YR4/3 | 褐色粗砂混じり細砂 焼土・灰含む(炉床古)    | 33 | 10YR5/6  | 黄褐色粗砂混じり細砂            |
| 17 | 10YR3/4  | 暗褐色粗砂混じり細砂(炉埋土)          |    |          |                       |

図17 2区306竪穴建物実測図



- |                                    |                                  |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む          | 24 10YR5/3 におい黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む     |
| 2 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂                | 25 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混じり細砂        |
| 3 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む           | 26 10YR3/4 暗褐色粗砂混じり細砂 炭多量に含む     |
| 4 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂                | 27 10YR2/2 黒褐色粗砂混じり細砂 炭多量に含む     |
| 5 10YR5/4 におい黄褐色粗砂混じり細砂 φ2cmの炭多く含む | 28 10YR3/3 暗褐色粗砂混じり細砂 炭多量に含む     |
| 6 10YR3/2 黒褐色細砂(炭層)                | 29 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり細砂           |
| 7 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂 炭少量含む         | 30 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂            |
| 8 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂                | 31 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂             |
| 9 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂               | 32 10YR4/3 におい黄褐色粗砂混じり細砂(土壌化)    |
| 10 10YR5/8 黄褐色粗砂混じり細砂              | 33 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂(土壌化)        |
| 11 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂              | 34 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂             |
| 12 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂               | 35 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂(土壌化)        |
| 13 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む          | 36 10YR5/4 におい黄褐色粗砂混じり細砂         |
| 14 10YR5/4 におい黄褐色粗砂混じり細砂           | 37 10YR3/4 暗褐色粗砂混じり細砂(炉埋土)       |
| 15 10YR4/3 褐色粗砂混じり細砂 炭含む(炉埋土)      | 38 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む(炉堤)    |
| 16 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂(炉埋土)          | 39 10YR4/3 におい黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む(炉堤) |
| 17 10YR5/8 黄褐色粗砂混じり細砂(石皿堀形)        | 40 10YR4/3 におい黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む     |
| 18 10YR4/3 におい黄褐色粗砂混じり細砂 炭含む(炉堤)   | 41 10YR5/4 におい黄褐色粗砂混じり細砂         |
| 19 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂(壁溝)           | 42 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂            |
| 20 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂(中世ビット)        | 43 10YR5/8 黄褐色粗砂混じり細砂            |
| 21 10YR3/6 黄褐色粗砂混じり細砂(中世ビット)       | 44 10YR6/6 明黄褐色粗砂混じり細砂           |
| 22 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混じり細砂 炭多量に含む   |                                  |
| 23 10YR3/2 黒褐色粗砂混じり細砂 炭多量に含む       |                                  |

図18 2区730竪穴建物実測図

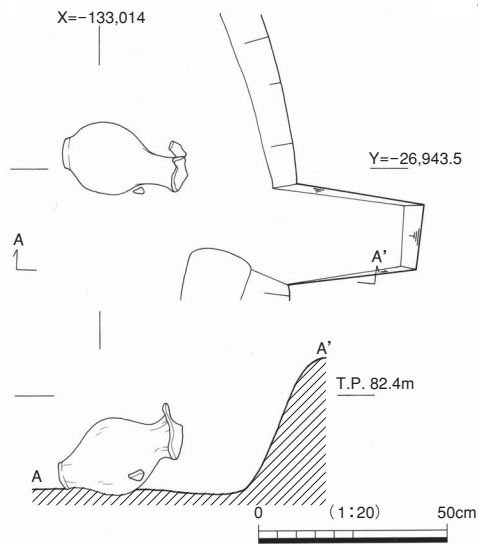


図19 2区730竪穴建物土器出土状況実測図

床面は地山面であり、貼り床は認められなかった。主柱穴は3箇所を確認され、掘形径0.4～0.5m、深さ0.1～0.2mを測る。建物中央には炉が設けられ、炉掘形は径約0.6m、深さ0.5mを測る。掘形内は炭層が堆積しており、この上面では弱い被熱痕跡が認められる事から炉床と考えられる。炉の周辺には炭混じりの粗砂により炉堤が築かれており、高さ約0.15m、幅約0.7mを測る。

炭化材は、放射状に検出されたが中央部では少ない。炭化材の遺存状況は、北半部が良く南半部はやや悪い。炭化材は、径10cmを測るものが多く、断面円形を保つものもあり、垂木と考えられる。柱を思わせるような太い炭化材は検出されなかった。南東部の壁溝は炭で埋没しており、壁材が焼失したものであると思われる。炭化材の依存状況の良好なものについて樹

種鑑定を行った結果、アカガシ亜族12点、サカキ2点、シノキ属2点であった。被熱痕跡は炉堤の一部にあるのみで、床面では認められない。炭化材以外にも灰状の炭化物と焼けた土ブロックが認められ、屋根材とそれを押える粘土や土の可能性も考えられる。遺物の出土は極めて少なく、弥生時代中期前葉の甕の小片のみであった。炭化材を放射性炭素年代測定（AMS）した結果、330-200calBC（75.8%）、390-340calBC（19.6%）を中心とした値が得られており、紀元前4世紀前半から3世紀末の範囲に収まる。

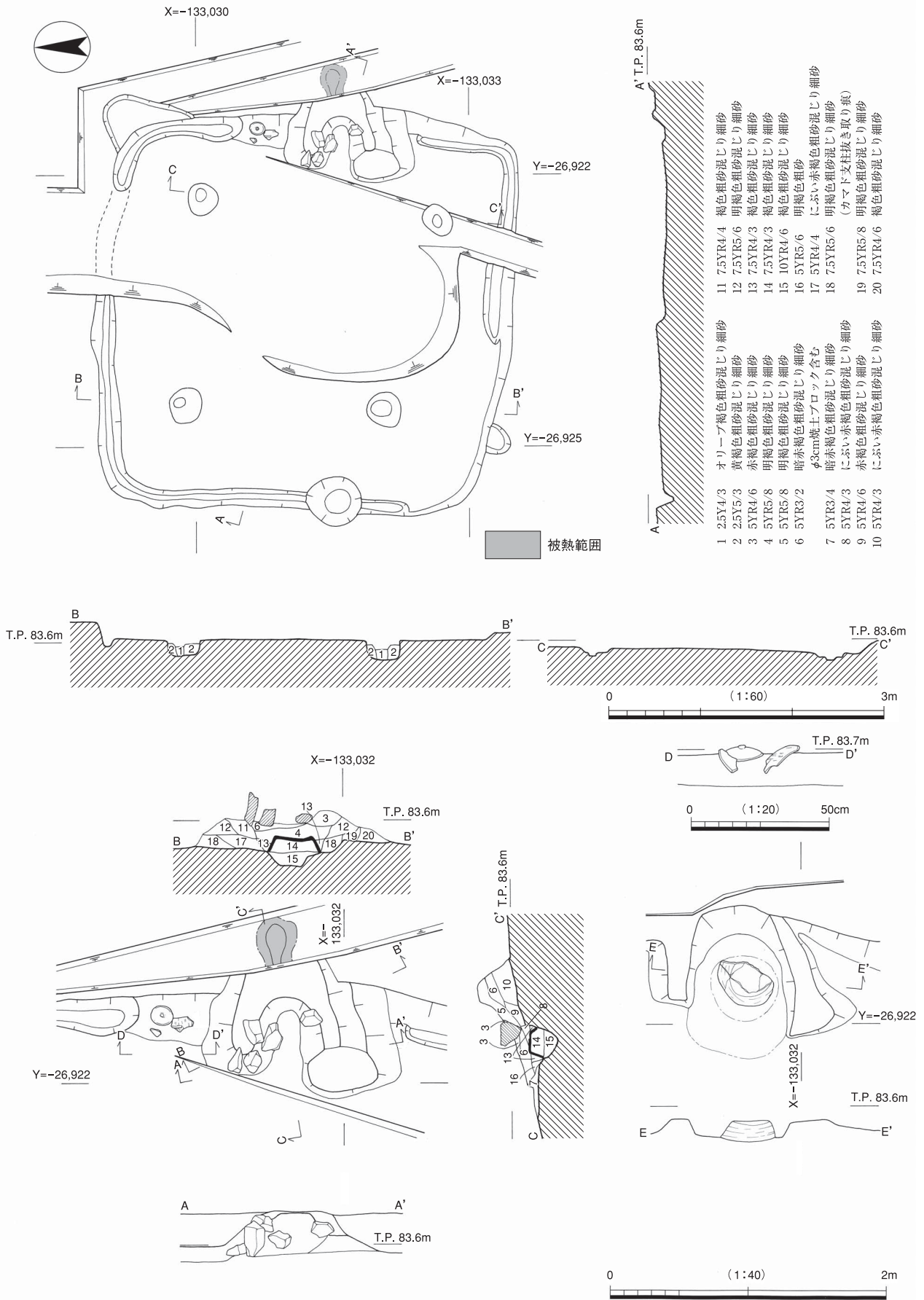
730竪穴建物（図18・19、図版一〇・一四） 径4.6mの円形建物である。検出面から床面までの深さは約0.4mと深い。建物の壁に沿って幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が巡るが、南東側4分の1には存在しない。床面は地山面であり、貼り床は認められなかった。主柱穴は4箇所を確認されるが、炉堤の下層で検出され、同時並存でない可能性もある。建物中央には炉が設けられ、炉掘形は長辺0.8m、短辺0.65m、深さ0.4mを測り、掘形内には炭層が厚く堆積する。炉の北西には炭・灰を多量に含む粗砂により平面L字形の炉堤が築かれており、高さ約0.1m、幅約0.7mを測る。床面では3箇所ですら扁平な石が検出された。1基は炉の北西側で、残る2基は炉を挟んで東西の壁溝際で検出されている。石はいずれも径約20cm、厚さ約10cmの扁平なものである。西壁際のは石皿で、径0.4m、深さ0.08mの掘形をもって据えられている。他の2基の石は掘形をもたず、炉堤、床面の直上に置かれた状態で検出している。南壁際では弥生時代中期前葉の壺が出土する。なお、埋土の上半は中世の炭層が堆積しており、完全に埋没する事無く長く地上に凹みとして残され、中世に灰・炭捨て場として利用されている。

## （2）奈良時代の遺構

308竪穴建物（図20、図版一一） 南北4.5m、東西4.4mを測る方形建物。検出面から床面までの深さは約0.1m。建物の壁に沿って幅0.2～0.3m、深さ0.1mの壁溝が巡るが、南西コーナー部では巡らない。主柱穴は4箇所を確認された。掘形の径は約0.4mを測る。

西壁中央に設けられたカマドは、作り替えがあり新旧の2時期がある。カマドの主軸は、いずれの段階も壁面に直角ではなくやや南に振っている。新段階の袖部の先端部、及び燃焼部は後世の溝によって失われているが、平面の形状は「U」字状を呈すると思われる。袖部の残存長は北側が0.7m、南側は0.5mを測る。北側の袖部には縦30cm、横15cmの袖石が、燃焼部には支柱となる径約20cmの石が設置される。





- |    |          |                            |
|----|----------|----------------------------|
| 1  | 25Y4/3   | オリーブ褐色粗砂混じり細砂              |
| 2  | 25Y5/3   | 黄褐色粗砂混じり細砂                 |
| 3  | 5YR4/6   | 赤褐色粗砂混じり細砂                 |
| 4  | 5YR5/8   | 明褐色粗砂混じり細砂                 |
| 5  | 5YR5/8   | 明褐色粗砂混じり細砂                 |
| 6  | 5YR3/2   | 暗赤褐色粗砂混じり細砂                |
| 7  | 5YR3/4   | 暗赤褐色粗砂混じり細砂                |
| 8  | 5YR4/3   | にぶい赤褐色粗砂混じり細砂              |
| 9  | 5YR4/6   | 赤褐色粗砂混じり細砂                 |
| 10 | 5YR4/3   | にぶい赤褐色粗砂混じり細砂              |
| 11 | 7.5YR4/4 | 褐色粗砂混じり細砂                  |
| 12 | 7.5YR5/6 | 明褐色粗砂混じり細砂                 |
| 13 | 7.5YR4/3 | 褐色粗砂混じり細砂                  |
| 14 | 7.5YR4/3 | 褐色粗砂混じり細砂                  |
| 15 | 10YR4/6  | 褐色粗砂混じり細砂                  |
| 16 | 5YR5/6   | 明褐色粗砂                      |
| 17 | 5YR4/4   | にぶい赤褐色粗砂混じり細砂              |
| 18 | 7.5YR5/6 | 明褐色粗砂混じり細砂<br>(カマド支柱抜き取り痕) |
| 19 | 7.5YR5/8 | 明褐色粗砂混じり細砂                 |
| 20 | 7.5YR4/6 | 褐色粗砂混じり細砂                  |

図20 2区308竪穴建物実測図

また、南側の裾部にも心材になると思われる石が検出されている。

旧段階のカマドも袖部の先端は既に失われているが、北裾部が残存長0.6m、南裾部が残存長0.9mを測る。燃焼部の奥には、支柱に転用された須恵器の盤が底部を上面にして設置されていた。盤は一部が欠損しており、内部には炭・焼土を多量に含む土が充填されていた。また、この盤を取り上げた後、設置面で径0.15m、深さ0.1mのピットが検出された。このことから、この盤以前にもなんらかの支柱が存在したと思われる。

カマドの北側、壁際からは土師器の蓋、鍋の体部が出土する。竪穴建物の時期は、カマド支柱の須恵器やその他の出土遺物から8世紀前半に位置づけられる。

### (3) 中世の遺構

この時代の遺構数をもっとも多く、複数の掘立柱建物・土坑・溝などが検出された。掘立柱建物は溝・柵などで区画されており、中世の居館と考えられる。

#### 1. 掘立柱建物

中世の掘立柱建物は、2区の南西部、南東部、中央北側で3棟が検出されている。南半部の中央でも中世の遺物を含むピットが検出されており、建物が存在したことは伺えるが復元するには至らなかった。

掘立柱建物1(図21、図版一三) 2区南西部で検出された東西棟建物。桁行4.9m、梁行3.5m。柱間は不等間で1.2~1.8mを測る。南西部には束柱があり、建物内の一部が床を持っていたことが分かる。建物面積は17.5㎡。柱掘形は側柱が0.4~0.5m、束柱がやや小さく0.35~0.4m、深さは0.15~0.4m、柱痕の径は0.15mを測る。堀1の存在から屋敷地の南西隅の建物であることが分かる。

掘立柱建物2(図22、図版一四) 2区の北東部で検出された、身舎の西側に縁、北東部に張り出し部を持つ南北棟建物。南北9.0m、東西9.4mを測る。身舎部分は桁行9.0m、梁行3.6m、縁は東西幅1.2m、北東部の張り出しは東西4.6m、南北2.4mを測る。建物面積は54.24㎡。身舎は、北半が束柱を持ち南半にはない事から、身舎の北側2/3が床部、南側1/3が土間部であった事が分かる。柱掘形は身舎も縁も差がなく、0.4~0.5m、深さは0.15~0.4m、柱痕の直径は0.25mを測る。後述するカマド基底部である363土坑、389・478土坑などの厨房施設に伴う廃棄土坑、730竪穴建物を利用した灰捨て場などが隣接する事から、厨房施設を伴う建物と考えられる。

掘立柱建物3、728土間(図23、図版一三) 2区の南東部で検出された、南北6.7m以上、東西4.5m以上を測る南北棟建物。東側が攪乱によって失われている為、全容は不明である。728土間を建物内に持つ土間敷建物で南妻にカマドが構築される。柱掘形は円形で0.4~0.6m、深さ約0.15m、柱痕の直径は0.15mを測る。土間の構築は、南北3.4m、東西2.5m以上、深さ0.1mの土坑を掘り、この下半を粗砂混じりの細砂を細かい単位で埋め、上半を多量の土器や焼土を含む細砂で硬く締めながら埋めていく。土器混じりの細砂は、建物の西側にも広がる事から、建替えによる建物の拡張が存在したことが伺える。土坑南側底面ではカマドの基底部となる黄褐色の粘土が貼られていた。南北1.0m、東西1.3mを測る。この粘土の中央部上面では被熱痕跡が認められる。土間構築土の上層からは14世紀代の瓦器・土師器などが多量に出土する。厨房施設を伴う建物が、掘立柱建物2から掘立柱建物3へと移動した事がわかる。

#### 2. 柵

柵と捉えられる柱穴列は2調査区の西側で3列検出している。いずれも屋敷地の西側の外郭を区画す

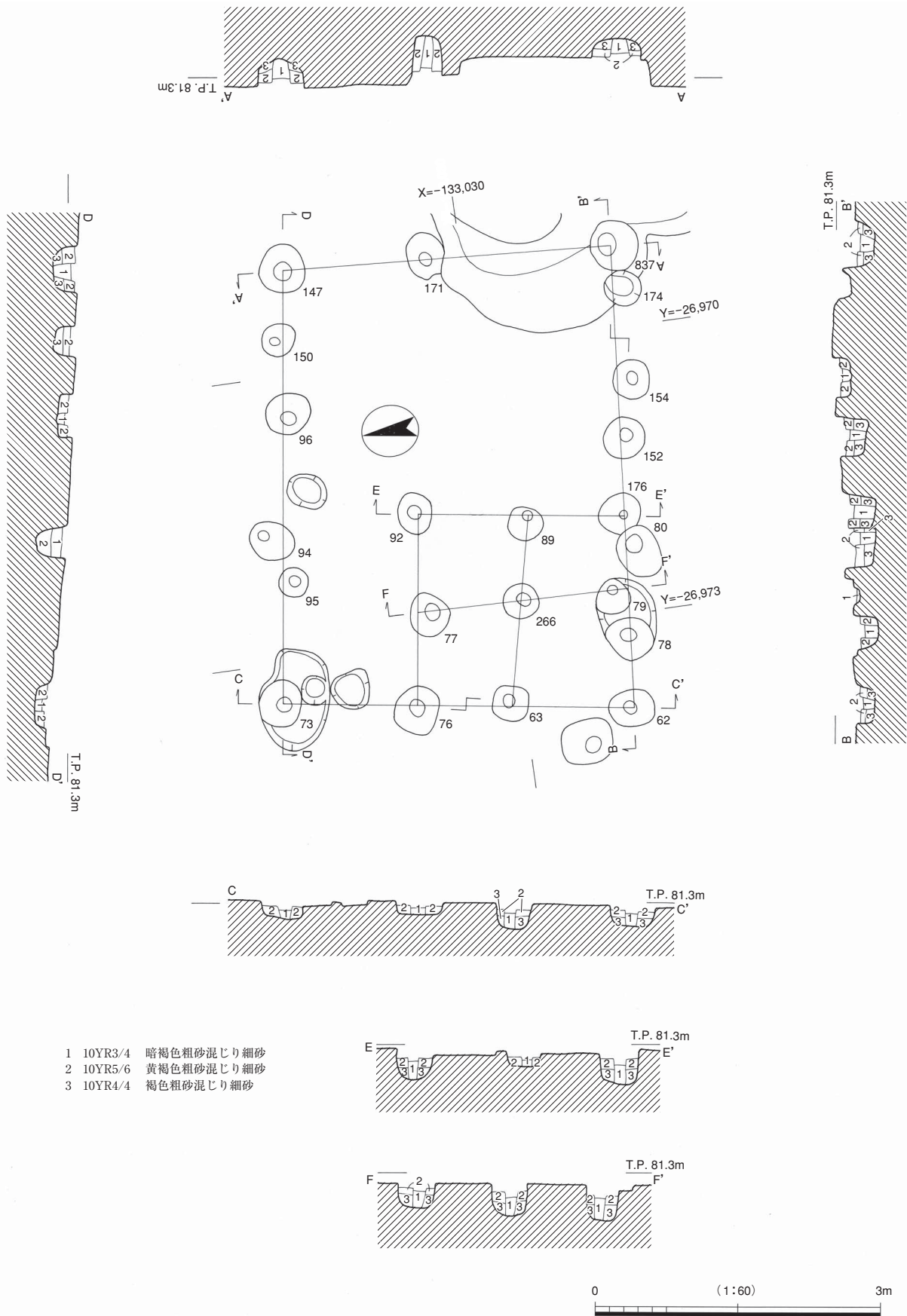
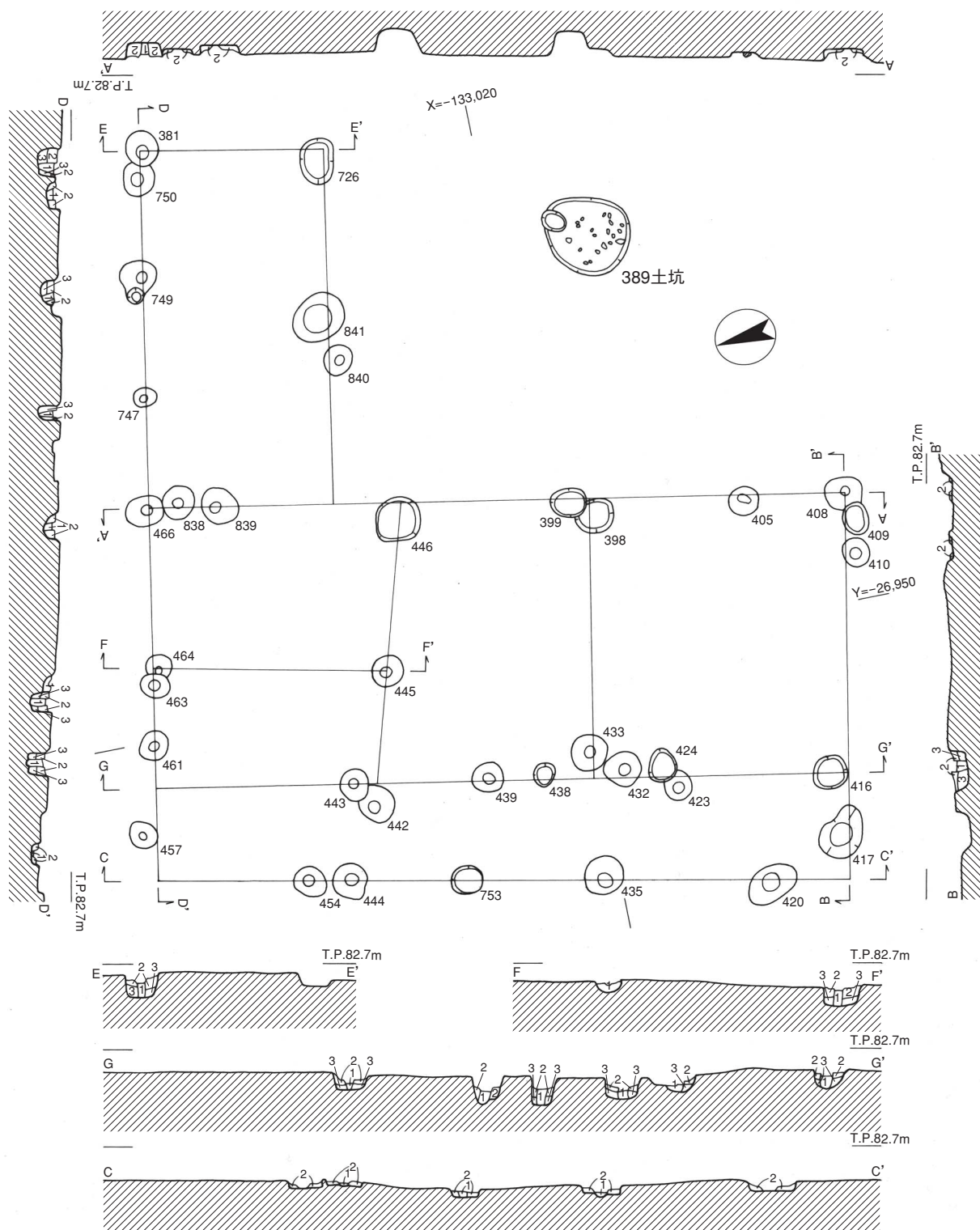


図21 2区掘立柱建物1実測図





- 1 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂
- 2 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂
- 3 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂

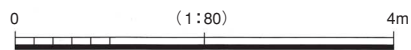


図22 2区掘立柱建物2実測図

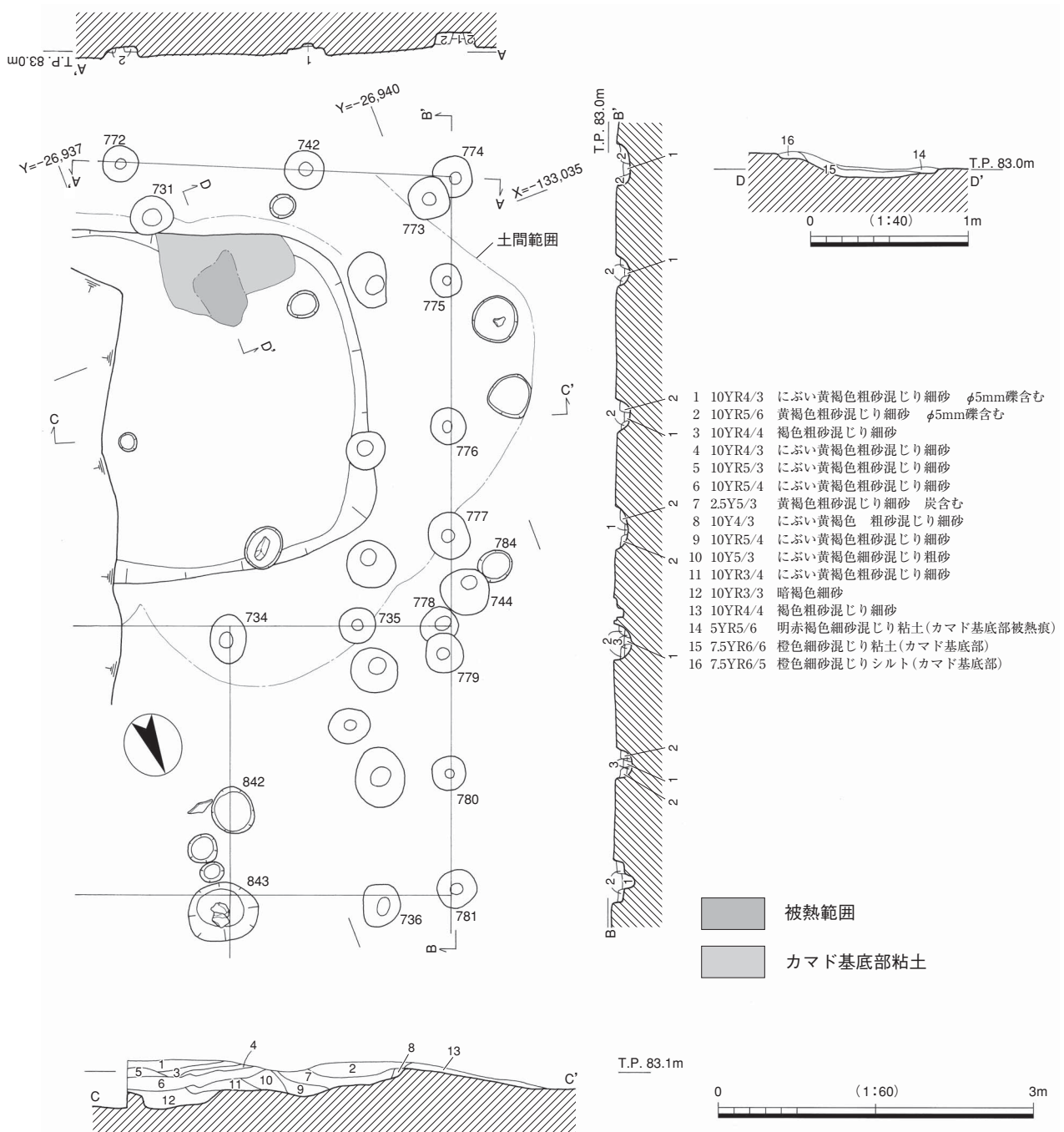


図23 2区掘立柱建物3実測図

るものと考えられる。柱掘形の規模は、掘立柱建物のものよりもやや小さいものが多い。

柵1 (図24、図版一三) 2区南西端部で検出された、南北から東西方向のL字形に曲がる柵。延長11.4mを検出している。柱掘形は円形で径0.3~0.4m、深さ約0.2m、柱痕の径は0.15mを測る。北端から東へ曲り、その延長方向が柵2の南端に延びる事から、柵1と柵2はかぎの手状につながる柵である可能性が高い。

柵2・3 (図25、図版一五) 2区北西部で検出された南北方向の柵。溝158を挟んで併行して検出された。柵1の柱掘形は円形で径0.4~0.6m、深さ約0.1m、柱痕の径は0.15mを測る。柵2の柱掘形は、円形で0.3~0.4m、深さ約0.1m、柱痕の径は0.15mを測る。柵2の南端の柱穴は158溝の手前である事、158溝が西へ曲がる事などから柵2は柵1とつながり一つの柵になる可能性が高い。





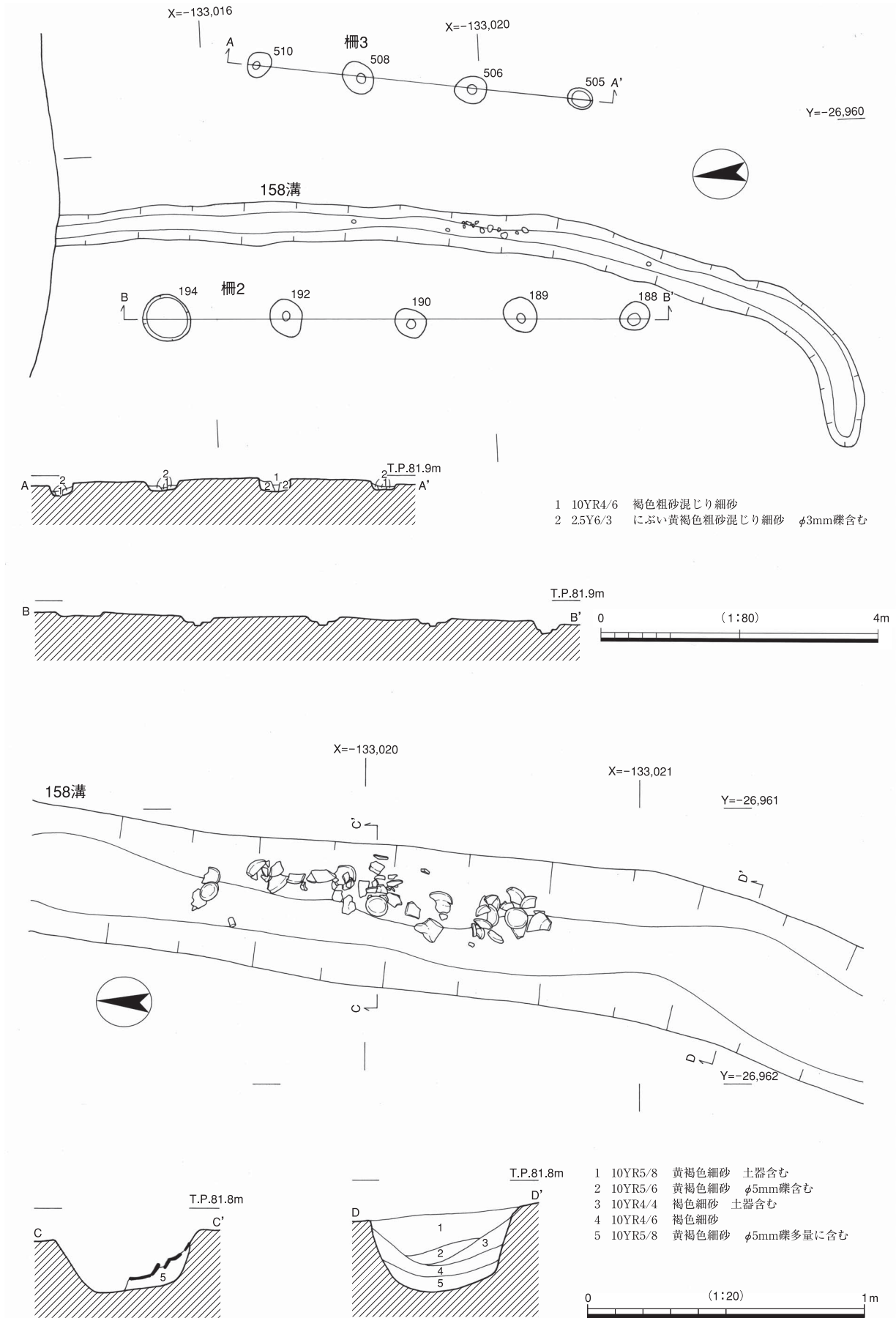


図25 2区柵2・3、158溝実測図



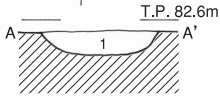
图26 2区北东部沟、土坑配置图



図27 2区南西部溝、土坑配置図

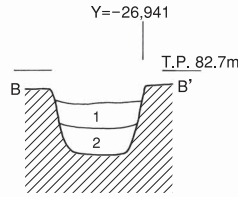


467土坑  
X=-113,013.5



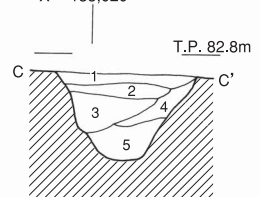
- 1 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり細砂

330土坑



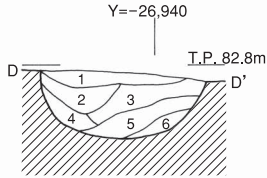
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂

362土坑



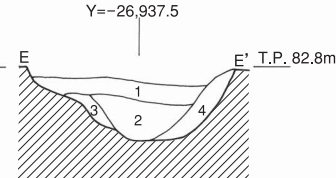
- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂  
2 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂  
3 2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂  
4 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂  
5 2.5Y5/6 黄褐色細砂

360土坑



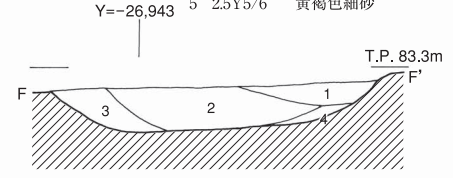
- 1 10YR4/6 褐色細砂  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂  
3 10Y5/6 黄褐色細砂  
4 10Y5/8 黄褐色細砂  
5 10YR4/6 褐色細砂  
6 2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂

334土坑



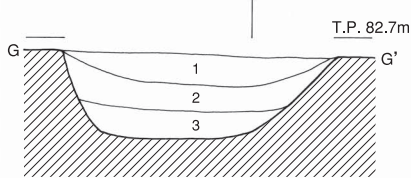
- 1 10YR5/6 黄褐色細砂  
2 10YR5/8 黄褐色細砂 やや粘質に  
3 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂  
4 10YR4/4 褐色細砂  
5 10YR5/8 黄褐色細砂

365土坑



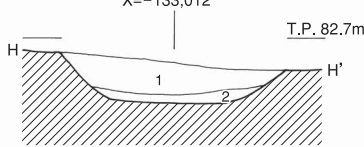
- 1 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂  
3 10YR3/3 暗褐色粗砂混じり細砂  
4 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂 φ5mm礫含む

469土坑



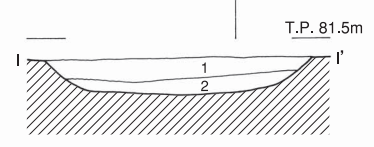
- 1 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂  
2 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂  
3 2.5YR5/3 黄褐色細砂

476土坑



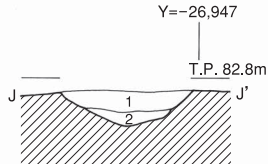
- 1 10YR5/6 黄褐色細砂  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂

120土坑



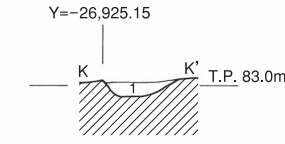
- 1 2.5Y5/3 黄褐色細砂  
2 5Y7/1 灰白色粗砂

581土坑



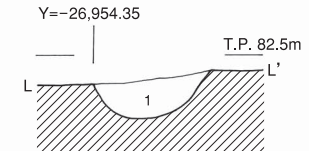
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂  
2 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂

278溝



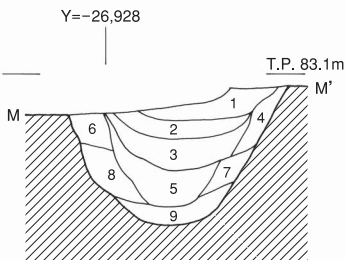
- 1 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂

327溝



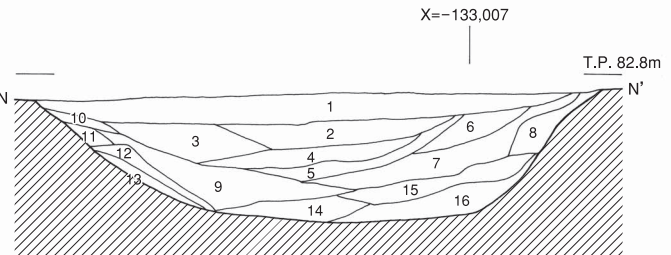
- 1 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂

276溝



- 1 10YR3/4 暗褐色粗砂混じり細砂 φ5mm礫少量含む  
2 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂 粘性有り  
3 10YR4/4 褐色細砂 粘性有り  
4 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂 粘性有り  
5 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粗砂  
6 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂  
7 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂  
8 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂  
9 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり粗砂

276溝



- 1 10YR4/4 褐色細砂  
2 10YR4/6 褐色細砂  
3 10YR6/6 明黄褐色細砂  
4 2.5Y4/6 オリーブ灰色細砂  
5 2.5Y5/4 黄褐色細砂 やや粘質  
6 2.5Y5/6 黄褐色細砂  
7 2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂  
8 2.5Y5/3 黄褐色細砂  
9 2.5Y5/6 黄褐色細砂  
10 2.5Y5/4 黄褐色細砂  
11 10YR4/6 褐色細砂  
12 2.5Y5/4 黄褐色細砂  
13 2.5Y5/3 黄褐色細砂  
14 2.5Y5/4 黄褐色細砂  
15 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂  
16 2.5Y5/3 黄褐色細砂

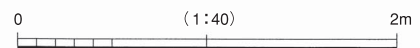


図28 2区溝、土坑断面図

の雨落ち溝などとは考えがたい。276溝と平行しその間に顕著な遺構が存在しない事などから、276溝と278溝は併存しこの間が通路となる可能性が高い。そのように考えた場合、この北東側が屋敷地の出入り口になると推定される。

327溝（図26・28） 2調査区の北東部で検出された南北溝。幅0.6m、深さ0.2mを測る。掘立柱建物2の西側に近接して検出されており、その雨落ち溝の可能性も考えられる。しかし、北端では溝と建物の距離が1.8mと離れることから断定はできない。

#### 4. 土坑

検出地点には一定のまとまりがあり、柵1・2西側の屋敷地外側になる部分と掘立柱建物2の東側に集中する。掘立柱建物2は厨房機能を持つと考えられる事から、これに伴う廃棄土坑の可能性が高い。

53土坑（図27・29） 2区南西部で検出された。平面円形を呈する。東西3.0m、南北3.75m、深さ0.8mを測り、断面形は楕円状を呈する。柵1の西側にあり、屋敷地の外側にあることが分かる。遺物は、13世紀代の土器類が土坑の下層より出土する。

120土坑（図27・28） 2区南西部で検出された。東西1.6m、南北1.4m、深さ0.2mを測る。122土坑に先行する。

122土坑（図27・29、図版一二） 2区南西部で検出された。東西3.4m、南北2.3m、深さ0.5mを測る。掘立柱建物1の南東部の柱穴は、この土坑の下層で検出された。13世紀代の土器類が出土する。

157土坑（図27・29） 2区南西部で検出された。平面形は不整形な方形。南北2.8m以上、東西2.6m、深さ0.9mを測る。断面形は箱型を呈する。柵2、158溝の西側に位置し、屋敷地の外側にあることが分かる。上層で20cm大の多量の石と13世紀代の煮沸具を含む土器類が出土する。

330土坑（図26・28） 2区北東部で検出された。平面形は楕円形を呈する。南北2.0m以上、東西2.2m、深さ0.4mを測る。土坑内からは、土師器・瓦器・煮沸具などと共に長さ約20cmの板状の焼土などが出土している。

334土坑（図26・28） 2区北東部で検出された。平面形は楕円形を呈する。南北1.2m、東西1.2m、深さ0.35mを測る。13世紀代の土器の小片が出土する。

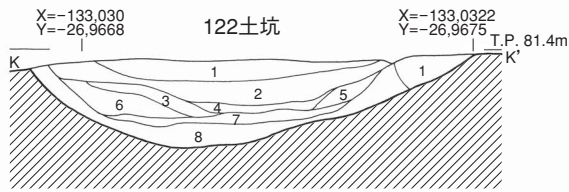
360土坑（図26・28） 2区北東部で検出された。平面形は楕円形を呈する。南北1.5m以上、東西1.0m、深さ0.35mを測る。362土坑に先行する土坑。土坑内より13世紀代の土師器などが出土する。

362土坑（図26・28） 2区北東部で検出された。平面形は楕円形を呈する。南北0.8m以上、東西1.1m、深さ0.45mを測る。360土坑埋没後に掘られた土坑。土坑内より13世紀代の瓦器などが出土する。

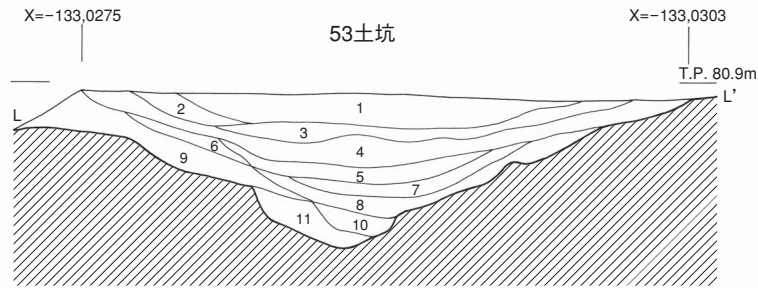
363土坑（図26・30、図版一四） 2区北東部で検出された。平面形は方形を呈する。南北2.4m以上、東西2.2m、深さ0.3mを測る。362土坑に先行し位置的には365土坑と併行して存在する。土坑内からは煮沸具、被熱痕跡のある土管形土製品などと共に長さ約20cmの板状の焼土などが出土しており、厨房施設に伴う廃棄土坑と考えられる。

365土坑（図26・28） 2区北東部で検出された。平面形は方形を呈する。南北2.1m、東西1.8m、深さ0.25mを測る。土坑内からは13世紀代の土師器・瓦器などが出土する。

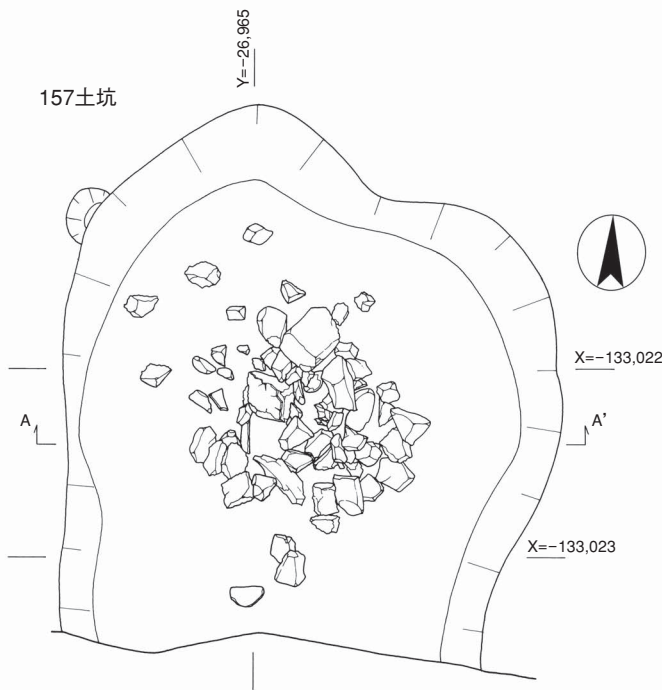
389土坑（図26・30、図版一四） 2区北東部で検出された。径1.0m、深さ0.6mを測る円形の土坑。埋土は大きく2層に分かれる。上層では拳大の礫が厚さ0.15mで土坑全面に検出される。下層では土坑の東半のみを、拳大の石で埋めており、厚さ0.4mを測る。性格は明らかにしがたいが、石を充填する意味としては柱の根固め、あるいは湿気抜きが考えられる。規模の大きい事と独立した土坑である事か



- |   |         |           |           |
|---|---------|-----------|-----------|
| 1 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色細砂  | φ5mm礫多量含む |
| 2 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色細砂  | φ5mm礫多量含む |
| 3 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色細砂  |           |
| 4 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色細砂  |           |
| 5 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂  |           |
| 6 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色細砂  | φ5mm礫含む   |
| 7 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ褐色細砂 | φ5mm礫含む   |
| 8 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂  | φ5mm礫多量含む |



- |    |         |             |      |
|----|---------|-------------|------|
| 1  | 10YR4/6 | 褐色細砂        |      |
| 2  | 10YR5/6 | 黄褐色細砂       |      |
| 3  | 10YR4/4 | 褐色細砂        | 土壌化層 |
| 4  | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂    |      |
| 5  | 10YR4/4 | 褐色微砂        |      |
| 6  | 10YR5/8 | 黄褐色細砂       |      |
| 7  | 10YR5/6 | 黄褐色細砂       |      |
| 8  | 10YR4/6 | 褐色細砂        |      |
| 9  | 10YR5/4 | にぶい黄褐色細砂~中砂 |      |
| 10 | 10YR4/4 | 褐色細砂        |      |
| 11 | 10YR4/6 | 褐色細砂        |      |



- |    |          |                |              |
|----|----------|----------------|--------------|
| 1  | 10YR4/2  | 灰黄褐色細砂         | φ3~30cm石・炭含む |
| 2  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色細砂       |              |
| 3  | 10YR5/3  | にぶい黄褐色細砂       |              |
| 4  | 10YR4/4  | 褐色細砂           |              |
| 5  | 2.5Y4/3  | オリーブ褐色細砂       | やや粘質         |
| 6  | 2.5YR5/3 | 黄褐色中砂          | 炭層ブロック状に含む   |
| 7  | 2.5Y4/2  | 暗灰黄色細砂に2.5Y3/1 | 黒褐色細砂 炭含む    |
| 8  | 2.5YR6/3 | にぶい黄色細砂        |              |
| 9  | 2.5YR6/4 | にぶい黄色細砂        |              |
| 10 | 2.5Y7/2  | 灰黄色粗砂          |              |
| 11 | 10YR6/6  | 明黄褐色細砂         |              |
| 12 | 2.5Y6/2  | 灰黄色粗砂          |              |
| 13 | 2.5Y7/1  | 灰白色粗砂          |              |

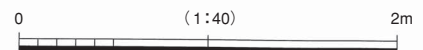
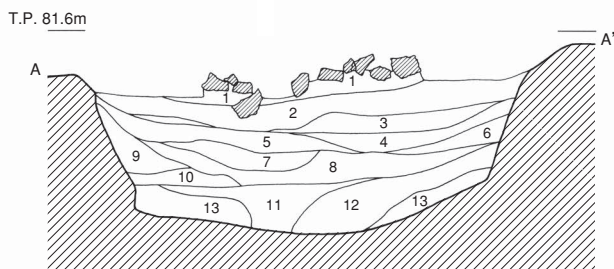


図29 2区53・122・157土坑実測図



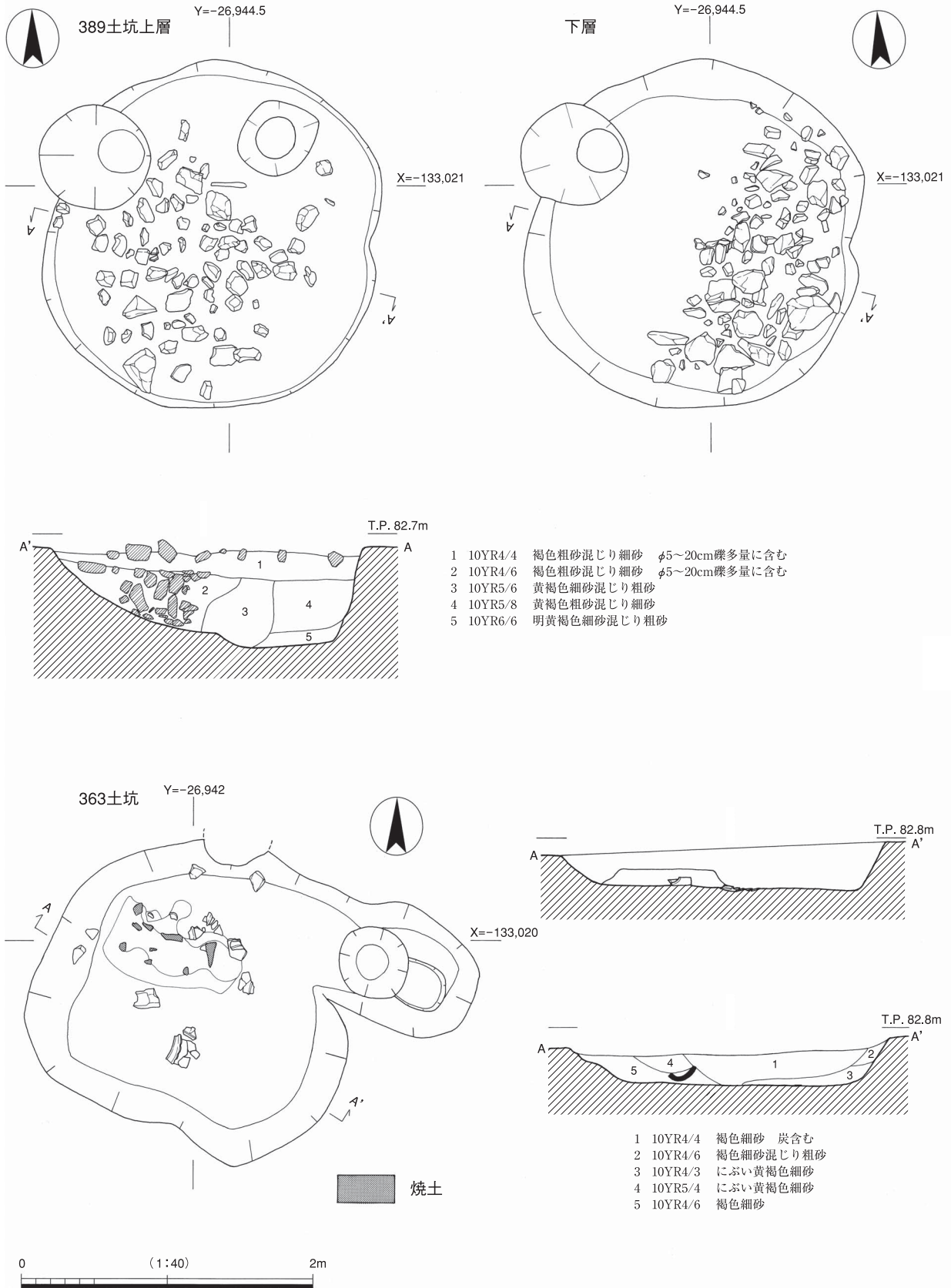


図30 2区363・389土坑実測図

ら、柱穴とは考えられない。湿気抜きの必要性のあるものとして火を使用するカマドがある。周辺には灰捨て場など厨房に関連する遺構が存在することから、屋外型カマドの可能性が考えられる。

467土坑（図26・28） 2区北西部で検出された。平面形は長方形を呈する。南北0.6m、東西1.9m、深さ0.15mを測る。掘立柱建物2の北側に方位を揃えて隣接する。

469土坑（図26・28） 2区北東部で検出された。平面形は円形を呈し、径1.5m、深さ0.45mを測る。埋土より14世紀代の土師器・瓦器が出土する。

476土坑（図26・28） 2区北東部で検出された。平面形は長方形を呈する。南北1.2m、東西0.5m以上、深さ0.2mを測る。埋土より14世紀代の瓦器が出土する。

## 5. その他の遺構

2区ではほぼ完形の土器が出土する幾つかのピットを検出されている。多くは掘立柱建物1の北東部の屋敷地の南西部と考えられる地点で検出されている。柱痕が認められない事などから、屋敷地境界付近の地鎮遺構の可能性もある。また、723焼土坑は炭焼窯の可能性が考えられる、被熱痕跡を持つ土坑である。

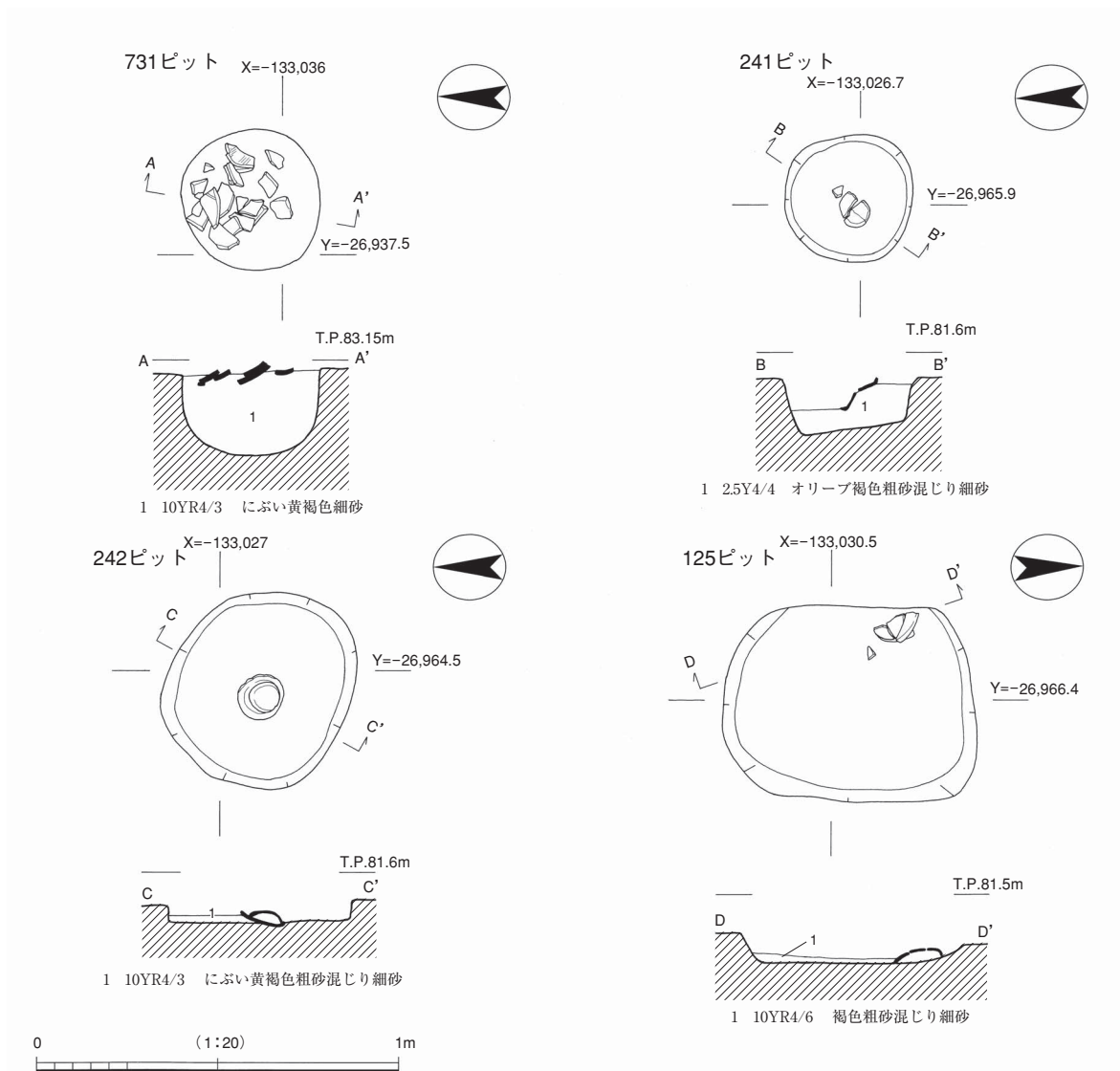


図31 2区ピット実測図

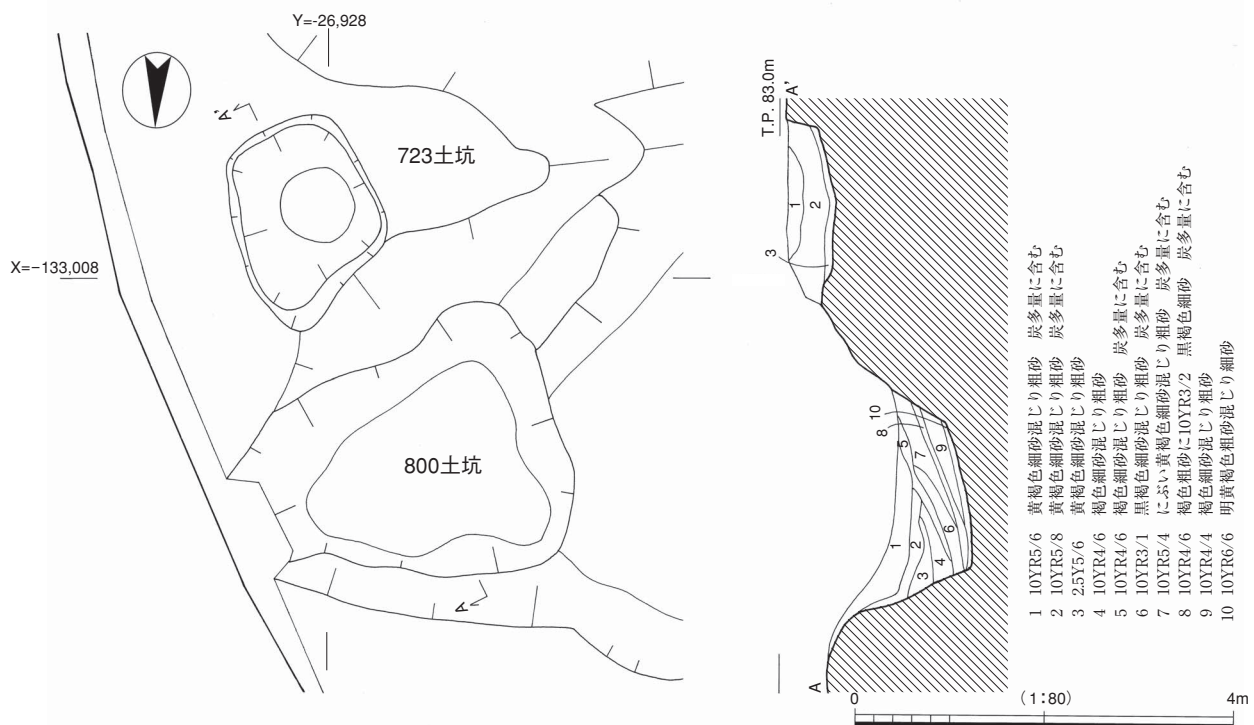


図32 2区723焼土坑実測図

125ピット (図27・31) 2区南西部で検出された。南北0.7m、東西0.5m、深さ0.2mを測る。ピットの北西部よりほぼ完形の土師器皿が出土するが、後に掘られた122土坑によって一部を欠損する。

241ピット (図27・31) 2区南西部で検出された。158溝の南側に位置する。径0.35m、深さ0.15mを測る。ピット内より土師器皿・瓦器が複数出土する。ピットの規模は柱穴と同じであるが、柱痕跡は確認されなかった。

242ピット (図27・31、図版一二) 2区南西部で検出された。241ピットの西側に近接して位置する。径0.55m、深さ0.05mを測る。ピットの中央部からは大小の土師器皿が合せ口にした状態で出土している。これ以外にも一部破損した土師器皿が出土する。ピットの規模は柱穴と同じであるが、柱痕跡は確認されなかった。

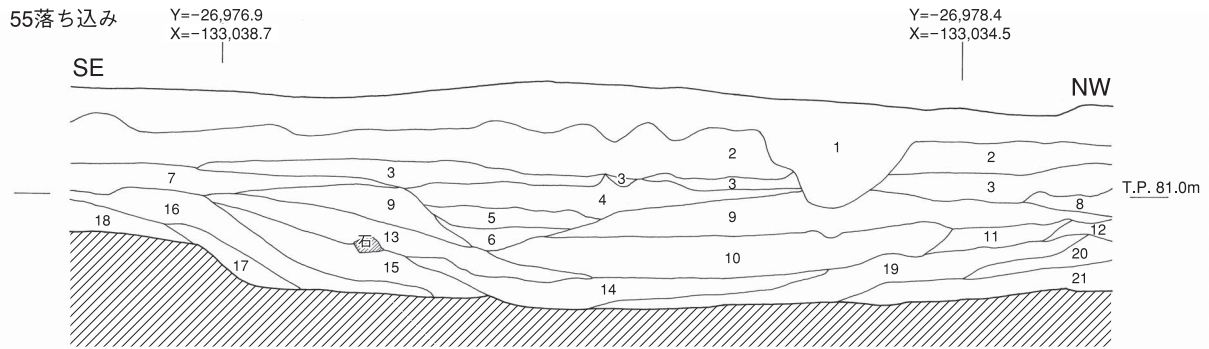
581ピット (図27・28) 2区南西部で検出された。平面形は不整形な円形を呈する。径1.5m、深さ0.2mを測る。埋土より14世紀代の土師器・瓦器が出土する。

731ピット (図23・31、図版一三・一六) 2区南東部、掘立柱建物3の南側で検出された。径0.4m、深さ0.25mを測る。瓦質の播鉢が2個体分出土する。

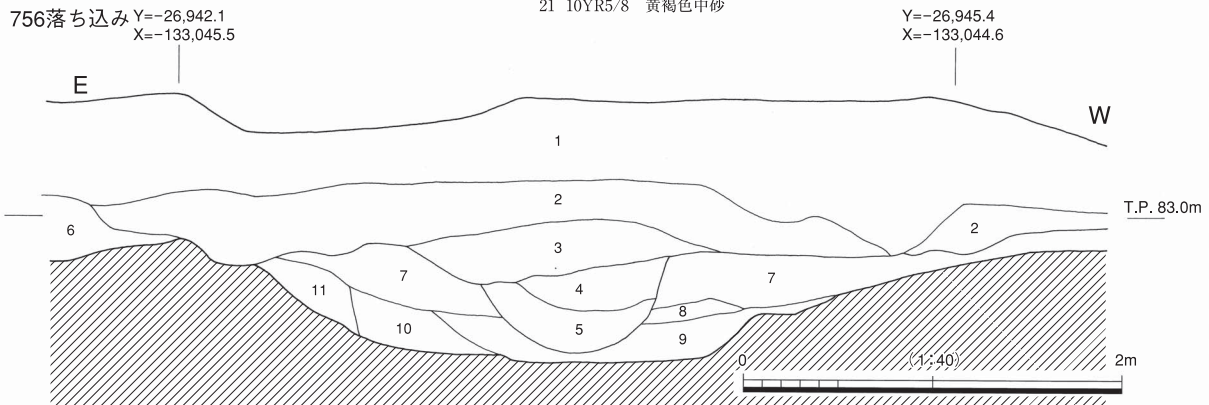
723焼土坑 (図32、図版一六) 2区北東隅で検出された。南北1.0m、東西0.8m、深さ0.25mを測る。平面形は長方形を呈する。底面に傾斜はない。壁面は被熱によって明るい赤色を呈している。床面も被熱により部分的に明るい赤色を呈している。埋土には多量の炭を含む。土坑の北側は800土坑底面に向かって傾斜し、比高差は約1mを測る。800土坑埋土にも多量の炭を含み、一連の遺構である事がわかる。遺構の性格として炭焼窯が考えられ、723土坑が窯本体、800土坑がその前庭部の炭を掻き出す作業場となるものと思われる。遺物の出土はない。

55落ち込み (図8・33) 2区南西隅部で検出された北東から南西へ傾斜する自然地形。検出面からの深さは最大で0.6mを測る。埋土は下1/3に弥生から古墳時代の遺物を含む土が堆積する。底面では、平面形「コ」の字形の落ち込みがあり、竪穴建物の可能性もある。これより上は13世紀代の遺物を含む

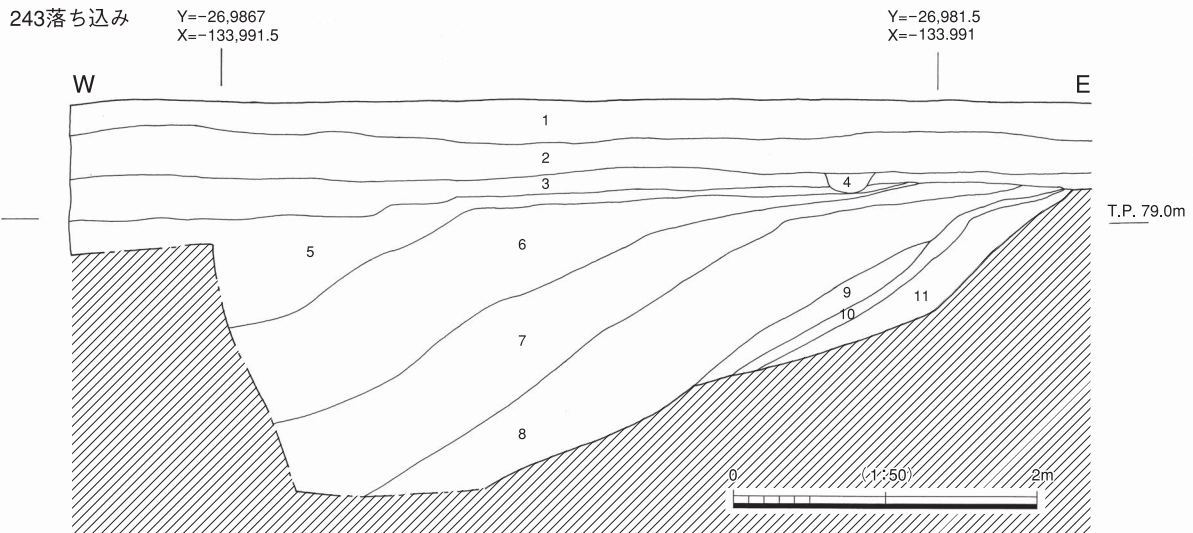




- |                         |                                  |
|-------------------------|----------------------------------|
| 1 5Y4/1 灰色細砂(現代耕作土)     | 11 10YR4/4 褐色細砂                  |
| 2 10YR5/6 黄褐色細砂         | 12 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 土壌化(中世遺物包含層) |
| 3 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂      | 13 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂              |
| 4 10YR7/4 にぶい黄橙色粗砂      | 14 10YR4/4 褐色細砂(古墳時代遺物包含層)       |
| 5 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂      | 15 10YR4/6 褐色細                   |
| 6 10YR5/6 黄褐色細砂         | 16 10YR5/6 黄褐色細砂                 |
| 7 10YR4/4 褐色細砂(近世遺物包含層) | 17 10YR6/6 明黄褐色細砂                |
| 8 10YR5/8 黄褐色細砂         | 18 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂              |
| 9 10YR4/6 褐色細砂(中世遺物包含層) | 19 10YR4/6 褐色細砂                  |
| 10 10YR3/2 黒褐色細砂        | 20 10YR6/8 明黄褐色細砂                |
|                         | 21 10YR5/8 黄褐色中砂                 |



- |                              |                                  |
|------------------------------|----------------------------------|
| 1 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じり細砂(耕作土)    | 7 10YR4/4 褐色粗砂混じり細砂              |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂(耕作土) | 8 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂(中世遺物包含層) |
| 3 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂      | 9 10YR5/8 黄褐色粗砂混じり細砂(中世遺物包含層)    |
| 4 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂(近世溝) | 10 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂(中世遺物包含層)   |
| 5 10YR4/3 にぶい褐色粗砂混じり細砂(近世溝)  | 11 10YR4/6 褐色粗砂混じり細砂(中世遺物包含層)    |
| 6 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂         |                                  |



- |                                    |                           |
|------------------------------------|---------------------------|
| 1 5Y3/1 オリーブ黒色細砂(現代耕作土)            | 7 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂(近世埋土)   |
| 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 φ5mm礫少量含む(旧耕作土) | 8 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂(近世埋土)   |
| 3 2.5Y5/4 黄褐色粘土(床土)                | 9 2.5Y5/3 黄褐色粗砂 土壌化       |
| 4 2.5Y5/2 暗灰黄色中砂 (近世素掘溝)           | 10 10YR5/6 黄褐色細砂(中世遺物包含層) |
| 5 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂(近世埋土)            | 11 2.5Y7/2 灰黄色細砂          |
| 6 2.5Y7/3 浅黄色粗砂(近世埋土)              |                           |

図33 2区55・756落ち込み、3区243落ち込み断面図

土が堆積し、この時期一気に埋没していった事がわかる。

756落ち込み（図8・33）2区南東隅部で検出された北から南へ傾斜する自然地形。検出面からの深さは最大で1.0mを測る。埋土には14世紀代の遺物を含み、この時期に埋没していった事がわかる。

243落ち込み（図8・33、図版一六）3区北西隅部で検出された南東から北西へ傾斜する自然地形。検出面からの深さは最大で2mを測る。図33の9層は中世の遺物を含み土壌化している事から、この時期地表面であった事が分かる。この上に堆積する分厚い砂には、18世紀以降の遺物しか含まれない事から、近世以降に水田造成の為、地山を削って傾斜面を埋めたものと思われる。

## 第4節 4～7区の遺構

6区では自然地形の傾斜面から弥生時代後期の土器が比較的まとまって出土し、7区では奈良時代の土坑から土器・砥石などが出土している。室町時代の遺構は、4・5・7区で水田遺構が検出された。より山側となる6区ではこれに伴う遺構はほとんど確認されていない為、この段階での段丘面上での水田耕作域の限界地点がこの付近であった事が分かる。なお、4区で検出された38池は、平・断面ともに矩形を呈し18世紀の陶磁器が出土する。池は新池側に続いており、新池の構築以前の水溜と思われる。

### 1. 水田遺構

水田に伴う溝が4～7区で検出されている。溝の上層には中世の耕作土が堆積しており、溝の埋土も同質のものを含む事から、これらは中世の耕作に伴う素掘り溝や水田の区画・用排水の溝と思われる。溝は南北方向のものが多く、東西方向のものは、6・7区南端で検出された19溝のみである。南北溝は5区の5・6溝、6・7区の13・14・33溝がある。いずれも溝を境にして、検出面が西側へ0.05m程低く、水田の区画溝となる。本来は畔畦を伴っていたと思われるが、調査では確認されなかった。5区の6溝、6区西端の33溝より東側では、中世の遺構・遺物や耕作土の広がりが無かった事から、これが水田域の東端となる事が分かる。33溝は5区南端で西へ曲がり、ここが水田区画の一つの端になる。また、東西方向の19溝を境にして地山面が約0.2m高くなっており、これより南側では中世の遺構・遺物がない事

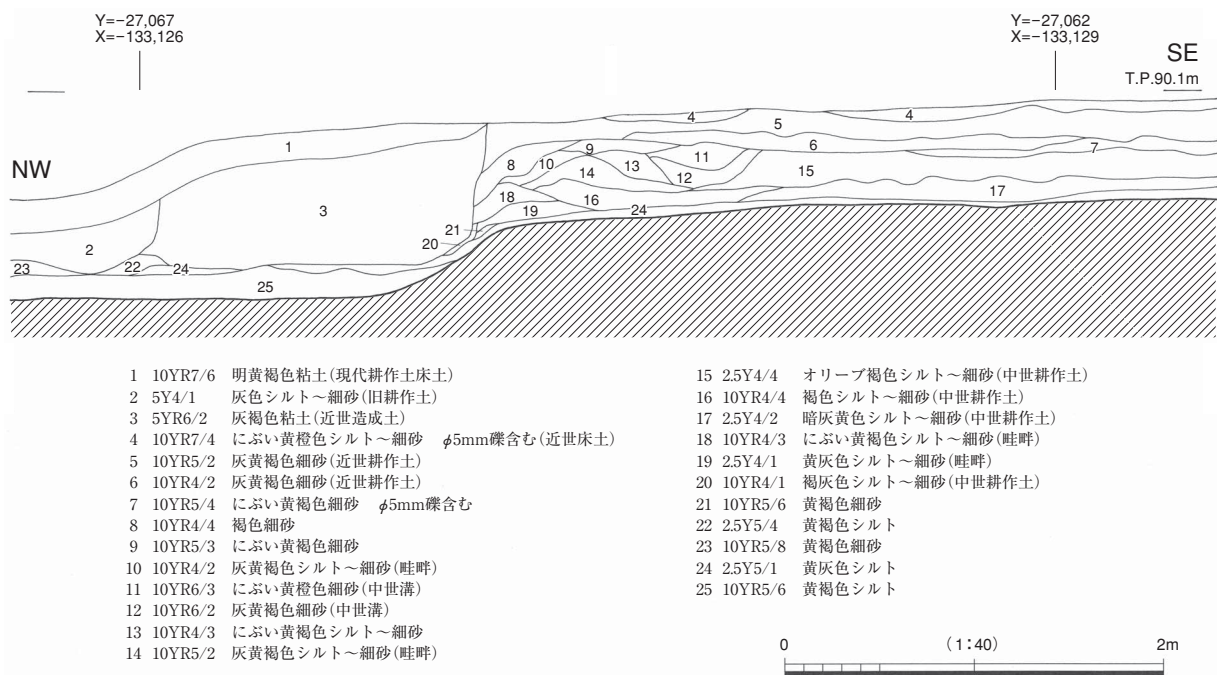


図34 7区東西セクション断面図

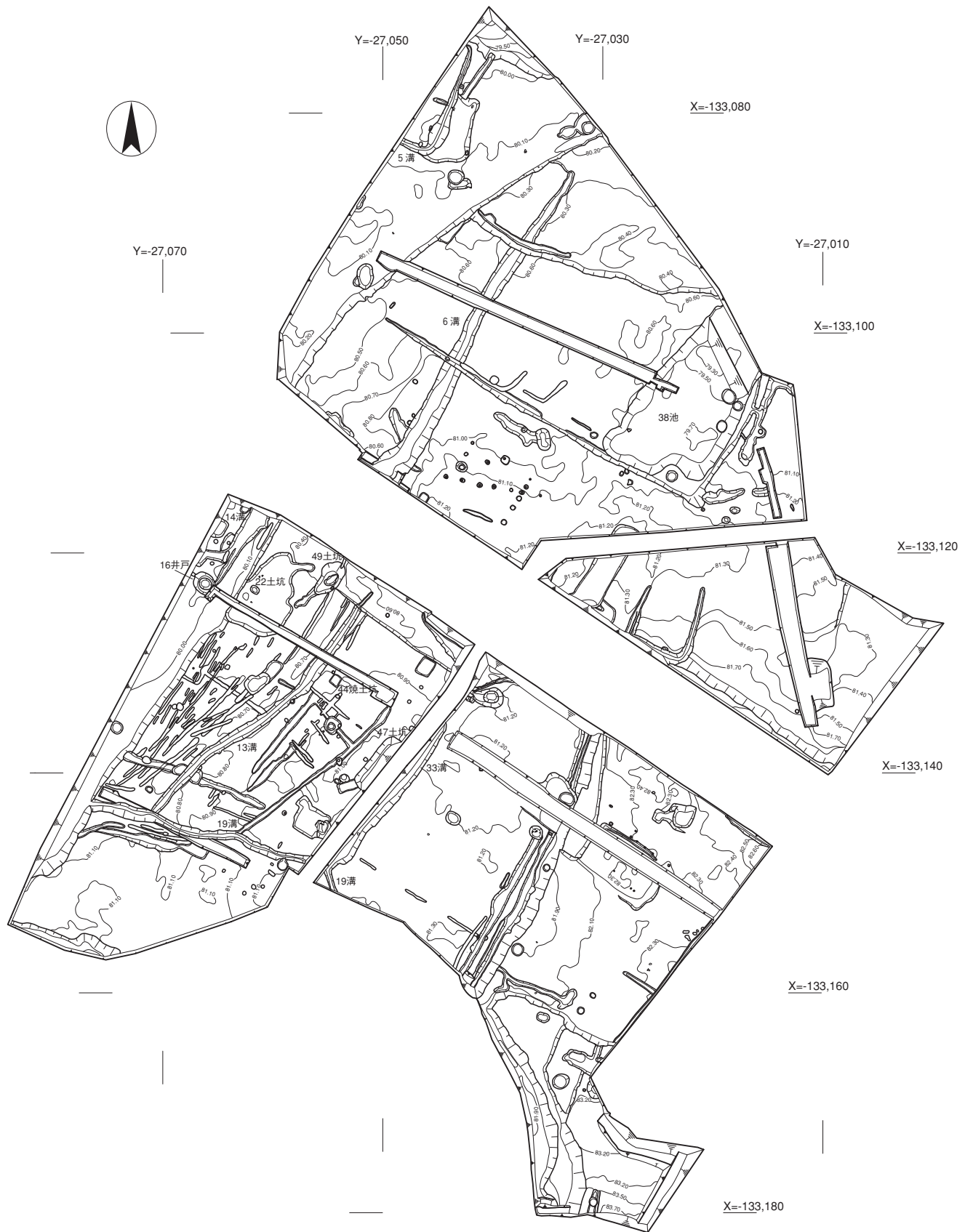


图35 4~7区平面图

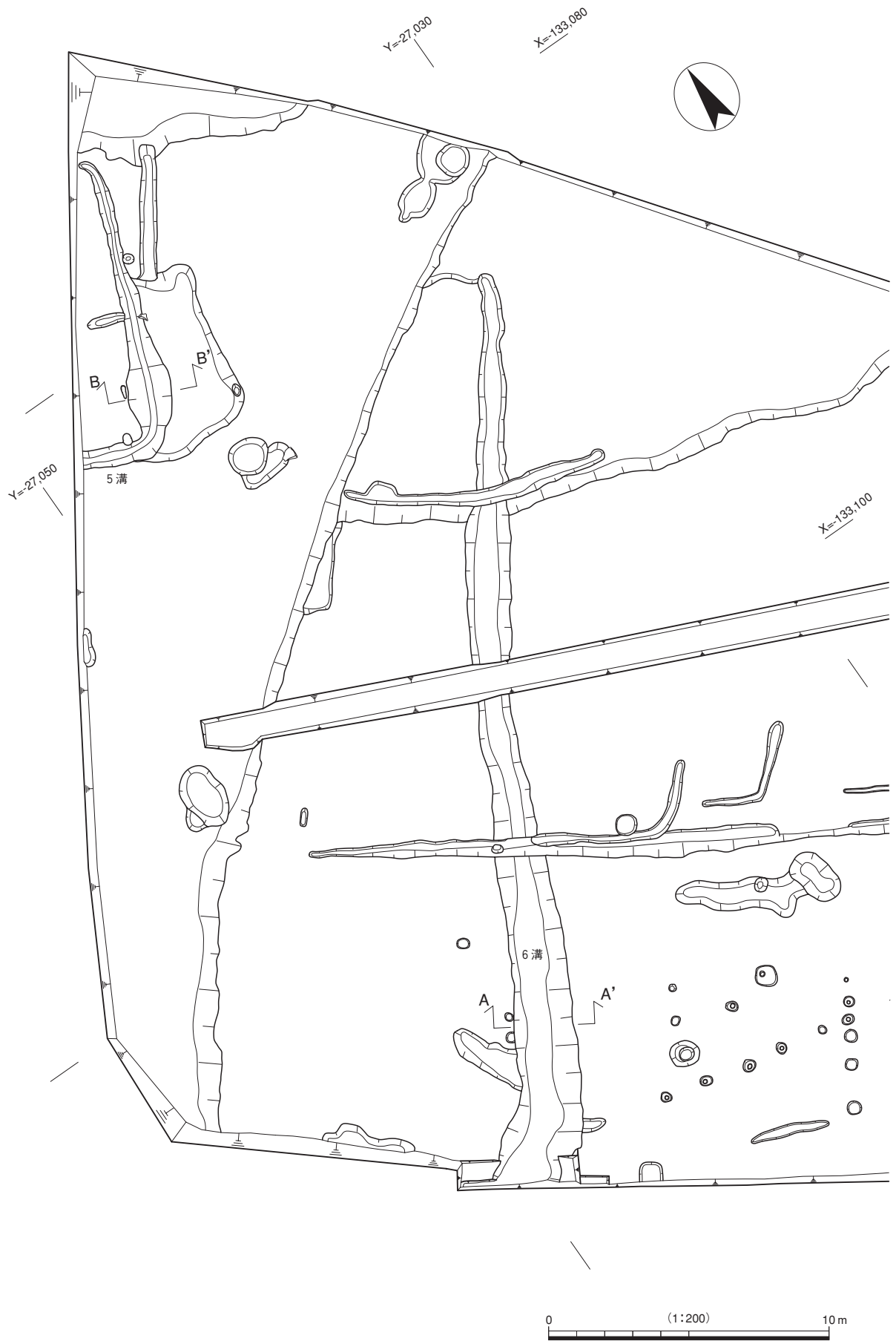


图36 4·5区沟配置图



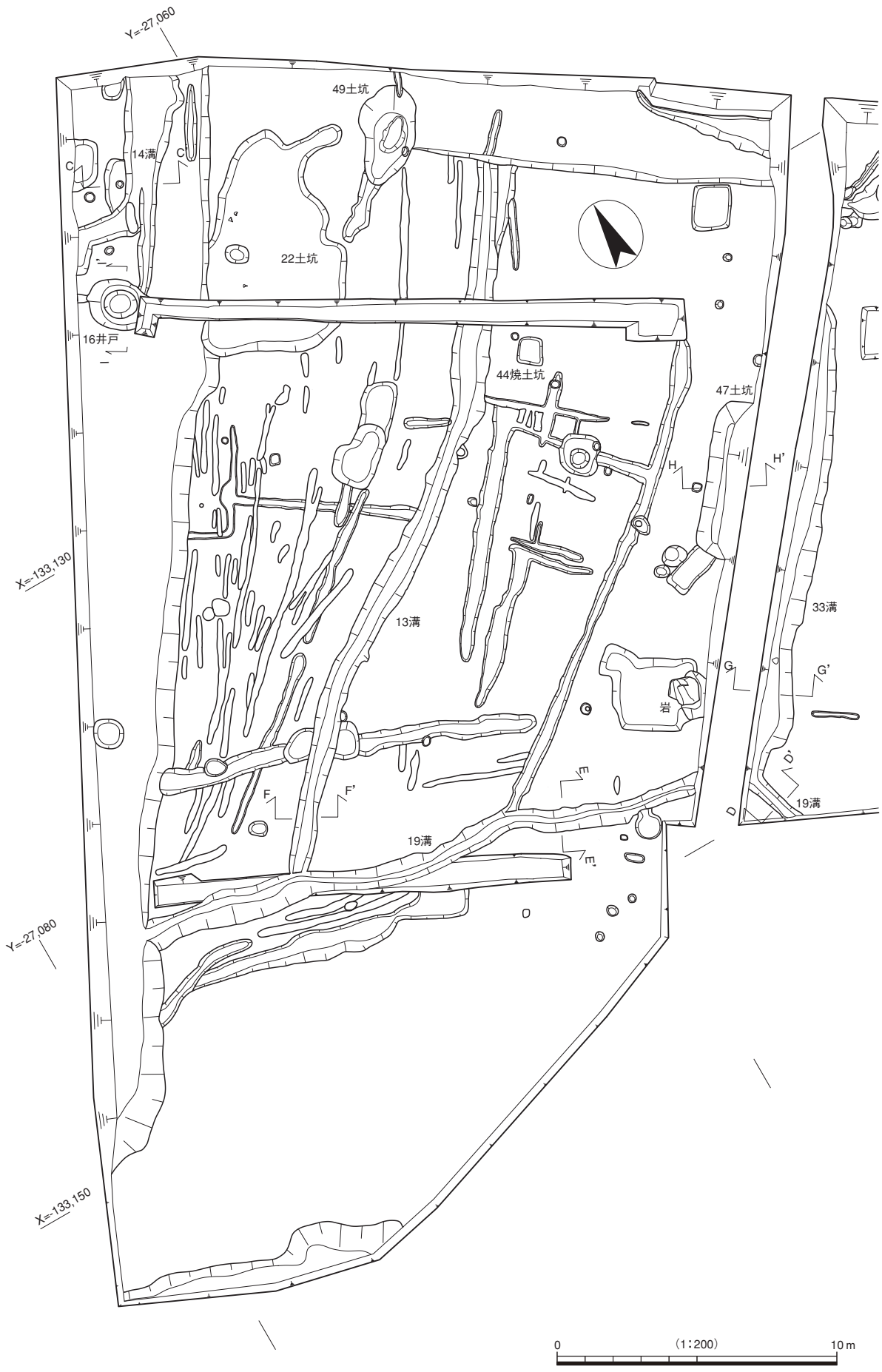
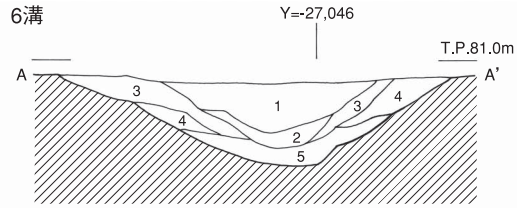
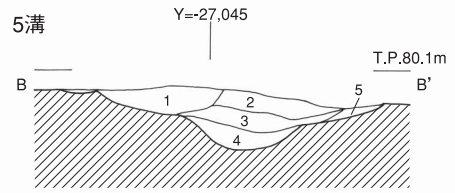


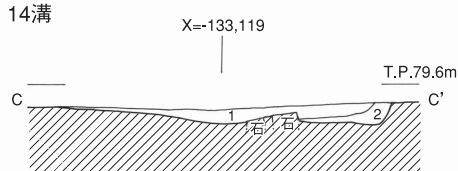
图37 6·7区溝、土坑配置图



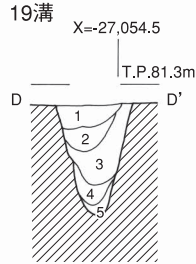
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり細砂 やや粘性有り
- 2 10Y5/1 灰色粗砂混じり粘質シルト
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混じり細砂
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり細砂
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂



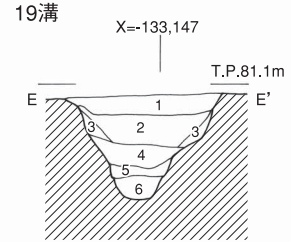
- 1 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘性シルト混じり細砂
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色粘性シルト混じり細砂
- 4 2.5Y6/2 灰黄色粘性シルト細砂
- 5 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト



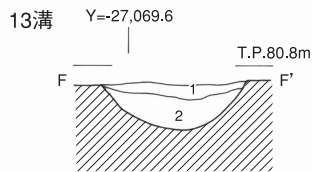
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり細砂
- 2 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり細砂



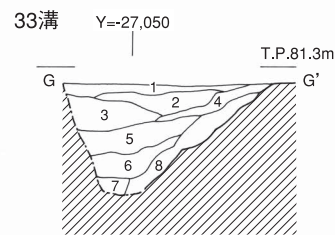
- 1 2.5Y5/4 黄褐色細砂
- 2 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂混じり細砂
- 3 5Y6/2 灰オリーブ色粗砂
- 4 2.5Y6/2 灰黄色粗砂
- 5 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂混じりシルト



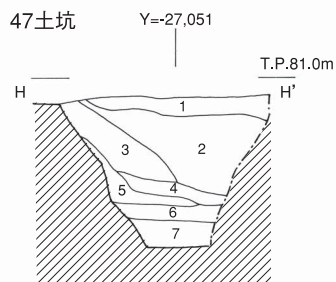
- 1 2.5Y5/4 黄褐色極細砂
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり細砂
- 3 10Y5/1 灰色粗砂混じり細砂
- 4 5Y6/2 灰オリーブ色粗砂
- 5 2.5Y5/1 黄灰色粗砂
- 6 2.5Y5/1 黄灰色粗砂



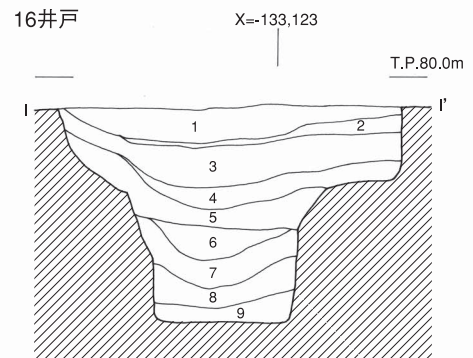
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり細砂
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色細砂～中砂(中世耕作土層と同じ)



- 1 2.5Y5/4 黄褐色細砂
- 2 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂
- 3 5Y5/1 灰色、5Y5/2 灰オリーブ色細砂
- 4 5Y5/1 灰色微砂
- 5 5Y5/1 灰色細砂混じり粗砂
- 6 2.5Y4/1 黄灰色シルト
- 7 5Y4/1 灰色シルト
- 8 5Y6/2 灰オリーブ色粗砂



- 1 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり細砂
- 2 2.5Y5/1 黄灰色細砂に
- 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性有り
- 3 2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じり細砂
- 4 2.5Y5/1, 4/1 黄灰色粗砂混じり微砂
- 5 2.5Y5/1, 4/1 黄灰色粗砂混じり中砂
- 6 5Y5/1 灰色粗砂混じりシルト
- 7 10Y5/1 灰色粘土に
- 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混じり細砂
- 2 2.5Y5/3 黄褐色粘土
- 3 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり細砂
- 4 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じり中砂
- 5 2.5Y5/1 黄灰色細砂
- 6 2.5Y5/4 黄褐色細砂混じり粗砂
- 7 5Y6/2 灰オリーブ色細砂 粘性有り
- 8 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
- 9 5Y5/1 灰色シルト

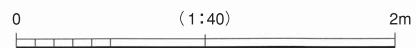


図38 4～7区溝、土坑、井戸断面図

から、これが今回検出された範囲での水田の南端となる。これらの溝からは14～15世紀代の遺物が出土している。地形的には4・5区の南端と6・7区の北端が最も高くなる事から、この間も水田の一つの区画になると思われる。これらの事から復原される水田は南北30～35m、東西10～12mの長方形の区画で、東から西へ下がる棚田状となる。

5溝 (図36・38) 5区北西部で検出された南北溝。南北両端で西側へ曲り、平面はコの字形を呈する。幅0.8～1.5m、深さ0.3mを測る。この溝を境にして西側に0.1m程下がる段差が生じることから、水田の区画溝と考えられる。中世の土師器の小片が出土する。

6溝 (図36・38) 4区西端から5区中央にかけて検出された南北溝。幅1.5～2.0m、深さ0.2～0.3mを測る。溝の底面は南北の中央が最も高く、東西両端へ緩やかに下がっていく。この溝は他の溝と較べて幅が広く、また、水の取水口も無い事から、用水のための溝ではなく、東側斜面からの土砂の流入を防ぐ為のものと思われる。

13溝 (図37・38) 7区中央で検出した南北溝。幅0.8m、深さ0.25mを測る。

14溝 (図37・38) 7区北西隅で検出された南北溝。近世の削平を受けており、遺存状況は不良である。幅1.2m、深さ0.05mを測る。14世紀後半の信楽焼播鉢、羽釜などが出土する。

19溝 (図37・38) 6区南西隅から7区南端で検出した東西溝。幅0.4～0.8m、深さ0.55mを測り、幅に対して深さのある溝である。6区南西隅で33溝と交わる。中世の土師器小片が出土する。

33溝 (図37・38) 6区西端で検出した南北溝。幅1.2m以上、深さ0.6mを測る。6区と7区の境に現在の用水路が存在する為、西肩は検出できていない。溝の底面は北から南へ下がり、19溝からは水は入らない。この溝も4・5区の6溝と同様に他の溝と較べて幅が広い事から、東側斜面からの土砂の流入を防ぐ為のものと思われる。

47土坑 (図37・38) 7区東壁際で検出された。南北5.5m、東西1.5m以上、深さ0.7mを測る。平面長方形を呈する。埋土は粘土質の土が堆積する。中世の土師器片が少量出土する。土坑の東端は6・7

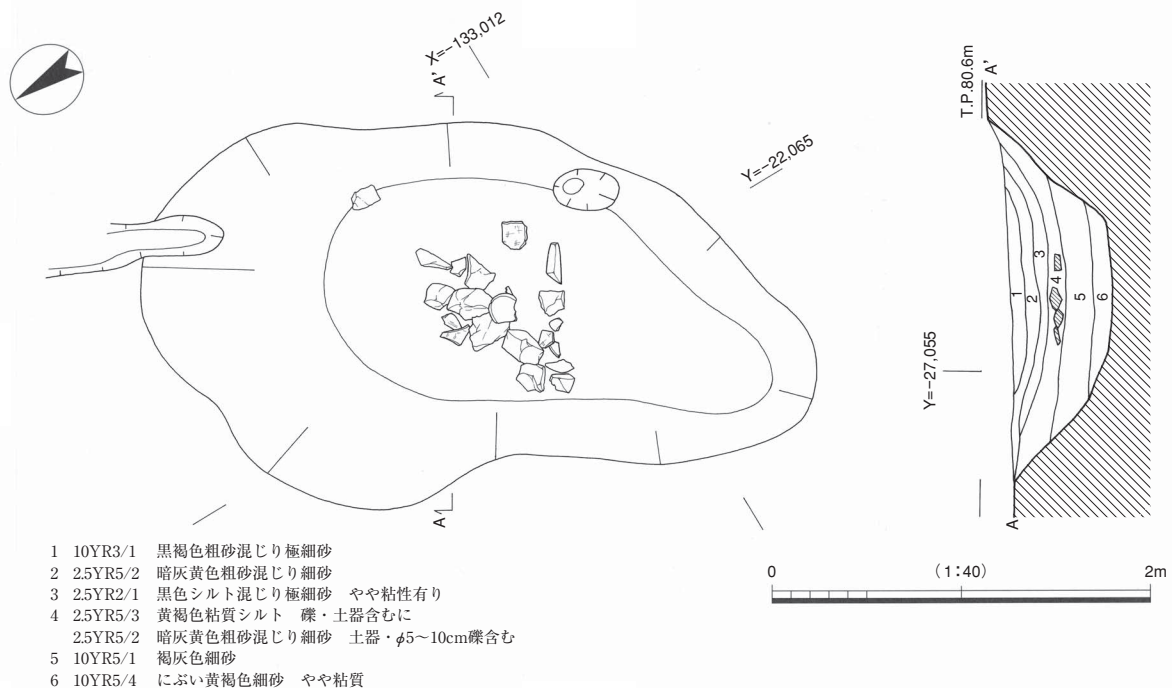


図39 7区49土坑実測図

区の間にある現在の用水路のため確認することはできなかったが、位置的に33溝と重なり、水溜などの性格が考えられる。

16井戸（図37・38、図版二一） 7区北西部で検出された。平面形は円形。深さ1.2mを測る。2段掘りになっており、検出面から0.4mまでが径1.8m、これより下を径1.2mに狭めて掘り下げている。井戸枠の痕跡は無く、素掘り井戸と思われるが、底面は湧水層に達しておらず、井戸ではなく耕作に伴う水溜の可能性はある。

2. 土坑 7区で白鳳から奈良時代の土坑2基が検出されている。

22土坑（図37） 7区北西部で検出された土坑。平面形は不整形な楕円形を呈する。南北約8m、東西約5m、深さ0.3~0.5mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。人為的に掘られたものか自然地形の凹みかは判断しがたい。8世紀代の須恵器が出土する。

49土坑（図37、図版二一） 7区北西部で検出された土坑。平面形は不整形な楕円形を呈する。南北3.5m、東西2.0m、深さ0.5mを測る。土坑底面は東側が緩やかに傾斜し、西端で一段低く下がる。土坑内より8世紀代の須恵器、砥石とともに20cm大の多量の石が出土する。石の中には被熱痕跡のあるものや、周辺では採れない安山岩もある。

### 3. その他の遺構

44焼土坑（図37・40、図版二一） 7区北東部で検出された。平面形はほぼ正方形を呈する。一辺0.95m、深さ0.2mを測る。底面に傾斜はない。壁面は四周が被熱によって明るい赤色を呈するが、東壁の方がやや強く焼ける。床面は東半の一部が被熱により、部分的に明るい赤色を呈している。遺物の出土はない。埋土は上層が褐色細砂、下層は床面直上に炭層が堆積する。この埋土は、土壤剥片観察により、下層の炭層は、植物体の燃焼後に人為的な攪拌を受けている事が判明している。また、X線回析分析の結果、焼土中の緑泥石の消失が目立つ事から、750℃以上の被熱を受けたことが判明している。炭化材をAMS法による放射性炭素年代測定を行った結果、540-635calAD (95.4%) を中心とした年代が得られている。被熱部の考古地磁気年代測定では、AD625~725年の年代が求められている。

2区の723焼土坑も同様の遺構であるが、類似の遺構は各地で検出されている。鳥取県琴浦町中道東山西山遺跡<sup>(註1)</sup>では鍛冶炉とともに検出されており、製炭窯である事が分かる。また、民俗例の黒炭窯は800℃で精錬されている<sup>(註2)</sup>。今回、X線回析分析の結果、確認された焼成温度とも合致しており、44焼土坑は製炭窯の可能性が高い。

(註)

(1) (財) 鳥取県教育文化財団 2005 『鳥取県東伯郡琴浦町 中道東山西山遺跡』 (財) 鳥取県教育文化財団調査報告書101

(2) 関西大学文学部考古学研究室 1977 『大師山』

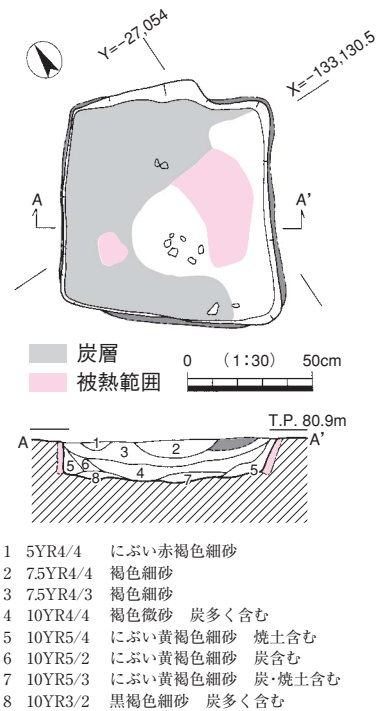


図40 7区44焼土坑実測図



## 第4章 遺物

### 第1節 遺物の概要

遺物は、コンテナにして約40箱、土器類・瓦類・石製品・鉄製品などが出土している。出土遺物の大半を土器類がしめる。鉄製品は中世の釘が十数本出土しているが、腐食が激しく凶化できるものはなかった。また、製品ではないが中世の土間の構築土から壁土の焼土と思われるものがある。個々の遺物の詳細は破片のみの瓦類を除いて遺物観察表に掲載した。なお、遺物の記述に関する参考文献は章末に掲げた。

### 第2節 土器類

時代的には縄文・弥生・古墳・奈良・鎌倉・室町の各時代のものが出土し、量的には中世のものが大半を占める。古墳時代のものは極めて少ない。以下では、時代順に地区・遺構毎に記すが、縄文土器のみは包含層からの出土がほとんどである為、地区地点に関係なくまとめて述べる。

#### (1) 縄文土器 (図41、図版二二)

縄文土器は破片数にして70点あまりが出土しているが、そのほとんどが2区からの出土である。産状はプライマリーなものではなく、後世の遺構・包含層からの出土である。遺物の残存状態は良好であり、文様や調整の細部がよく観察できる。以下、図示した33点について述べる。

1～5は押型土器である。1はいわゆる山形文が施されるが、山と山の間が狭く、小波状あるいは鋸歯状を呈する。2～5は市松文に近いモチーフがネガティブに描出される。いずれも凹凸が浅い。神宮寺式に比定できる。

6はいわゆる繊維土器である。胎土に繊維を含むが、器表面では観察できず、断面においてまばらに確認できる程度である。器壁は厚い。文様は、格子目文がくずれたような、おおぶりの山形文が縦位に施される。高山寺式に比定できる。

7～12は表裏条痕土器である。7・10は色調、胎土、条痕の施し方や文様構成が似ていることから、同一個体である可能性が高い。頸部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、水平口縁の端部は丸く収まる。地文としての条痕は、内外面ともに縦位または斜位に施される。口縁部外面には、条痕の上から条間の比較的広い原体で鋸歯状文が描かれる。鋸歯状文の直下には、C字形の爪形文を連続的に施す。10は口縁端部に条痕原体による押捺があり、口縁部に補修孔が見られる。8・9は水平口縁で、端部は丸く収まる。内面に横位、外面に斜位の条痕を施す。11・12は体部片である。横位または斜位の条痕が内外面に施される。11の外面にはD字形の爪形文が施される。すべて早期末の所産である。7・10は粕畑式に類似するが、鋸歯状の条痕文を持つこと、爪形文がやや蛇行すること、器壁がやや薄いことなど若干様相が異なる点がある。

13～27は、長大なR縄文をほぼ縦位に施す一群である。13～24は、色調、胎土、爪形文や縄文の近似性から、同一個体であると思われる。13・14は口縁部下端から頸部、15は口縁部から頸部、16～19は頸部、20～24は体部である。頸部はやや内傾しつつ立ち上がり、口縁部は大きく内湾、端部付近で若干外

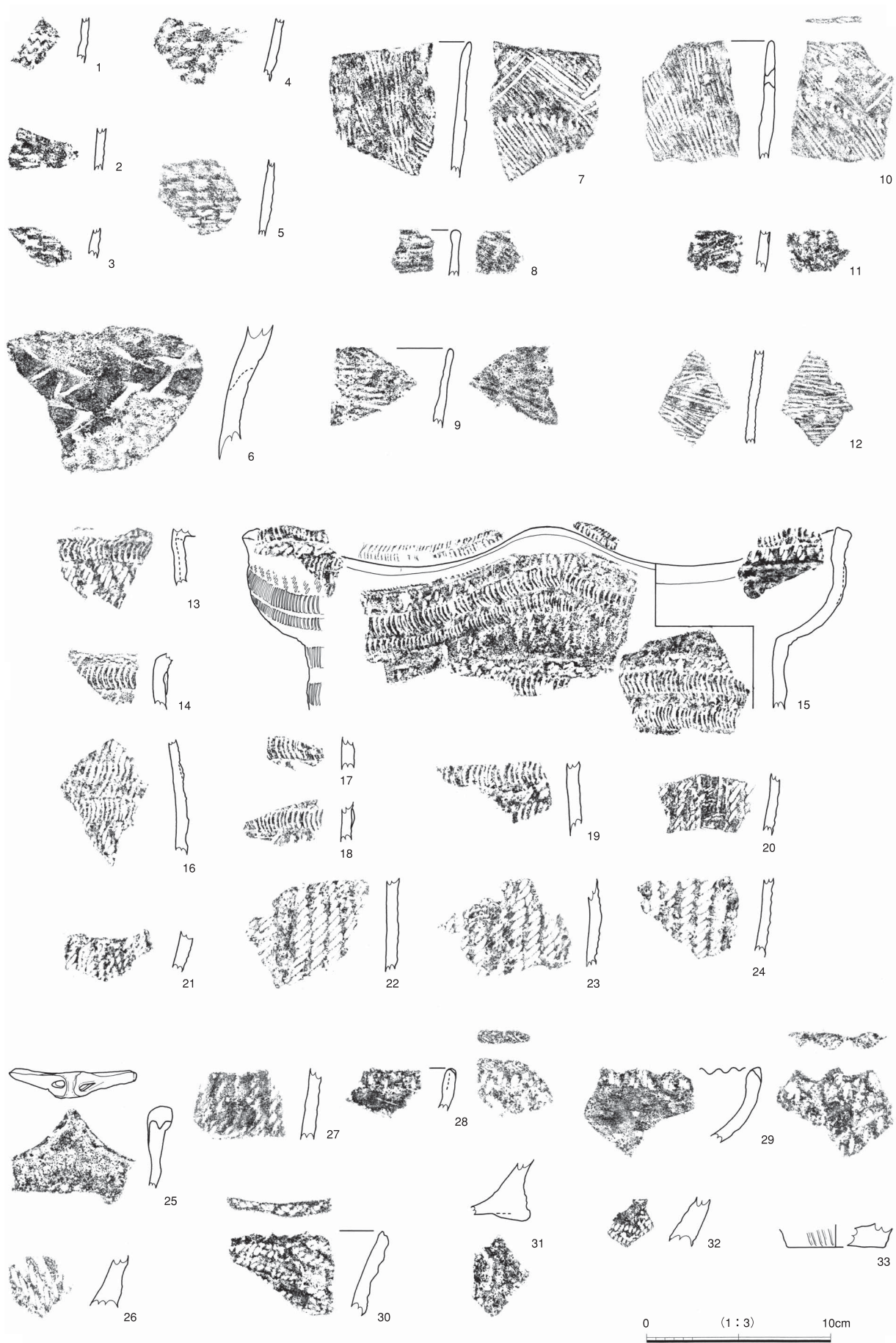


图41 縄文土器拓影・実測図

傾する。端部はやや肥厚し、面を持つ。ゆるやかな波状口縁を持ち、波頂部は比較的平坦である。縄文はほぼ縦位に施され、口縁部内面の端部付近にも同様に縄文が施される。口縁部外面には、低平な隆帯と繊細な爪形文により、口縁に沿って平行波状文が2条施される。端部には、口縁部や頸部の爪形文と同程度の幅を持つ原体によって、同程度の密度でキザミが施される。頸部には、低平な隆帯と繊細な爪形文による平行直線文が2条施される。20・22・23は体部外面に、垂下隆帯あるいは垂下爪形文が認められる。25は波状口縁であり、波頂部両側縁を深く刺突する。口縁部は内湾し、端部は外側に肥厚する。外面に繊細な爪形文が認められる。26は底部である。27は体部であるが、縄文の撚りが比較的緩い。船元I式B類に比定できる。

28・29は口縁部で、二枚貝腹縁による押捺が施される。いずれも口縁部が大きく内湾、内側に肥厚する器形で、地文にRL縄文を持つ。28の二枚貝押捺はほとんどキザミに近く、そのため小波状口縁を呈する。船元I式D類に比定できる。

30は直線的な口縁部の外面にRL、端部にLR縄文を深く施す。船元I式G類に比定できる。

31～33は底部である。31は角底で、五角底と思われる。粘土貼付により成形される。32は外面にRL縄文が認められる。33は平底であり、工具痕が認められる。31は船元I式、32・33は中期前半と思われる。

## (2) 弥生土器

弥生土器は2区の竪穴建物とその周辺の包含層、6-2区の弥生時代包含層から出土している。2区は弥生時代中期前葉がその大半占める。6-2区からは後期後半の土器が出土するが、隣接する東倉治遺跡でも同じ時期の土器が出土しており、この時期は一連の遺跡と考えられる<sup>(註1)</sup>。

2区出土弥生土器(図42、図版二三-2) 2区では竪穴建物などから中期前葉の弥生土器が出土している。1が391土坑、2が305竪穴建物、3が306竪穴建物、4が730竪穴建物からの出土である。

1～3は甕である。1・2は底部から胴部の下部が残存する。1は平底で、外底面に葉脈痕が残る。調整は外面がハケ、内面が強いナデ、ハケである。2は大型のものである。平底で、外底面に葉脈痕が残る。調整は、内外面ともにハケである。3は口縁部である。胴部から口縁部はなだらかに湾曲して外反し、口縁端部は面をもつ。

4は広口長頸壺である。頸胴部の境は明瞭ではなく、頸部は開きながら口縁部へと立ち上がる。底部は平底で、葉脈痕がわずかに残る。調整は外面がハケ、内面がナデであるが、全体的に摩滅が激しい。

6-2区包含層出土弥生土器(図43、図版二三-1・2) 6-2区の弥生時代包含層からは、後期後半の土器がまとまって出土している。

1～4は広口壺で、いずれも口縁部から頸部が残存する。1は口縁端部が肥厚し、2条の凹線文が施された後、円形竹管浮文が施される。調整は口縁部がナデ、頸部外面がハケ、頸部内面がナデである。2は口縁端部が肥厚し、円形竹管浮文が施される。調整は口縁部外面がナデ、頸部外面がミガキ、内面は摩滅により不明である。3は口縁端部が肥厚し、下垂する。口縁端部は広い面をもち、3条の凹線文が施される。調整は、内外面ともにナデである。4は口縁端部が肥厚し、2条以上の凹線文が施される。調整は、口縁部がナデ、頸部がナデ、ハケである。

5・6は甕で、どちらも口縁部から胴部が残存する。5は強く屈曲して外反する口縁部を持つ。口縁部と胴部の接合部はやや厚い。調整は、内外面ともにナデである。6は口縁部が強く屈曲して外反し、



端部は受け口状に摘み上げられる。調整は、摩滅のため内外面ともに不明である。

7～15は高坏である。7～10は坏部が残存する。いずれも口縁部が外反し、皿形の坏部をもつ。7は口縁部が湾曲して大きく開き、端部は丸く収まる。口縁部の接合部分である屈曲部は少し下垂する。調整は、内外面ともにミガキである。8は口縁部が緩やかに外反する。調整は、内外面ともにミガキである。9は口縁部が微かに湾曲して外反し、端部は面をもつ。屈曲部はナデにより、凸帯状に隆起する。調整は外面がナデ、ハケ、内面がハケである。10は口縁部が緩やかに外反し、端部は丸く収まる。調整は外面がナデ、ミガキ、内面がミガキである。11～15は脚部が残存する。11は脚柱部から屈曲して広がる裾部をもつ。円形の透孔が2ヶ所残存しており、三方向に穿たれていたと考えられる。調整は外面がミガキ、内面坏部がミガキ、脚部がハケである。12は円筒形の脚柱部をもつ。調整は外面坏部と裾部には微かにハケが認められ、脚柱部がミガキ、内面坏部がミガキ、脚部がナデである。13は坏部接合後、円盤充填をおこなう。円形の透孔が1ヶ所残存する。調整は外面がミガキ、内面脚部がナデ、坏部は摩滅により不明である。14は脚柱部からなだらかに広がる裾部をもつ。円形の透孔が3ヶ所残存し、四方向に穿たれていたと考えられる。調整は外面がミガキ、内面坏部がミガキ、脚部がナデである。15はなだらかに大きく広がる裾部をもち、端部は幅の小さい面をもつ。円形の透孔が4方向に穿たれる。調整は外面がミガキ、内面がハケである。

16～21は壺の底部である。16は平底である。調整は、内外面ともにハケである。17はドーナツ底で、外底面には微かに葉脈痕が残る。調整は、内外面ともにハケであるが、全体的に摩滅が激しい。18は底部が非常に小さく、胴部は大きく開きながら立ち上がる。調整は外面がケズリ、内面がハケである。19

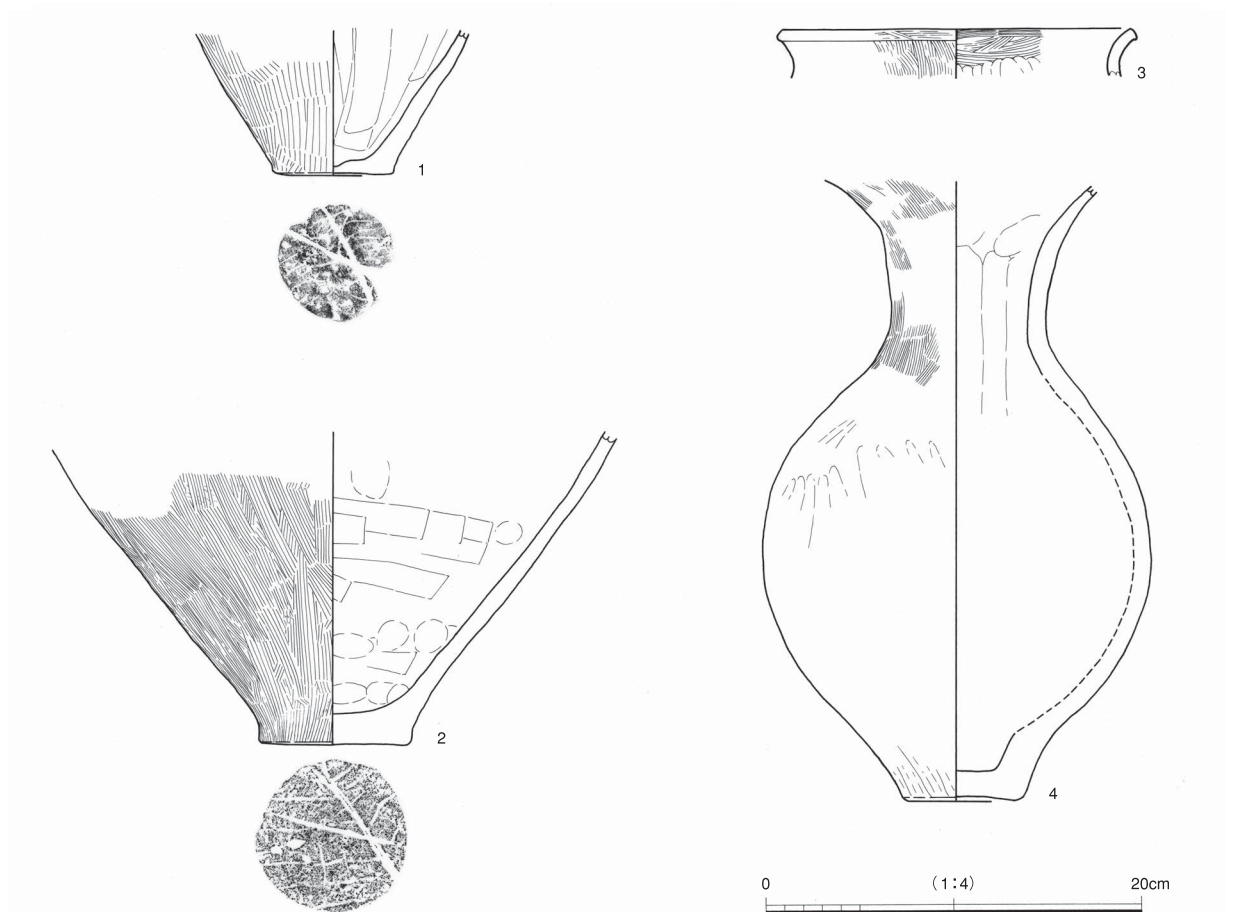


図42 2区出土弥生土器拓影・実測図



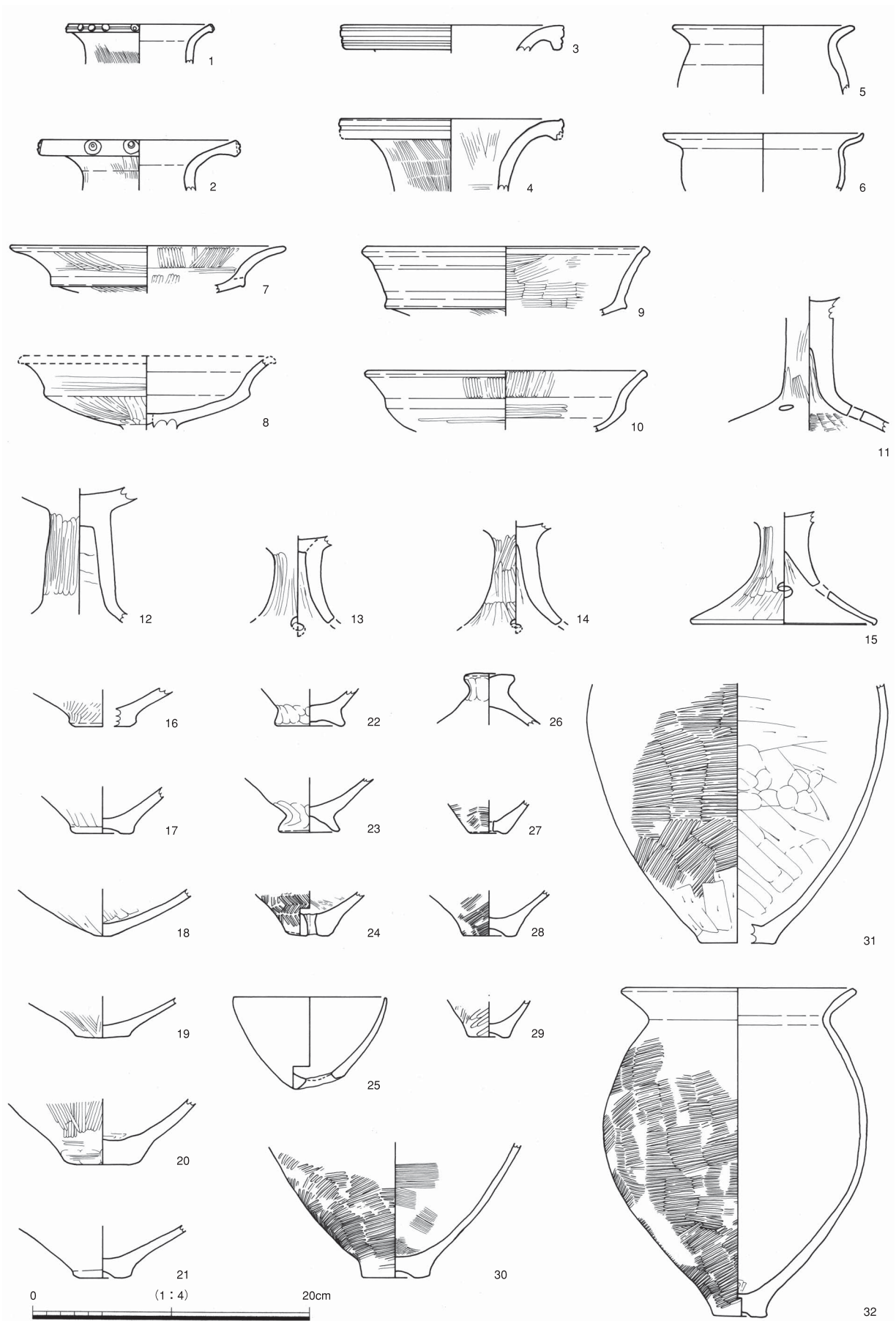


图43 6-2区包含层出土弥生土器实测图

は外底面中央がやや突出する形態である。調整は外面がミガキ、内面がハケ、外底面がミガキである。20は平底である。調整は外面がハケ、ミガキ、内面がハケである。21はドーナツ底である。調整は、摩滅のため内外面ともに不明である。

22～25は鉢である。22は全体的に歪んでおり、底部外縁は指づくねにより成形され、指頭圧痕が顕著である。調整は外面がナデ、内面がハケである。23は底部が指づくねにより成形され、短い脚台部状を呈する。底部は指頭圧痕が顕著である。調整は外面がナデ、内面がハケである。24は有孔鉢である。底部は焼成前に棒状工具により穿孔される。調整は外面が羽状タタキ、内面がハケである。25は有孔鉢である。椀形で、底部から口縁部へ内湾して立ち上がる。底部は焼成後に内面から穿孔される。調整は、外面は摩滅のため不明、内面がハケである。

26は甕蓋である。摘み部は指づくねにより成形され、指頭圧痕が顕著である。摘み部上面は片側がやや窪むが、全体的に平坦である。調整は外面がナデ、内面がハケである。

27～32は甕である。27～31は底部、底部から胴部が残存する。27～30はいずれもドーナツ底で、調整は外面がタタキ、内面はハケである。29は摩滅により不明である。27の底部は焼成前に棒状工具により穿孔される。31は平底で、胴部は上半に膨らみをもつと思われる。調整は外面がタタキ、ケズリ、内面がケズリ、ハケである。32はドーナツ底で、胴部は中位に膨らみをもつ。口縁部は屈曲して外反し、端部は丸く収める。調整は外面がナデ、ハケ、タタキ、内面がナデ、ハケである。

### (3) 飛鳥から奈良時代

この時代の遺物は、2・7区から出土している。時期は平城Ⅱ期を前後する頃と思われる。

2区308竪穴建物、7区22・49土坑出土土器(図44、図版二四) 2区308竪穴建物から8・9が、7区22土坑から2・5・6が、7区49土坑から3・4・7が出土している。1・2は須恵器杯B蓋。1は丸みを帯びた天井部から縁部は弱く屈曲し口縁端部に至る。天井部のヘラ削りは頂部にまで至る。胎土には1～2mmの長石を多く含み、5mm大の礫も含まれる。2は平らな天井部から縁部は直線的に外傾し口縁端部に至る。3～5は須恵器杯A。3の底部はやや丸みを帯び、平坦であるが、口縁部は直線的に外傾し口縁端部は丸く収まる。底部の一部に板状工具による粗いナデを施す。胎土には3～5mmの長石を多く含む。4は平坦な底部から口縁はやや急な角度で立ち上がり、上半が外反する。5の胎土には1～2mmの長石粒を多く含む。6・7は須恵器椀。底部に付く高台は外側に開く。内面は丁寧なナデを施す。口縁は丸みを帯びて内湾気味に立ち上がり、内傾する端部はやや丸みを持つ。胎土は他の須恵器に較べて精良である。8は須恵器盤。308竪穴建物カマドの支脚に利用されていた。大きく焼け歪む。平坦な底部から外傾する口縁を持つ。口縁端部内面は内傾し稜を持つ。口縁下半1/3は回転ヘラ削り。残り上半を回転ナデ。9は土師器杯B蓋。平坦な頂部に扁平なつまみが付き、天井部からなだらかに屈曲する口縁部に至る。つまみ外面をハケにより平坦に仕上げる。

### (4) 鎌倉から室町時代

この時代の遺物が量的に最も多い。全体の遺物の約8割を占める。土師器・瓦器・瓦質土器・陶器・輸入陶磁器などがある。1～3区は鎌倉時代前半から室町時代前半にかけてのものが多く、4～7区は室町時代のものが殆どである。瓦器は楠葉型と大和型が出土し、和泉型は出土しない。楠葉型が多数を占めるが、楠葉型か大和型か区別し兼ねるものもある。

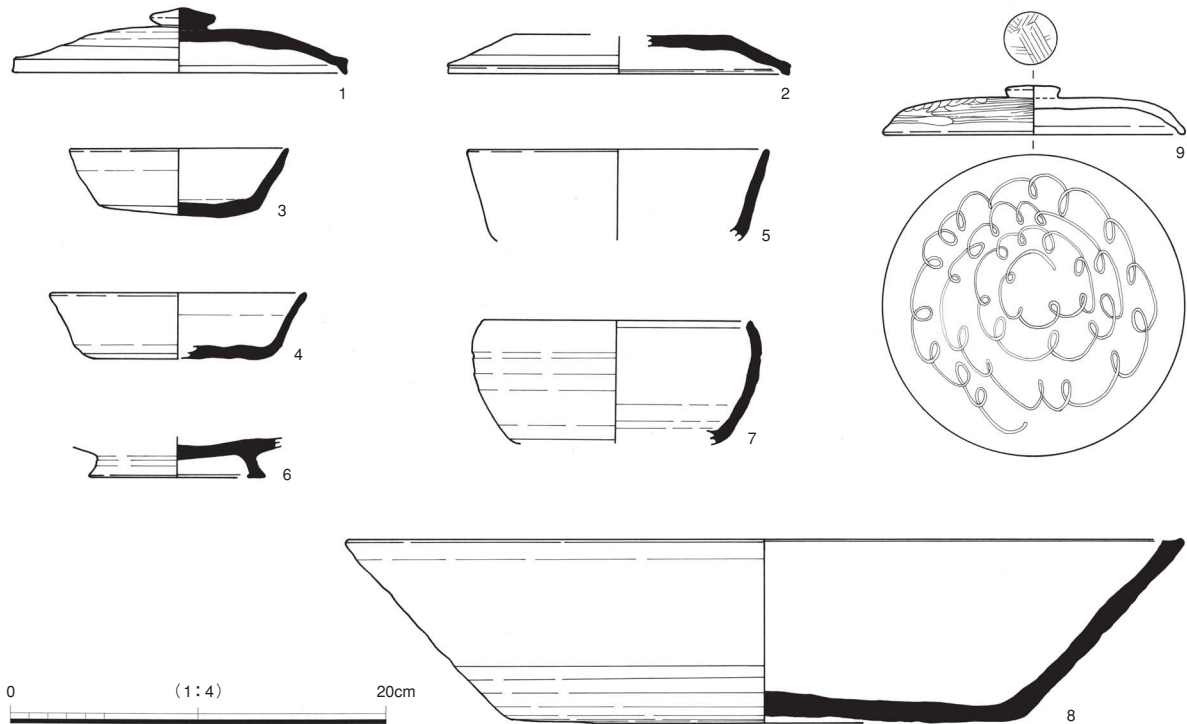


図44 2区308竪穴建物、7区22・49土坑出土土器実測図

1. 1区出土土器 (図45)

1・4は259水田耕作土、2・3は255堤防新段階構築土より出土。1～3は楕葉型瓦器椀。内面のヘラミガキは間隔が粗い。炭素が吸着するのは2のみである。いずれも森島編年Ⅲ-2期。4は庄内式期の鉢。体部内面はヘラ削り。胎土に1mm程度の長石粒を多く含む。

2. 2区出土土器

158溝 (図46、図版二四) 158溝からは土師器皿・瓦器がまとめて出土した。破片数にして368点。内訳は土師皿279点、瓦器椀80点、瓦器皿1点、瓦質土器の煮沸具8点である。瓦器椀に対して土師器皿が3倍以上となる。土師器皿は、口径8～9cmの小皿がその大半を占める。

1～60は土師器皿。胎土はいずれも黄橙色、胎土に含まれる砂粒は少ない。1～45は土師器小皿。1～18の口縁は低く直線的に外反して立ち上がる。口径は8.0～8.5cm、器壁は3～4mmを測る。19～27は口縁が丸みを持って立ち上る。口径は8.0～8.5cm、器壁は3～4mmとやや薄手である。28～44も口縁が丸みを持って立ち上るが、口径が8.5～9.0cmとやや大きく、器壁も約5mmと厚い。46～60は土師器大皿。

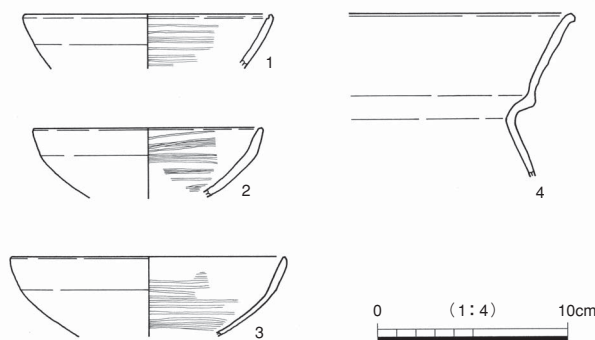


図45 1区出土土器実測図

底部から口縁は丸みを持って立ち上り、口縁部は僅かに外反する。口径は46が約11.0cm、他は約12～13cmである。

61～72は瓦器椀。口径が11cmの61、12.5～13cm前後の62・63・65・66、13.1～14.0cmの64・67～72に分かれる。器高指数は3.1～3.4のものが多いが、64は2.3と器高に対して口径が大きい。口縁部の形状は、外反する64・65・68・69・72と、それ以外の直立するものがある。71を除いて口縁端

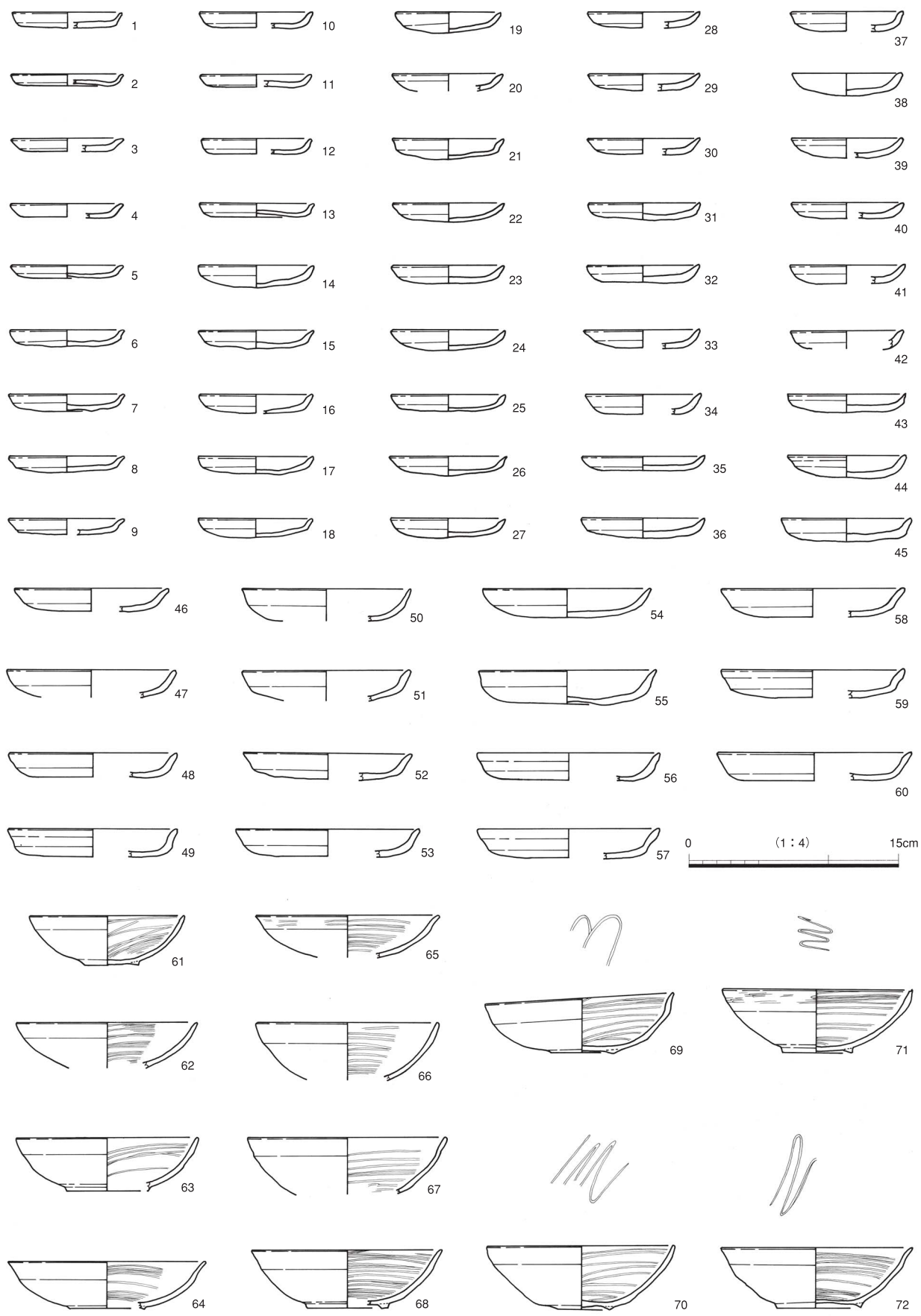


图46 2区158溝出土土器实测图



部内面にはいずれも沈線を持たない。内面のヘラミガキの間隔は粗い。外面口縁部にヘラミガキが認められるのは65と71のみである。ヘラミガキの幅は64・65が1.5mm程度あるが、これ以外は1mm以下ときわめて細い。内面底部の暗文が残るものは、いずれもジグザグ状を呈する。62・63・66・70・71の楠葉型瓦器椀は、森島編年Ⅲ-3～Ⅳ-1期。他は口縁端部内面に沈線や外面ヘラミガキが無いものが多く、楠葉型瓦器椀と思われるが、口縁部が外反する点がやや特異である。楠葉型と大和型の折衷型ともみえる。

276溝（図47、図版二五） 32～39は276溝より出土。遺物の出土量は少ないが輸入陶磁器の出土が目立つ。32～34は土師器皿。35・36は楠葉型瓦器椀。35は口径12.0cm、36は13.4cm。いずれもヘラミガキの間隔は粗く、幅は約1mmと細い。森島編年Ⅳ期。37は龍泉窯系青磁椀Ⅲ類。38は白磁四耳壺。39は黄釉鉄絵陶器盤の底部。外面は露胎、内面は黄釉を施釉し、底部に鉄釉を線状に2条施す。

57ピット（図47、図版二五） 57ピットは柵1を構成する柱穴の一つである。29は土師器小皿。丸みを持って立ち上がる口縁から端部は丸く収まる。

78・154ピット（図47） 30は154ピット出土の土師器小皿。31は78ピット出土の楠葉型瓦器椀。口径12.6cm。炭素の吸着はない。森島編年Ⅲ-2期。いずれも掘立柱建物1を構成する柱穴である。

125ピット（図47、図版二五） 23は土師器大皿。丸みを帯びた底部から口縁部は外反気味となる。

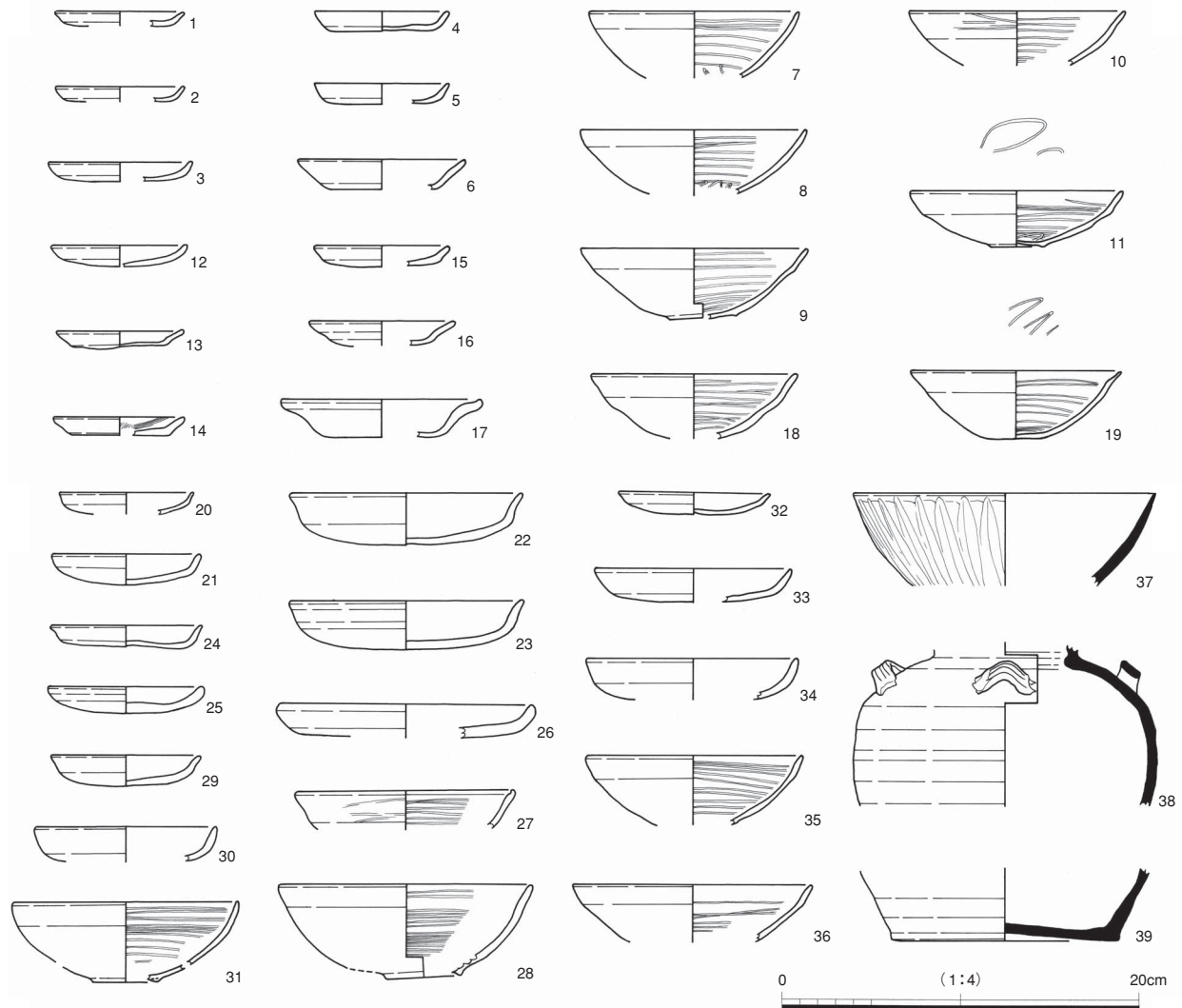


図47 2区ピット、土坑、276溝出土土器実測図

581ピット（図47） 12～17は土師器皿。口径7.5cm前後の12～16と11cmの17がある。18の瓦器椀は口縁部がやや外反気味になる。

241ピット（図47） 24～26は土師器皿。24・25はいずれも口径約8cmの小皿。26は立ち上がりの低い厚手の大皿。27・28は瓦器椀。27は外反する口縁の端部内面に沈線を持つ。28の口縁は直立気味である。ヘラミガキの幅はいずれも1mm以下ときわめて細い。

242ピット（図47、図版二五） 20・21は土師器小皿。22は土師器大皿。21の小皿と22の大皿が合わせ口の状態で出土している。小皿はいずれも口径8cm前後であるが、20は21に較べて薄手で口縁部が直線的に立ち上がる。22は丸みを帯びた底部から口縁部は外反気味となる。

330ピット（図48） 30・31は土師器小皿。30は口縁が外側に開きながら立ち上がり、31は直立気味に立ち上がる。32は土師器大皿。胎土は粗く2mm大の長石を含む。34は土師質土器羽釜。口縁は内傾気味に立ち上がり、端部は小さく肥厚する。胎土は粗く、0.5～1mmの長石粒を多く含む。

469土坑（図47、図版二五） 1～6は土師器小皿。1～5は口縁部が丸みを持って低く立ち上がり、6は口縁部中ほどで弱く屈曲する。7～11は楠葉型瓦器椀。口径11.6～12.6cm。口縁部は直立気味に立ち上がる。ヘラミガキの幅は7～10が1mm以下ときわめて細く、11は約2mmとやや太い。森島編年Ⅳ期。

476土坑（図47、図版二五） 19は瓦器椀。平底の底部から体部は外傾しながら立ち上り、口縁部は外反する。ヘラミガキの幅は1mm以下ときわめて細い。

120土坑（図48） 16～18は土師器大皿。16・17は口縁が直立気味に立ち上がり、端部は丸く収まる。18は口縁が外側に開きながら立ち上がる。器壁は16・17よりも厚く、胎土に褐色粒・黒色粒を多く含む。

157土坑（図48） 19は土師器小皿。20は東播系須恵器鉢口縁部。21は瓦質土器鍋。口縁部は断面L字型を呈し受口状となる。外面に炭化物が付着する。22は瓦質土器羽釜。口縁は内傾し立ち上がりは低い。

122土坑（図48） 23～25は瓦器椀。23の口縁部は強いナデによって体部との間に段を有し、外反する。ヘラミガキの間隔は大きく、幅は約2mmと比較的広い。24・25は楠葉型瓦器椀。25は口径10.5cmの小型の瓦器椀。内面のヘラミガキの間隔はきわめて粗い。26は瓦質土器羽釜。口縁は内傾し立ち上がりは低い。胎土は粗く、0.5～1mmの長石粒を多く含む。

55土坑（図48） 27は土師器小皿。口縁部は弱く屈曲する。28は楠葉型瓦器椀。29は瓦質土器羽釜。口縁は直立気味に立ち上がり、端部は面を持つ。胎土は粗く、0.5～1mmの長石粒を多く含む。

365土坑（図48） 1～6は土師器小皿。1～5は口縁部が直線気味に立ち上がる。7・8は土師器大皿。7の口縁は直線的に外傾して立ち上がる。8は口縁部が弱く外反する。9～12は瓦器椀。9は大和型瓦器椀。口縁部は外反し端部内面に段を持つように沈線を施す。10～12は楠葉型瓦器椀。11は口縁端部内面に沈線を施す。12は皿状に外側に開く体部から口縁は直立気味に立ち上がる。

467土坑（図48） 13・14は土師器皿。15は楠葉型瓦器椀。口縁は直線的で、端部内面に沈線を施す。内面ヘラミガキの間隔は大きい。

363土坑（図48、図版二五） 35～38は土師器小皿。底部から口縁への屈曲が弱く、口縁は外側に開きながら立ち上り、端部は丸く収まる。38の口縁は丸みを持って立ち上がる。器壁がやや厚い。39は土師器大皿。底部から口縁への屈曲が弱く、口縁は外側に開きながら立ち上り、端部は丸く収まる。35は図46-1～18、36・37は図46-19～27、38は図46-28～44と同じ特徴を持つ。40は瓦器皿。内面ヘラミガキは摩滅により不明。41～46は瓦器椀。41は楠葉型瓦器椀。42～46は大和型瓦器椀。口径12.9～14.0cm。内面のヘラミガキの間隔は粗い。川越編年Ⅲ-B～C期。47は須恵器甕の口縁部。焼成は不良で断面灰

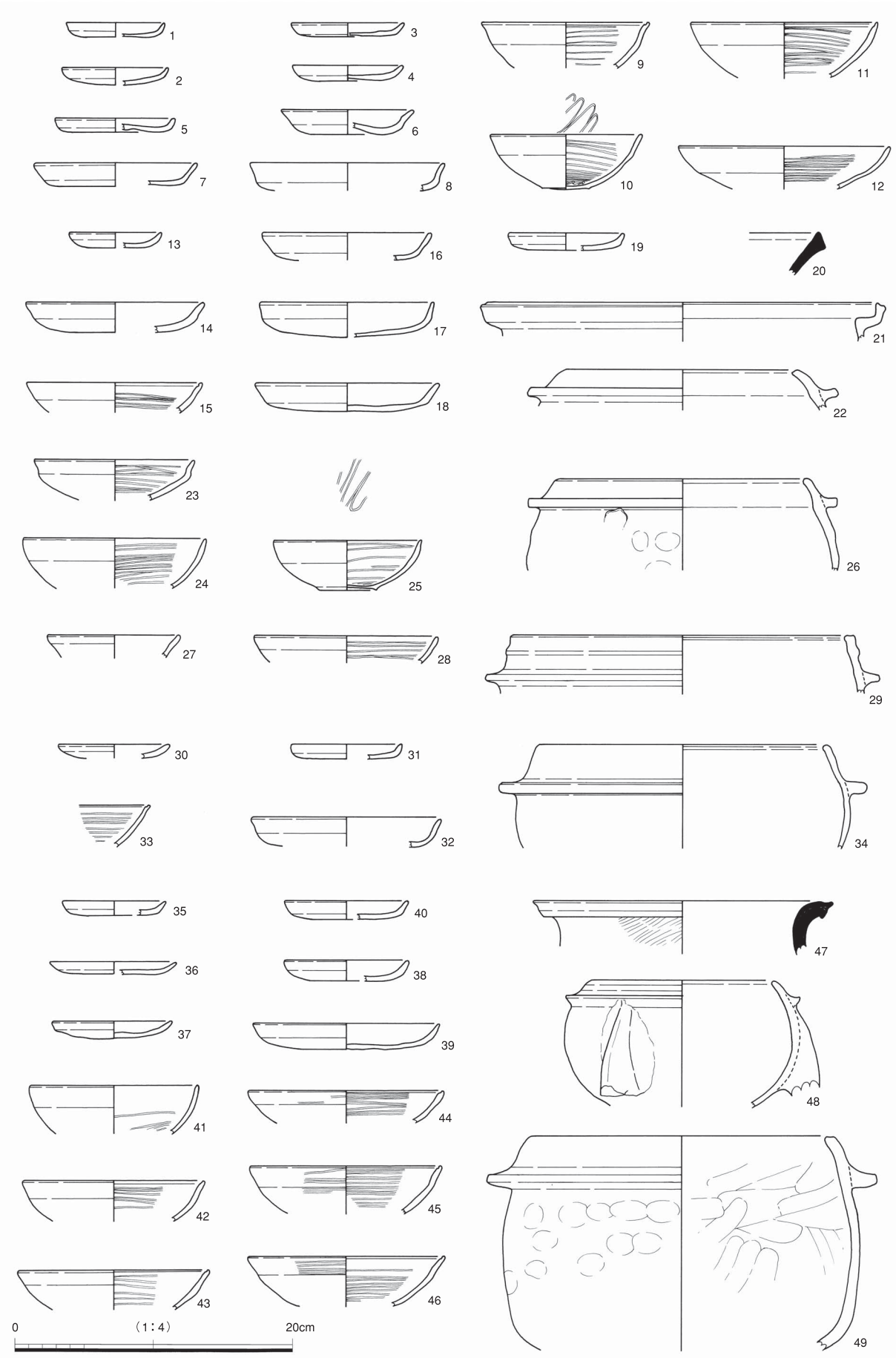


図48 2区ピット、土坑出土土器実測図

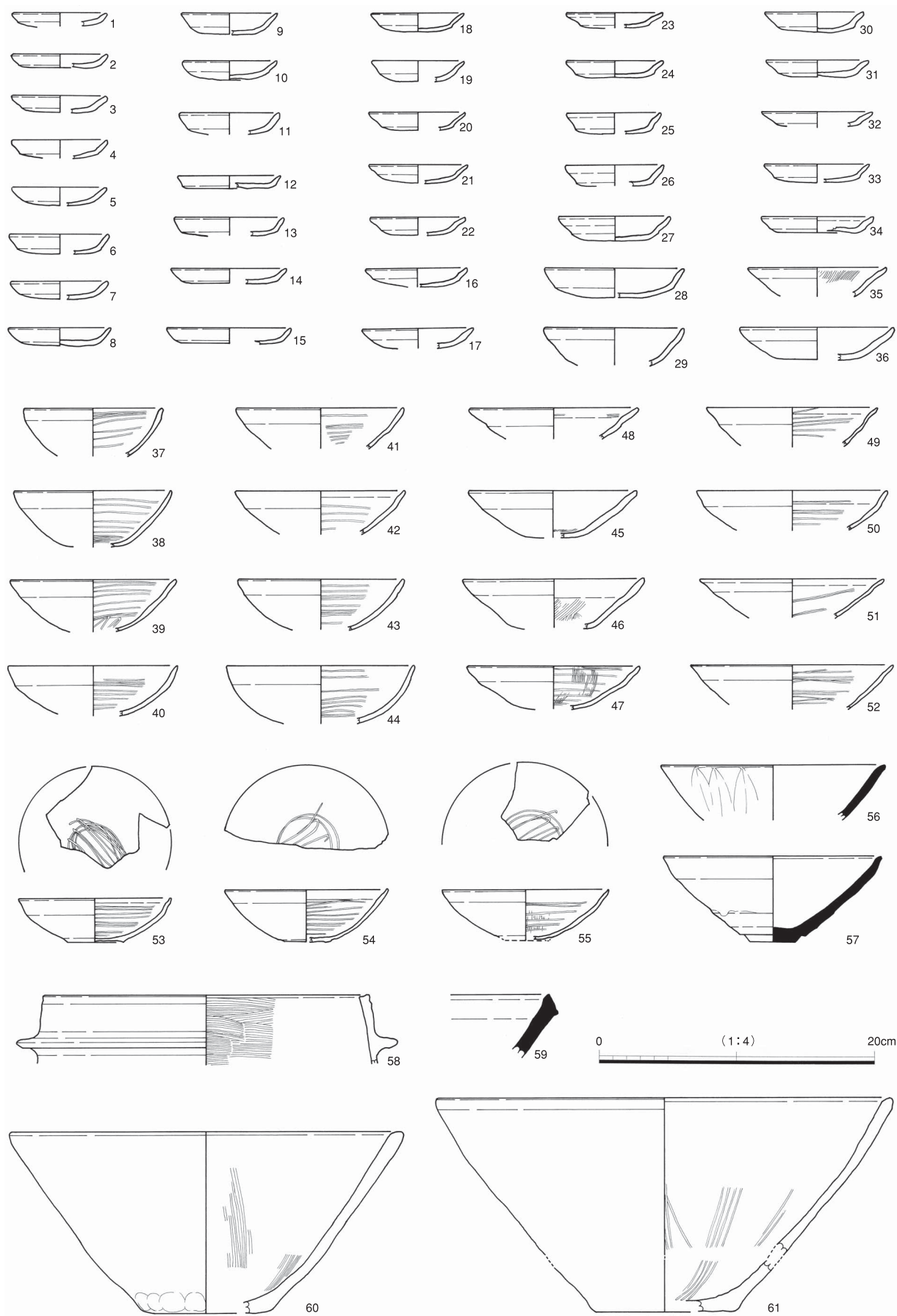


図49 2区728土間、731ピット出土土器実測図



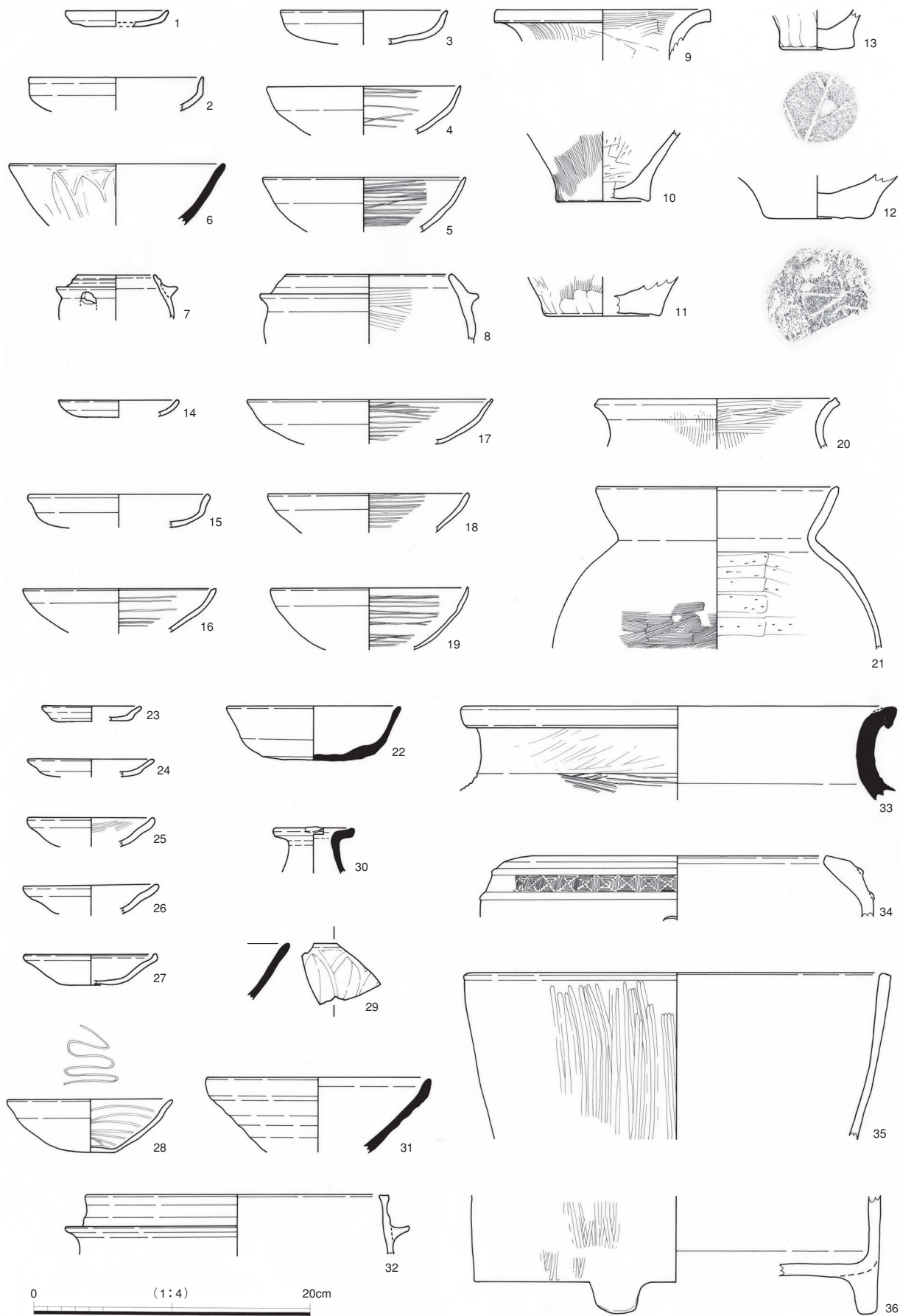


图50 2区包含層、55・301落ち込み出土土器実測図

褐色を呈する。48は瓦質土器の三足羽釜。口径13cmと小型である。外面体部に炭化物が付着。49は土師器羽釜。寸胴な胴部に内傾する口縁、口縁端部は面を持つ。体部外面は指頭圧痕が顕著に残る。内面は板状工具によるナデ。胎土に1mm大の長石・石英・チャートを含む。

728土間（図49） 1～59は728土間の構築土からの出土。1～36は土師器小皿。1～8・16・17は底部から口縁への屈曲が弱く、口縁は外側に開きながら立ち上る。端部は丸く収まる。1～8は口径7.0～7.5cm、16は口径8.0cm。17は口径10.0cmを測る。9～11は口縁が丸みを持って立ち上がる。口径6.5～7.0cm。12～15の口縁の立ち上りは短く、直線的に外側に開きながら立ち上がる。口径7.5～9.0cm。18～29・35・36は底部と口縁との境には強いナデによる段があり、口縁部上半は外反する。18～28は口径7.0～7.5cm。29・35・36は口径が10.0～11.0cmとやや大きく、器高も高い。30～34は立ち上がりの短い口縁は強いナデにより外反する。口径7.0～8.0cm。37～45・47～55は瓦器椀。37～44は楠葉型瓦器椀。口縁が直立気味に立ち上り、端部は丸く収まる。口径は12cm前後のものが多い。森島編年Ⅳ期。45～47は形態は同じであるが、46は土師器椀。口縁が外反し、端部は丸く収まる。内面にハケが残り、器壁が約5mmと厚い。口径12～13cm。49～55も口縁が外反するが、器壁が約3mmと薄い。口径が12.0～13.0cmの48・49・53～55と14.0～15.0cmの50～52がある。56は龍泉窯系青磁椀E類。57は瀬戸平椀。58は瓦質土器羽釜。直立する口縁の立ち上がりは高く、端部は面を持つ。

731ピット（図49） 60・61は瓦質土器播鉢。内面は共に使用による摩滅が著しい。

2区包含層（図50） 1は土師器小皿。口縁は丸みを持って立ち上り、端部は比較的シャープに収まる。2・3は土師器大皿。2は底部から口縁は屈曲気味に立ち上り、口縁部上半は外反する。3は底部から口縁は丸みを持って立ち上り、口縁部上半は外反する。4・5は楠葉型瓦器椀。6は龍泉窯系青磁椀E類。7・8は瓦質土器羽釜。7は小型の三足羽釜。9～13は弥生土器。いずれも胎土には1～2mmの長石、石英、チャートが含まれる。9は壺口縁部。口縁が屈曲気味に外反する。内外面調整はハケ、原体は粗い。10～13は底部、いずれも平底。12・13の底部には葉脈痕が残る。9～12は弥生時代中期前葉。13は弥生時代後期。

55落ち込み（図50） 14は土師器小皿。底部から口縁への屈曲が弱く、口縁は外側に開きながら立ち上る。端部は丸く収まる。15は土師器大皿。16～19は瓦器椀。16・17は大和型瓦器椀。共に内面へラミガキの幅は1mm以下と極めて細い。16は口縁端部内面に段を有するように沈線を持つが、口縁は外反しない。18・19は楠葉型瓦器椀。口径14.5cm。内面へラミガキの間隔は粗い。20は弥生土器甕の口縁部。中期前葉。内外面調整のハケの原体は粗い。21は布留式土器甕。

756落ち込み（図50） 22は須恵器杯A。口径12.5cm。胎土には約0.5mmの長石・石英・雲母などが含まれる。内外面下半が赤褐色を呈する。23～27は土師器小皿。23・24は口縁の立ち上りは低く、直線的に外側に開きながら立ち上がる。25～27は器高が約2.5cmと高く、口縁は屈曲する。28は瓦器椀。底部に高台は無く、体部は直線的に外側に開く。口縁部は外反気味である。内面へラミガキの幅は1mm以下と細い。29は龍泉窯系青磁椀E類。30は褐釉陶器瓶の口縁部。31は瀬戸平椀。外面底部付近を除き全面に灰釉を施釉。32は瓦質土器羽釜。口縁は直立気味に立ち上がり、端部は面をもつ。断面色調は褐色を呈し、焼成は土師質に近い。33は須恵器甕。口縁は外反して立ち上り、口縁端部は垂下して面をもつ。焼成は瓦質に近い。34～36は瓦質土器火鉢。34は炭素の吸着が認められない。

### 3. 4～7区出土遺物（図51）

この地区では、室町時代の遺物が主を占め、鎌倉時代の遺物は少ない。

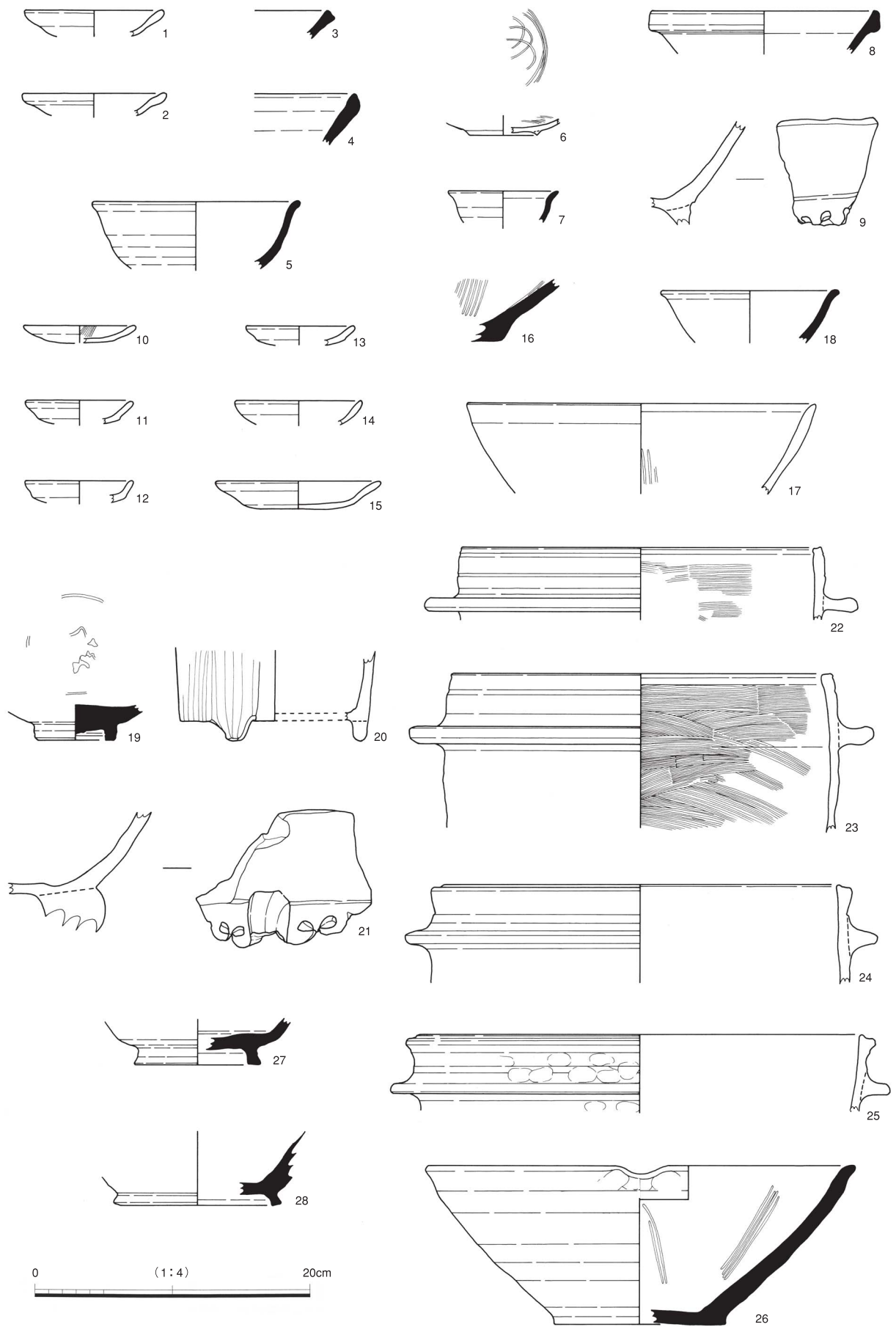


图51 4·5·7区出土土器实测图

水作田耕土 1・6～8は7区中世耕作土から、2～5・9は5区の中世耕作土からの出土。1・2は土師器小皿。3・4は東播系須恵器鉢。5は青磁椀Ⅳ類。釉調は灰色に近い。6は瓦器椀底部。7は7世紀代の須恵器鉢。8は白磁椀Ⅳ類。9は瓦質土器火鉢。

6溝 10～15は土師器小皿。いずれも器壁が約4mmと厚く、胎土は粗い。16・17は瓦質土器播鉢。18は龍泉窯系青磁椀E類。外面は無文。釉調は貫入が多く灰色を呈し、胎土は粗く、白色粒を多く含む。

16井戸 19は龍泉窯系青磁椀Ⅳ類の底部。高台内面は施釉しない。内面底部の文様は彫りが浅く釉が厚いため、不鮮明である。20・21は瓦質土器火鉢底部。22・23は土師質土器羽釜。口縁部の立ち上がりは高く、端部は面を持つ。23は焼成が土師質に近く、胎土に0.5mm程度の長石・石英が多く含まれる。

14溝 27は須恵器杯B。28は須恵器壺底部。体部には焼膨れが認められる。25は瓦質土器羽釜。口縁部の立ち上がりは高く、端部は凹面をなす。焼成が土師質に近く、胎土に0.5mm程度の長石・石英が多く含まれる。26は信楽焼播鉢。平底の底部から体部は直線的に開き、口縁部は小さく外反する。播目は4条一単位。色調は白色。胎土は粉っぽく3mm大の長石を多く含む。

### 第3節 石器・石製品

#### (1) 縄文・弥生時代の石器

70点あまりが出土した。多くは後世の遺構、包含層からの出土であるが、弥生時代の遺構に伴うものもある。ほとんどがサヌカイト製であり、石鏃、石匙、スクレイパー、楔形石器、剥片がみられる。剥片には、大型で素材となるもの、若干の二次加工があるもの、背面につぶれの見られるものがある。

石鏃(図52、図版二六-1) 1～5・11は三角形に近い形状をもつタイプであり、1・2は平基式、3～5・11は凹基式である。1・4・11は先端が尖る。2・5は先端が尖らず、とくに5はやや丸みを帯びている。2・3・5は欠損品である。6～10は柳葉形を呈するタイプである。すべて完形あるいはほぼ完形品である。9は有茎、6～8・10は無茎である。10は未成品である。1～5はパティナが発達し、6～11は発達しない。1～5は縄文時代、6～11は弥生時代の所産と考えられる。

石匙、スクレイパー、楔形石器、剥片(図54、図版二六-2) 1・2は石匙の完形品である。1は横型である。片面に主要剥離面、もう一方の面に自然面が残存する。二等辺三角形を呈し、頂点の位置に、抉り状の調整によってつまみ部が作り出される。刃部はやや外湾する。2は縦型である。片面に自然面が残存する。不均整な形状を呈し、一端を抉り状の調整によってつまみ部が作り出される。直線的な刃部が両側縁に認められるが、一方の調整は粗い。

3～6は完形あるいはほぼ完形のスクレイパーである。すべて片面調整である。3は矩形を呈する。背面側の2つの剥裏面が緩衝しあうように形成され、それぞれの末端から対極的な方向にフィッシャーが観察される。両極打法によって得られた素材から横長剥片を生産し、二次調整を行なったものと考えられる。4・5は不整形な形であり、刃部はやや外湾する。6は台形に近い形を呈する。一方の面が大きな一枚の主要剥離面となっている。一部に自然面を残す。刃部は直線的である。側縁の一部が抉り状に調整される。

7は楔形石器である。ほぼ矩形を呈し、対極的な位置につぶれが観察される。

8は素材剥片である。自然面が端部にまで残存する。主要剥離面は主軸に対して斜め方向からバルブカットされる。一部に若干の二次調整が認められる。

石皿(図53、図版二七-2) 730竪穴建物の床面に据えられた状態で出土した。安山岩製の石皿であ



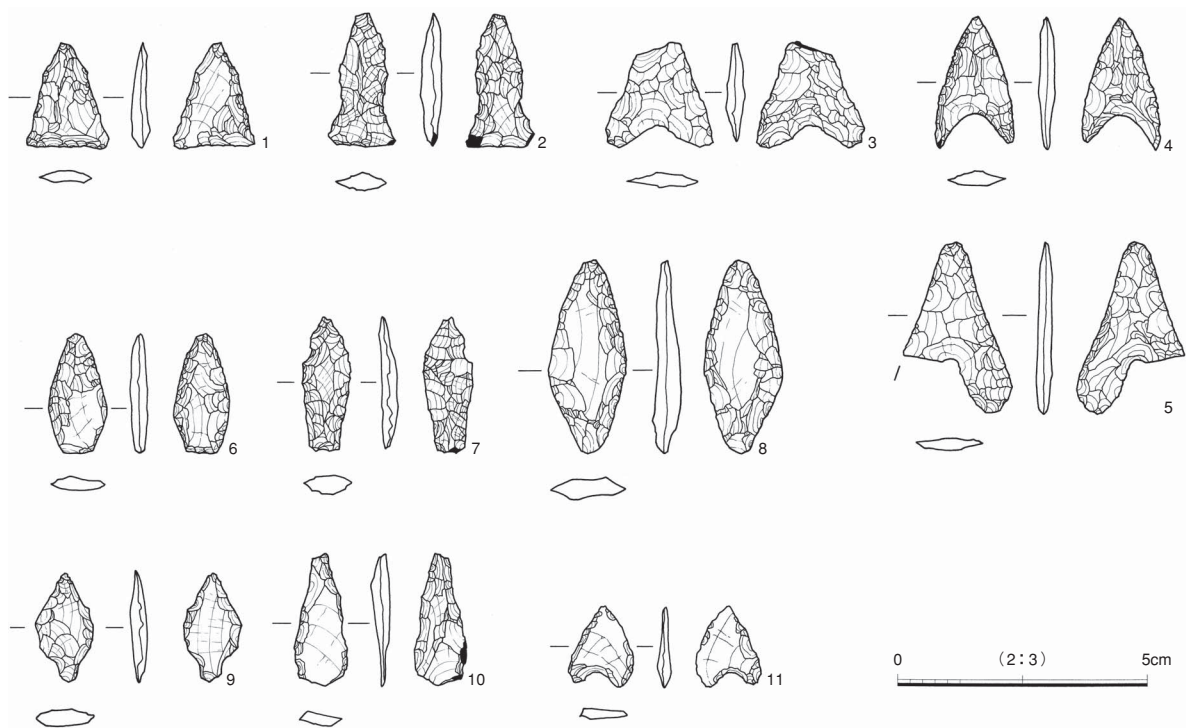


図52 石鏃実測図

る。断面形は、粗割りによって扁平である。使用面は全体的に滑らかで、微かに溝状に窪み、複数方向の擦痕が認められる。

## (2) 石製品

砥石(図55、図版二七-1) 6・7は49土坑に伴い、8世紀の所産である。そのほかは、中世のピットや包含層から出土した。

以下の記述において、砥石の各面の名称は、実測図上の方向に沿うこととした。擦痕の明瞭な面を表

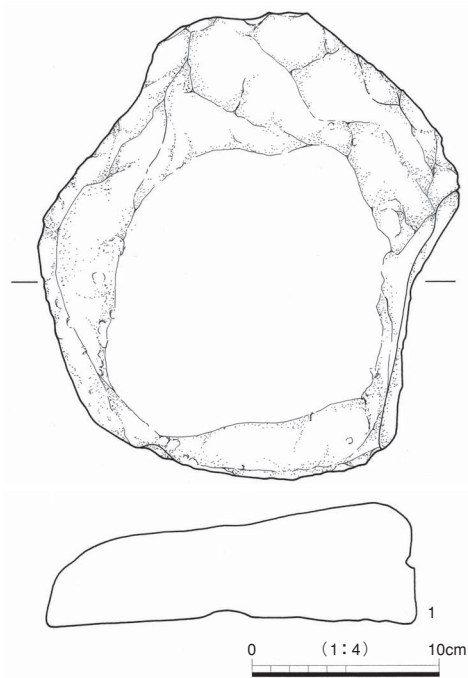


図53 石皿実測図

面とし、その裏側を裏面、向かって上側の面を上端面、下側の面を下端面、左側の面を左側面、右側の面を右側面とした。

1は凝灰岩製である。板状を呈する。中砥である。上下端面以外を砥面とする。表面中よりに、錐状のものによって穿たれたと思われる窪みが5つ見られる。2は流紋岩製である。板状を呈する。中砥である。上下端面以外を砥面とする。3は凝灰岩製である。板状を呈し、表面が微妙に凹面をなす。中砥である。上下端面以外を砥面とする。4は凝灰岩製である。板状を呈し、表裏面は微妙に凹面をなす。中砥である。主に表裏面を砥面とするが、左側面、下端面にも一部擦痕が認められる。5は凝灰岩製である。厚めの板状を呈する。中砥である。表裏面、左側面を砥面とする。6は凝灰岩製である。現状において撥状を呈する。上端に向かい厚くなる。下端は欠損する。中砥である。表裏面と左右側面を砥面とする。7は安山岩製である。比較的大型であり、不整形である。上

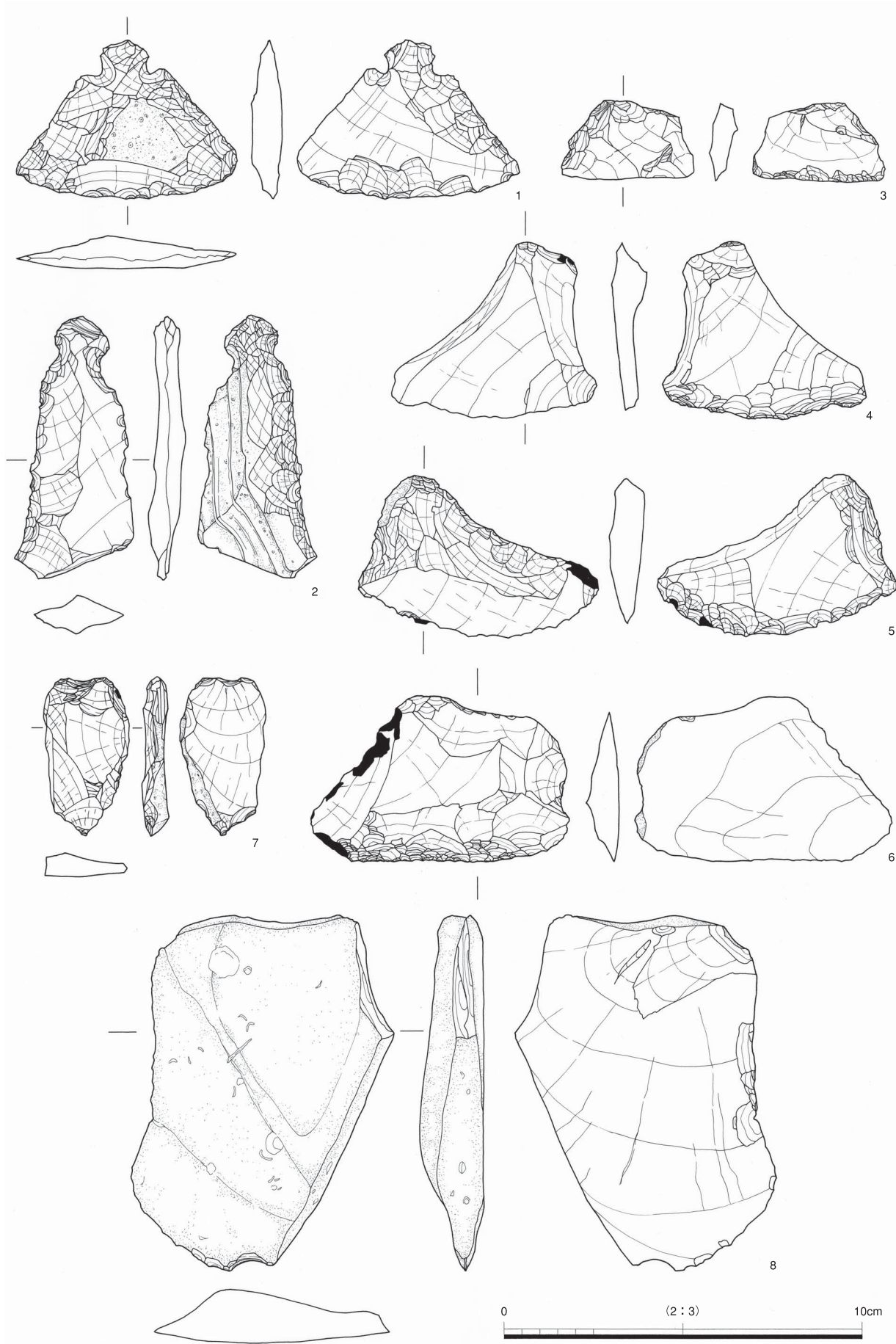


図54 石匙、スクレイパー、楔形石器、剥片実測図



図55 砥石実測図

端を欠損する。中砥である。砥面は表面のみである。台石の可能性もある。

#### 第4節 その他の遺物

瓦（図56、図版二七-3）瓦類は古代から中世のものが少量出土している。包含層や遺構等から出土している。

1は軒平瓦の左端部。最終単位の唐草は上向きに巻き、外区の珠文は比較的密に配される。左外区に範傷が認められる。胎土には1～5mmの長石が多く含まれる。焼成は須恵質。全体に摩滅が著しい。百済寺出土の均整唐草文軒平瓦と同範の可能性が高い。<sup>(註2)</sup>

2は平瓦。凸面縄叩き、凹面布目、厚さは2cmとやや薄い。焼成は須恵質で胎土には3mm大の長石粒を多く含む。

3は雁振瓦。凹面は粗いタテ方向のヘラ削り、一部に布目が残る。挟り部は丁寧にナデを施す。焼成はいわゆる瓦質。

4は丸瓦。凸面はタテ方向のヘラ状工具によるナデ、端部はヨコ方向ナデ、一部に縄タタキ痕が残る。内面にはコビキ跡と布目がわずかに残る。胎土は長石粒を少量含む。焼成はいわゆる瓦質。被熱痕跡が認められ、凸面剥離部などに焼土が付着する。

5は丸瓦状の土製品。円筒形の土製品を半裁するのは丸瓦と同じであるが、玉縁の部分にさらに粘土を巻き、筒型になっている。また、玉縁に相当する部分の内径は小さくカーブも急である。用途は不明であるが、被熱痕跡があり、焼けた板状の粘土と共伴して出土している。

壁土（図版二七-4）728土間の構



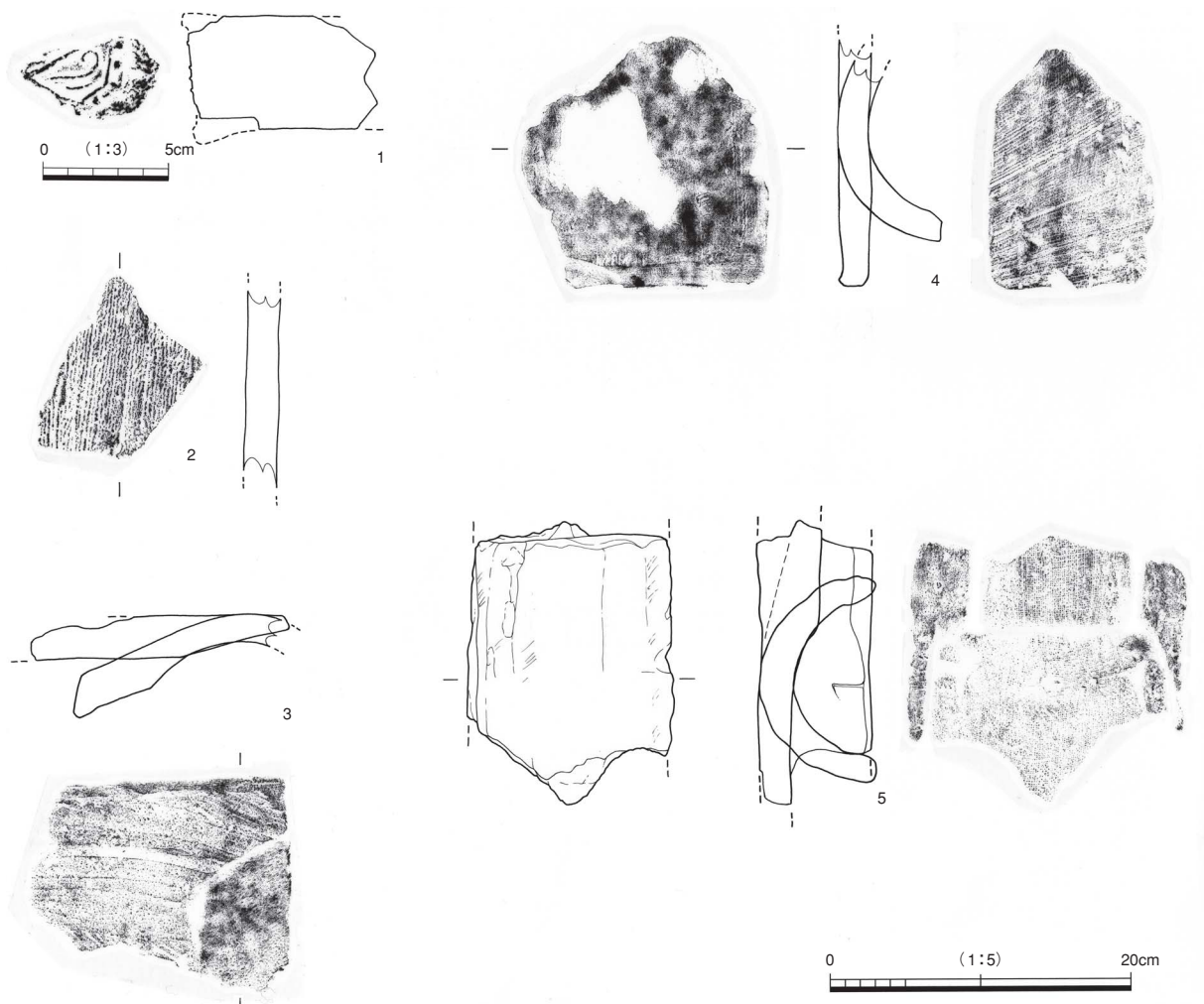


図56 軒平瓦拓影・実測図

築土より出土。被熱により固化している。4 cm角のものが多い。胎土は粗く3 mm大の長石・石英が多量に含まれ、被熱により失われているがスサの痕跡も確認できる。木舞下地の痕跡と思われる棒状の圧痕が認められるものもある。白土などの上塗りは認められない。

(註)

(1) (財)大阪府文化財センター 2006 『東倉治遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第146集

(2) 大阪府『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第四輯 昭和9年 図版33-3と同範の可能性が高い。

#### 参考文献

倉敷考古館 1971 『倉敷考古館研究集報』第7号

橋本久和 1980 『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会

川越俊一 1983 「大和出土瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』

横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について-型式分類と編年を中心として」

森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2

上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2

日本中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

奈良国立文化財研究所 1978 『平城京発掘調査報告書』Ⅶ

古代の土器研究会編 1998 『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』真陽社

寺沢 薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅰ-』木耳社

寺沢 薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅱ-』木耳社



## 第5章 総括

今回の調査では、交野山の山裾部の歴史の変遷を知る上で、様々な成果を得ることが出来た。ここでは、遺構・遺物の集中する2区を中心に時代ごとに成果を述べる。すでに述べたように2区は、東西を段丘崖、南北を開析谷に挟まれた独立した台地状となっている。台地の規模は東西60m、南北45mを測る。台地の平面形は、北東部が張り出す凸型を呈している。北面と西面は近世以降の水田耕作に伴う削平を受けているが、旧地形もこれに近いものと思われる。

### 1 縄文時代

遺構は検出されなかったが、早・中期の土器・石器が出土した。いずれの時期も出土量は多くない。石器は剥片などもあるものの、石鎌が多くを占める。

遺物の出土状況からみた場合、津田遺跡における縄文時代のあり方は、一年を通して生活を営む場所というよりも、山地に近い立地を活かした限定的な利用のされ方であったと推定される。

### 2 弥生時代

弥生時代中期では3棟の竪穴建物が検出された。3棟の建物は段丘面上に20mほどの間隔をもって位置し、集落自体は調査区外に広がることはなく、小規模な集落を形成する。竪穴建物はいずれも円形で、規模は直径約5～7mである。竪穴建物以外に弥生時代の遺構はほとんど検出されていない。遺物の出土量は少なく、竪穴建物からの出土遺物が大半を占める。竪穴建物から出土する土器は概ね第Ⅱ様式新相と考えられる。当該期の竪穴建物は大阪府下でも検出例が少なく、北河内地域では、八雲遺跡(守口市)、交北城ノ山遺跡(枚方市)、招提中町遺跡(枚方市)、上の山遺跡(枚方市・交野市)で確認されている。306・730竪穴建物において検出された炉堤は、近畿地方では早い段階のものであり、注目される。また、730竪穴建物は、掘形の深さが0.5mあり、府下の竪穴建物検出例と比較すると深い例になる。竪穴建物の深さに関しては、後世の削平の可能性もあるが、傾向として低地の平野部よりも、段丘上や丘陵上の比較的高所に位置する遺跡で検出される竪穴建物の方が深い<sup>(註2)</sup>。つまり、低地部において竪穴建物を構築する場合、掘形深度は地下水位などを考慮して設定されたことが想定でき、立地条件の違いにより建物構造に違いがあった事が推測される。

交野地域における弥生時代中期の状況を概観すると、中期前葉に天野川、穂谷川の流域の段丘面縁辺部において集落が出現し、中期中葉以降、台地の中央部や丘陵上へと集落の進出がみとめられる<sup>(註3)</sup>。中期の集落遺跡には、天野川流域の星丘西遺跡(第Ⅱ～Ⅴ様式)、村野遺跡(第Ⅲ～Ⅴ様式)、藤田山遺跡(第Ⅳ～Ⅴ様式)、私部城遺跡(第Ⅲ～Ⅳ様式)、車塚古墳下層遺跡(第Ⅲ様式)、穂谷川流域の招提中町遺跡(第Ⅱ～Ⅲ様式)、交北城ノ山遺跡(第Ⅱ～Ⅲ様式)、長尾丘陵上の田口山・長尾谷町遺跡(第Ⅲ～Ⅴ様式)<sup>(註4)</sup>、交野台地東端の津田城(古城地区)遺跡(中期後半)などがある。これらの遺跡は、沖積低地の形成が極めて小範囲であるという地形的な制約もあり、河内湖周辺部や淀川左岸の東奈良遺跡・安満遺跡のように大規模弥生集落を形成せず、中・小規模で一定の継続性をもつ集落を営むという特徴を示す。その中でも、招提中町遺跡、星丘西遺跡、田口山・長尾谷町遺跡は当地域において中心となる集落遺跡として位置づけられる。

津田遺跡は周辺の集落遺跡と比べると非常に小規模で、竪穴建物の規模も比較的小さく、建物を建て替えた状況も確認できない。加えて、出土する土器も第Ⅱ様式のものに限られており、集落の存続期間

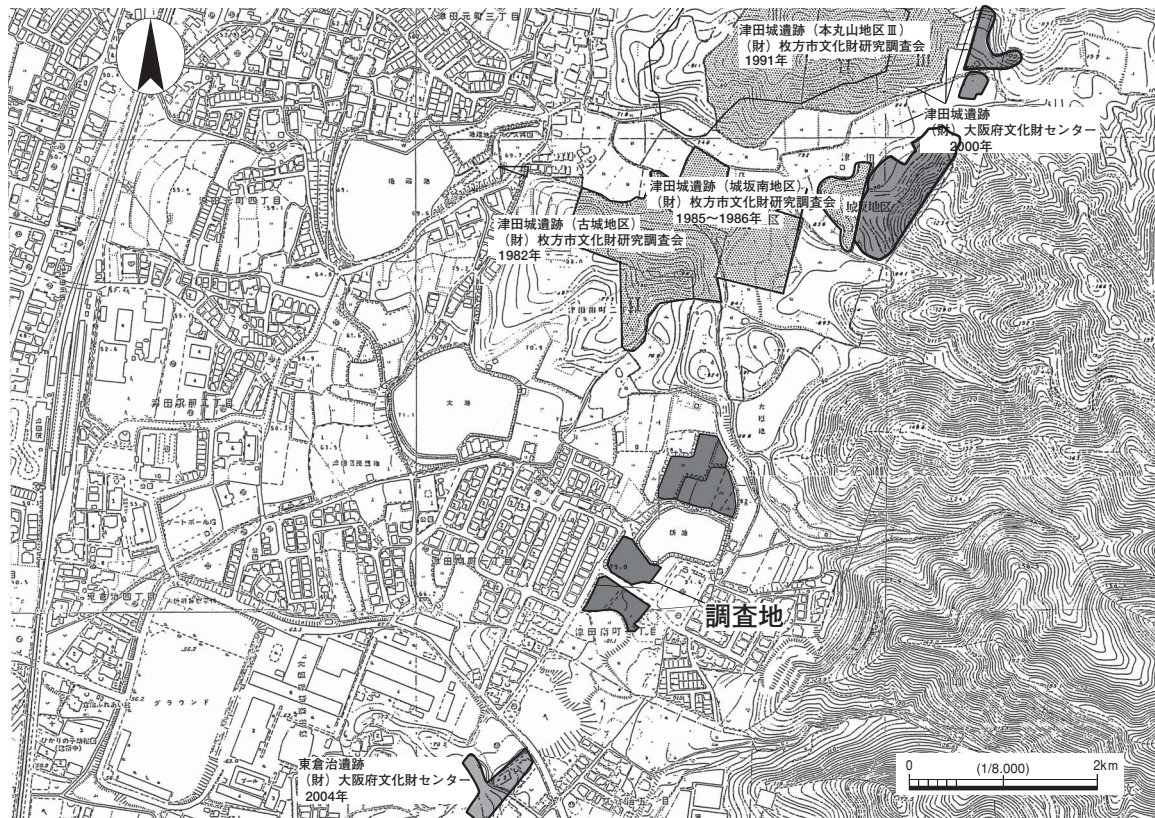


図 57 津田遺跡周辺の調査

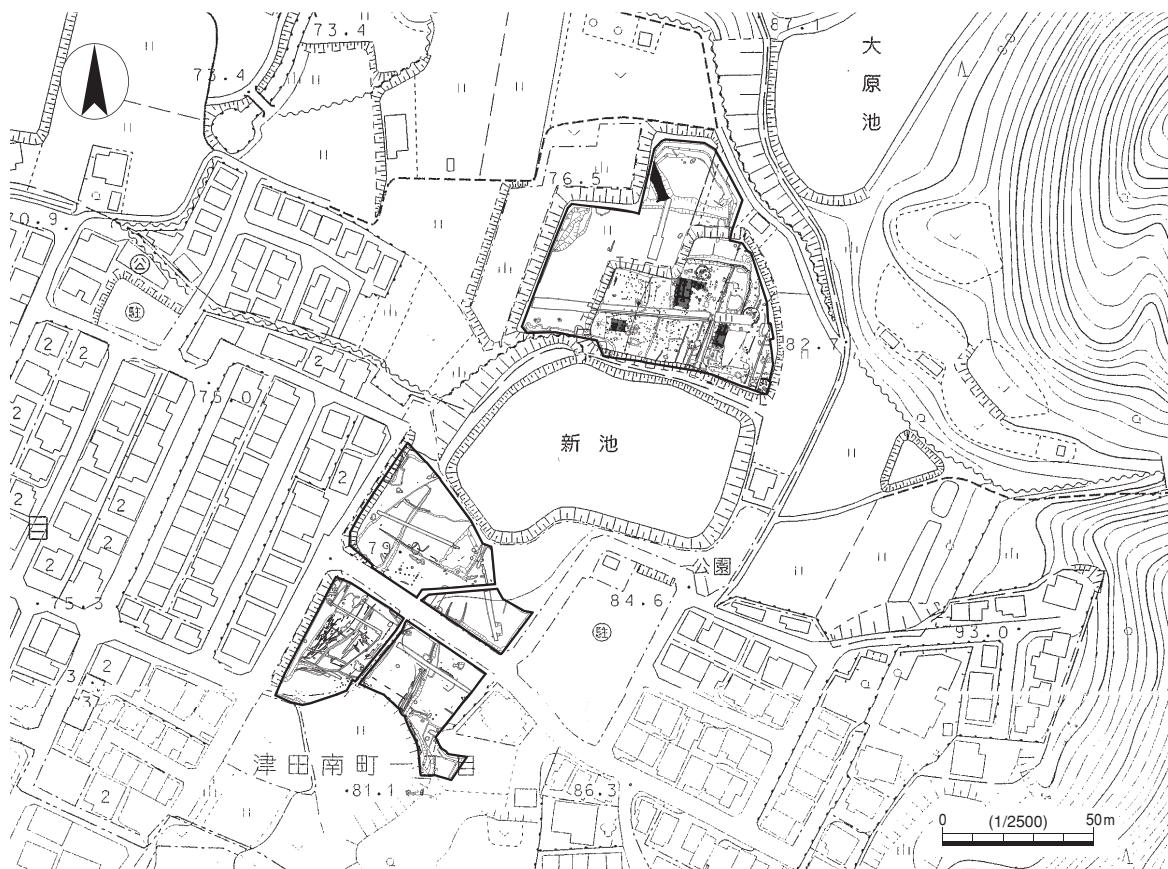


図 58 調査地周辺の地形



が短い事がわかる。津田遺跡では焼失住居が検出されており、弥生時代の焼失住居が比較的多く検出されている交野地域の中でも古い例として注目される。交野地域において検出される焼失住居の特徴として、住居内から遺物がほとんど出土しないことが挙げられ、住居廃絶時における祭祀行為との関連が指摘されている。<sup>(註5)</sup> また、出土した石器は、石鏃がほとんどで石包丁など農工具類は出土しない点も一般の集落とは異なる。このような津田遺跡の遺構・遺物の在り方は、周辺の集落遺跡と比較した場合、一定の期間にわたって集落が営まれる星丘西遺跡や交北城ノ山遺跡、田口山・長尾西遺跡などの集落遺跡とは様相が異なっている。つまり、集落規模や継続性、出土遺物等から判断すると、津田遺跡は一時的に営まれたキャンプサイト的な集落であると考えられる。現在は未確認ではあるが、付近に同時期の母村となる集落遺跡の存在が想定される。津田遺跡と同様の性格をもつ遺跡として津田城（古城地区）遺跡が挙げられる。津田城（古城地区）遺跡は、津田遺跡の谷を隔てた丘陵上に位置し、立地や集落の規模、出土遺物、竪穴建物の規模など津田遺跡と共通点が多い。このような遺跡の存在は、交野地域の集落の動態や在り方を考える上で重要であると考えられる。

### 3 中世の遺構

遺構の時期的なまとまりとして大きく13世紀前半と14世紀に分かれる。13世紀前半の主な遺構として掘立柱建物1・2、柵1・2、158溝、1区の255堤防、水田などがある。14世紀の主な遺構として掘立柱建物3があり、この南側の756落ち込みから出土する遺物は14世紀から15世紀前半のものであることから、掘立柱建物3のある2区南東部の利用は14世紀以降の可能性が高い。

掘立柱建物は276溝や柵1～3によって区画されており、区画の規模はほぼ40m四方となる。このような区画性の存在と限定的な地形から、2区で検出された遺構群の性格は居館と考えられる。以下、この構造についてまとめ、遺跡の性格について述べたい。

#### 建物構成

掘立柱建物2は、2区の中で最も規模の大きいものであるが、床面積54㎡と中世の建物としては中規模のものである。遺構の章でも述べたように、掘立柱建物2は厨房機能をもつ建物である。隣接する363土坑がカマド基底部とすれば、『信貴山縁起絵巻』に描かれるような屋外型のカマドと考えられる。<sup>(註6)</sup>

掘立柱建物1は床面積17.5㎡と小規模な付属的建物である。掘立柱建物2が主屋であった可能性が高い。13世紀前半の建物構成は、床面積54㎡の中規模な建物と小規模建物によって構成される。このようなあり方は、小経営農民層（上層農民）の宅地の建物構成と考えられている。<sup>(註7)</sup>

#### 区画施設

柵1と柵2は連続する一連の遺構とみられ、居館西面を画する施設である。柵は、構成する柱穴にほとんど重複が無く、補修がほとんどなされていない事がわかる。掘立柱という構造から耐久期間がそれほど長いとは考え難く、遺構としては未確認であるが、西面の区画施設は移動した可能性もある。

276溝は居館南西部を区画する最大幅3mの大溝である。しかし、東辺部は幅1.0～1.5mと幅が狭いため防御機能は考えがたく、立地から灌漑機能も考えられない。276溝の東辺部には、これと併行して278溝が存在する。この間には少数のピットが存在するものの顕著な遺構は無く、土塁が存在した事も想定される。しかし、276溝の埋没は段階的に進行しており、土塁の破壊などによる一時期の埋没では無い。また、平野部に面する西面側が掘立柱の柵により区画している事に対し、背面になる東面側に防御を目的とする土塁を構築したとは考え難い。276溝の機能としては、雨水の処理と共に居館北東側の区画の

明示性が重視されたと考えられる。

台地の下から居館への進入路は、2区を囲む段丘崖面の四面が後世の削平により地形が変化している為、調査では確認する事が出来なかった。東面は山地に面し、西面は柵1・2によって遮蔽されている為、東西面に存在したとは想定し難い。276溝が306堅穴建物付近で途切れる事、現状でも段丘崖面の傾斜が2区北東部分では比較的緩やかな事などから、276溝コーナー部付近の段丘崖面に進入部があり、276溝と278溝の間が進入路となり、276溝の途切れる部分が入り口であった可能性が高い。

#### 立地と規模

近畿における中世の居館遺構については、<sup>(註8)</sup>広瀬和雄、<sup>(註9)</sup>山川均、<sup>(註10)</sup>宇野隆夫などによって分類されている。ここでは、規模・立地・構造などから行う広瀬の分類に従って検討したい。津田遺跡は、立地から見るとB型にあたる。この類例が増えるのは14世紀以降とされ、今回の13世紀前半は早い例となる。B型で成立が12世紀にまで遡るものとして、京都府福知山市大内城が挙げられる。大内城は標高150m前後の上位河岸段丘最奥部、山地との境の緩斜面に位置し、中心施設は土塁と空濠で区画され、その規模はほぼ1町四方である。主屋は床面積が180㎡を超える大形建物でこれに数棟の付属屋を伴う。大内城を中世山城の始まりとする評価もあるが、<sup>(註11)</sup>中井均は土塁や濠のあり方から後の山城の系譜につながるものではなく、荘官の屋敷地や荘所として捉えている。津田遺跡と大内城の立地は、平地にある集落の後背地で用水権を掌握できる位置にある点では同じ条件にある。

居館規模からみると、津田遺跡は約40m四方と地形に規制されて規模はやや小さいが、平地の普遍的な居館規模である半町規模に近く、建物規模・構成も大内城とは異なる。この様に、今回の津田遺跡では、規模・建物構成ともに小規模なものが、13世紀の前半という比較的早い時期に山際に立地している点の特徴として指摘できる。

#### 交野の開発と居館

交野地域の中世における開発は、最近の発掘調査によって明らかになりつつある。有池遺跡では、12世紀代から集落が形成され始め、13世紀後半になると溝で区画された方形の屋敷地が密集し、集村が形成される。<sup>(註12)</sup>これと同時にそれまでの基幹水路は埋没し、灌漑水路が新たに整備された事が伺える。また、上私部遺跡では13世紀に方位に沿って水田区画が施工された事が明らかになっている。<sup>(註13)</sup>中世の交野地域の開発はこれから解明すべき点も多いが、13世紀になって集落の再編、耕地の整備・拡大が進行した事が推定される。

開析谷内の1区では、いわゆる谷水田が検出されており、居館の造営とほぼ同時に開析谷内の水田利用が始まっている。これは、耕作域の拡大と共に、山地から平野部の耕作地への用水路の整備に伴うものとみられる。開析谷埋土の花粉・珪藻・植物珪酸体分析の結果によると、13世紀代山地ではマツ林が広がっていた事が判明しており、これは樹木伐採に伴う二次林の増加の結果と考えられる。また、これまでの交野地域の平野部の分析結果では、この時期に耕作地と草地が拡大し自然環境が変化した結果、<sup>(註14)</sup>山地から土砂流出が度重なって起きた事が判明している。1区の255堤防は、この様な状況に対応する為に築かれたもので、これより下の耕作域と用水路を保持しようとしたのであろう。

今回検出された居館の造営主体は、その規模から考えるとそれほど上位階層とは考えがたく、地域中の支配領域は限られたものであったと思われる。大和では、平地居館が耕地の面的な整備後に集落の集村化とともに13世紀後半に集落内あるいは集落と離れて出現したとされる。<sup>(註15)</sup>このような状況は、交野地域でも存在したと思われるが、地理的環境でも述べたように、交野地域は大小の河川などによる多数の



段丘面が形成されており、中河内や大和のような広域の条里型地割りは施工されなかった。このような地形の制約下での耕地の整備には、山地からの多数の水源・用水を必要としたものと思われる。津田遺跡の小規模居館は、13世紀前半の平地部での耕地の整備とともに、山地からの用水を細かい単位で掌握する必要性から山麓に造営されたものと思われる。

以上述べてきたように、2区を中心とした調査地は、中世以前においては各時代にその立地を活かした特徴的な土地活用がなされ、ある時代、地域にとって象徴的な場所であった事が判明した。

(註)

- (1) 高野陽子 2007 「弥生時代における竪穴式住居の炉形態に関する一考察」『考古学に学ぶ』Ⅲ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- (2) 弥生時代の竪穴建物の深さについては、秋山浩三（大阪府文化財センター）、大木要（滋賀県立大学大学院生）の両氏よりご教示を受けた。
- (3) a 濱田延充 2001 「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『市史紀要』第8号 寝屋川市教育委員会  
b 西田敏秀・荒木幸治 2000 「淀川左岸地域における弥生集落の様相」『みずほ』第32号 大和弥生文化の会  
c 森井貞雄 2007 「枚方・交野地域における弥生集落の分布について」『私部南遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター
- (4) 田口山遺跡、長尾谷町遺跡は現在までの調査成果から、同一の集落として把握されている。
- (5) 註3 bに同じ。
- (6) 有池遺跡では、平面L字形を呈する掘立柱建物の張り出し部、いわゆる「ついや」の部分で、カマド基底部となる焼土混じりの礫敷土坑が検出されている。  
(財)大阪府文化財センター 2007 『有池遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第152集
- (7) 広瀬和雄 1986 「中世の胎動」『岩波講座 日本考古学 6』
- (8) 広瀬和雄 1998 「中世農村の考古学的研究」『中世集落と灌漑』シンポジウム中世集落と灌漑実行委員会  
A型は平地に立地する方形館、規模の違いからA1類（1町四方）、A2類（1町から半町の間）、A3類（半町）に分かれ、近畿ではA2類が最も多い。B型は段丘や丘陵に位置し、生活拠点としての性格と防御機能を併せ持つもの。C型はいわゆる城館とする。
- (9) 山川均 1999 「居館の出現とその意義」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集
- (10) 宇野隆夫 2001 『荘園の考古学』青木書店
- (11) 中井均 1999 「居館と詰城」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集
- (12) (財)大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第165集 報告の中では条里地割りが10～11世紀に導入されたとしている。その可能性は残るが、遺構・遺物の検出状況から13世紀に耕地整備が存在した事は確実と思われる。
- (13) 註(12)に同じ。
- (14) 註(12)に同じ。
- (15) 註(8)に同じ。

表1-1 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構面	遺構名	器種	口径 器高 底径 厚さ	色調	調整・特徴
41	1	2	10K-4b		345土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.4	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：オサエ、山形モチーフの押型文 内面：オサエ 微細な長石を多量に、1mmの石英、微細な雲母を微量に含む、神宮寺式
	2	2	10K-3c		306 竪穴住居	縄文土器 深鉢	- - - 0.5	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、市松文に近いモチーフの押型文 内面：オサエ、丁寧なナデ 1～2mmの角閃石を多量に、1mmの長石、微細な雲母を微量に含む、神宮寺式
	3	2	10K-4b		351土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.6	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、市松文に近いモチーフの押型文 内面：ナデ 1～2mmの角閃石を多量に、微細な雲母・長石を少量含む、神宮寺式
	4	2	10K-4 ・5d	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.5	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：オサエ、ナデ、市松文に近いモチーフの押型文 内面：オサエ、ナデ 1～2mmの角閃石を多量に、微細な雲母、1mmの長石を少量含む、神宮寺式
	5	2	10K-6b		459ピット	縄文土器 深鉢	- - - 0.6	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：オサエ、ナデ、市松文に近いモチーフの押型文 内面：オサエ、ナデ 1～2mmの角閃石、1mmの雲母を多量に、1mmの長石を微量に含む
	6	2	10K-4 ・5b	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 1.4	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、山形モチーフの押型文 内面：ナデ 1～2mmの石英を多量に、1mmの長石・チャートを少量含む、繊維土器、高山寺式
	7	2	10K-5c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.7	2.5Y7/4 浅黄色	外面：条痕、爪形文を施文、口縁部に鋸歯状文 内面：オサエ、条痕 1mmの雲母・角閃石を多量に、1mmの長石を少量、3～4mmの石英を微量に含む、41-10と同一固体の可能性あり、粕畑式類似
	8	2	10K-5b		478土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.6	2.5Y5/3 にぶい黄橙色	外面：条痕 内面：条痕 1mmの角閃石を多量に、1mmの長石を少量含む、早期末
	9	2	10K-4b ・c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.6	10YR5/4 にぶい黄褐色	外面：条痕 内面：条痕 1～3mmの角閃石を多量に、1～2mmの長石を少量含む、補修孔あり、早期末
	10	2	10K-5c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.8	2.5Y7/4 浅黄色	外面：条痕、爪形文を施文 内面：オサエ、条痕 微細な雲母・角閃石を多量に、1～2mmの長石を少量含む、補修孔あり、41-7と同一固体の可能性あり、粕畑式類似
	11	2	10K-5a	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.6	7.5YR5/3 にぶい褐色	外面：条痕、爪形文 内面：条痕 1～3mmの角閃石を多量に、1mmの長石を微量に含む、粕畑式類似
	12	2	10K-5a	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.6	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：条痕 内面：条痕 1～2mmの角閃石を多量に、1～2mmの石英・長石を微量に含む、早期末
	13	2	10K-4b		355ピット	縄文土器 深鉢	- - - 0.7	5YR6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文、低平な隆帯を貼り付け、爪形文を施文 内面：丁寧なナデ 1mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	14	2	10K-5c		391土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.9	2.5Y6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文、低平な隆帯を貼り付け、爪形文を施文 内面：ナデ 1mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	15	2	10K-4b		391土坑	縄文土器 深鉢	(31.0) - - 0.9	2.5Y6/6 橙色	外面：摩滅により不明、R縄文、低平な隆帯を貼り付け、爪形文を施文 内面：板状工具による擦過痕 1～2mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	16	2	10K-4 ・5c		760ピット	縄文土器 深鉢	- - - 0.6	5YR6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文、低平な隆帯を貼り付け、爪形文を施文 内面：ナデ 1～2mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	17	2	10K-5c		391土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.8	2.5Y6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文、低平な隆帯を貼り付け、爪形文を施文 内面：ナデ 1mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	18	2	10K-5c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.7	2.5Y6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文、低平な隆帯を貼り付け、爪形文を施文 内面：ナデ 1mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	19	2	10K-4a ～c		391土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.6	2.5Y6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文、低平な隆帯を貼り付け、爪形文を施文 内面：ナデ 1mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	20	2	10K-5c		391土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.6	2.5Y6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文を施文、低平な隆帯が垂下 内面：ナデ 1mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。縄文土器のみ厚さを表示

表1-2 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径 器高 底径 厚さ	色調	調整・特徴
41	21	2	10K-4c ・b	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.7	5YR6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文を施文 内面：ナデ 1mm～2mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	22	2	10K-4a ・b	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.9	5YR6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文を施文、低平な隆帯が垂下 内面：丁寧なナデ 1mm～2mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	23	2	10K-4a ～c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.7	5YR6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文を施文、爪形文を縦位に施文 内面：ナデ 1mmの長石・石英を多量に含む、船元I式B類
	24	2	10K-4b	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.6	5YR6/6 橙色	外面：丁寧なナデ、R縄文を施文 内面：丁寧なナデ 1mmの長石・石英を少量含む、船元I式B類
	25	2	10K-4a		276溝	縄文土器 深鉢	- - - 1.4	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：摩滅により不明、爪形文を施文、波頂部両側辺を深く刺突 内面：摩滅により不明 1～2mmの石英を多量に、微細な長石、1mmのチャートを含む、船元I式B類
	26	2	10K-3a		723焼土坑	縄文土器 深鉢	- - - 1.3	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、R縄文を施文 内面：ナデ 1mmの長石を多量に、1mmの石英を少量含む、船元I式B類
	27	2	10K-4a ～c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.8	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、R縄文を施文 内面：ナデ 1mm～2mmの長石を少量含む、船元I式B類
	28	2	10K-4a ・b	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.7	7.5YR6/6 橙色	外面：ナデ、R縄文を施文 内面：ナデ、口縁部内側が肥厚し、端部を二枚貝腹縁で刻む 1mm～2mmの長石・石英を少量含む、船元I式D類
	29	2	10K-4a ～c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 0.8	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、R縄文を施文、端部を二枚貝腹縁で刻む 内面：ナデ 1mmの長石・石英を多量に、1mmの角閃石を微量に含む、船元I式D類
	30	2	10K-3d		757土坑	縄文土器 深鉢	- - - 0.8	5YR5/4 にぶい赤褐色	外面：ナデ、RL縄文、端部にLR縄文を施文 内面：ナデ 1～2mmの角閃石、1mmの長石をまばらに含む。船元I式G類
	31	2	10K-3b ・c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 2.4	2.5Y6/6 橙色	外面：ナデ 内面：ナデ 1～2mmの長石を多量に、1mmの石英を少量含む、五角底、船元I式
	32	2	10K-4a ～c	包含層		縄文土器 深鉢	- - - 1.3	5YR5/4 にぶい赤褐色	外面：ナデ、RL縄文を施文 内面：ナデ 1～2mmの角閃石、1mmの長石を少量含む、中期前半
	33	2	10K-4b ・c	包含層		縄文土器 深鉢	- - (5.2) 1.2	10YR7/6 明黄褐色	外面：ナデ 内面：ナデ 微細な角閃石、1mmの長石・石英を少量含む、工具の痕跡あり、中期前半
42	1	2	10K-5c		391土坑	弥生土器 甕	- (7.8) 6.4	7.5YR6/6 橙色	外面：ハケ 内面：ハケ 外底面に葉脈痕
	2	2	10K-3e		305 堅穴建物	弥生土器 甕	- (16.5) 7.8	2.5Y7/2 灰黄色	外面：ハケ 内面：ハケ 外底面に葉脈痕
	3	2	10K-3c		306 堅穴建物	弥生土器 甕	(18.4) (2.6) -	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ハケ 内面：ハケ
	4	2	10K-5b		703 堅穴建物	弥生土器 壺	- (27.7) 5.6	10YR7/6 明黄褐色	外面：頸部・底部はハケ、胴部はミガキ 内面：ナデ
43	1	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	(10.2) (2.9) -	7.5YR6/4 にぶい橙色	外面：ナデ、ハケ、口縁端部に2条の凹線文、円形竹管浮文 内面：ナデ
	2	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	(14.0) (3.7) -	7.5YR6/4 にぶい橙色	外面：ナデ、ミガキ、口縁端部に2条の凹線文がわずかに残る。 円形竹管浮文 内面：ナデ
	3	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	(16.0) (1.9) -	10YR7/4 にぶい黄褐色	外面：ナデ、ハケ、口縁端部に3条の凹線文 内面：ナデ
	4	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	(16.0) (5.2) -	10YR7/4 にぶい黄褐色	外面：ナデ、ハケ、口縁端部に2条以上の凹線文 内面：ナデ、ハケ

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。縄文土器のみ厚さを表示

表1-3 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構名	遺構名	器種	口径 器高 底径	色調	調整・特徴
43	5	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 甕	(12.8) (4.9) -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ 内面：ナデ
	6	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 甕	(14.4) (4.1) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：摩滅のため不明 内面：摩滅のため不明
	7	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	(19.6) (3.4) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ、ミガキ
	8	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	- - -	10YR6/6 明黄褐色	外面：ミガキ 内面：ミガキ
	9	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	(20.0) (5.0) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ
	10	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	(20.0) (4.4) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、ミガキ 内面：ミガキ
	11	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	- - -	10YR7/6 明黄褐色	外面：ミガキ 内面：坏部はミガキ、脚部はハケ 円形の透孔が2ヶ所残存
	12	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	- - -	7.5YR8/6 浅黄橙色	外面：坏部と裾部はハケ、脚柱部はミガキ 内面：坏部はミガキ、脚柱部はナデ
	13	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	- - -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ミガキ 内面：脚部はナデ、坏部は摩滅のため不明 円形の透孔が1ヶ所残存
	14	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	- - -	10YR7/6 明黄褐色	外面：ミガキ 内面：坏部はミガキ、脚部はナデ 円形の透孔が3ヶ所残存
	15	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 高坏	- (7.4) (13.2)	7.5YR6/6 橙色	外面：ミガキ 内面：脚部はハケ、坏部は摩滅のため不明 4方向に円形の透孔
	16	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	- (2.5) (4.0)	7.5YR6/6 橙色	外面：ハケ 内面：ハケ
	17	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	- (3.3) 4.0	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ハケ 内面：ハケ 外底面に葉脈痕、煤付着
	18	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	- (3.4) 1.3	2.5YR8/4 赤褐色	外面：ケズリ 内面：ハケ
	19	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	- (2.9) 3.9	7.5YR6/6 橙色	外面：ミガキ 内面：ハケ
	20	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	- (4.7) 5.4	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ハケ、ミガキ 内面：ハケ
	21	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 壺	- (3.8) 3.4	7.5YR7/6 橙色	外面：摩滅のため不明 内面：摩滅のため不明
	22	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 鉢	- (2.7) 5.0	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ 内面：ハケ
	23	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 鉢	- (4.0) (4.1)	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ 内面：ハケ
	24	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 鉢	- (3.2) 2.8	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：羽状タタキ 内面：ハケ 焼成前に底部を穿孔
	25	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 鉢	11.0 6.6 -	10YR8/4 浅黄色	外面：摩滅のため不明 内面：ハケ 焼成後に底部を穿孔
	26	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 甕蓋	3.6 (3.6) -	10YR6/4 にぶい黄褐色	外面：ナデ 内面：ハケ
	27	6-2	11L-2・ 3h・i	包含層		弥生土器 甕	- (2.4) 2.4	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：タタキ 内面：ハケ 焼成前に底部を穿孔

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。



表1-4 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径器高底径	色調	調整・特徴
43	28	6-2	11L-2・3h・i	包含層		弥生土器甕	- (3.3) 3.8	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：タタキ 内面：ハケ
	29	6-2	11L-2・3h・i	包含層		弥生土器甕	- (2.7) 2.8	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：タタキ 内面：摩滅のため不明
	30	6-2	11L-2・3h・i	包含層		弥生土器甕	- (9.5) (4.9)	10YR7/2 にぶい黄橙色	外面：タタキ 内面：ハケ
	31	6-2	11L-2・3h・i	包含層		弥生土器甕	- (18.8) (5.0)	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：タタキ、ケズリ 内面：ケズリ、ハケ
	32	6-2	11L-2・3h・i	包含層		弥生土器甕	16.8 23.8 3.9	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、ハケ、タタキ 内面：ナデ、ハケ
44	1	7	11L-6c		49土坑	須恵器杯B蓋	- 3.4 17.6	N6/ 灰色	外面：回転ヘラケズリ、裾部と摘み部は回転ナデ 内面：回転ナデ
	2	7	11L-7c		22土坑	須恵器杯B蓋	- (2.0) 17.4	N5/ 灰色	外面：回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ
	3	7	11L-6c		49土坑	須恵器杯A	11.5 3.6 8.5	5Y6/1 灰色	外面：回転ナデ、底部はヘラ切り、ナデ 内面：回転ナデ
	4	7	11L-6c		49土坑	須恵器杯A	(13.5) 3.5 (8.6)	N4/ 灰色	外面：回転ナデ、底部はヘラ切り、粗いナデ 内面：回転ナデ、底部はナデ
	5	7	11L-7c		22土坑	須恵器杯A	- (2.1) (9.4)	5Y7/1 灰白色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
	6	7	11L-7c		22土坑	須恵器椀	(13.8) (4.8) -	N5/ 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
	7	7	11L-6c		49土坑	須恵器椀	(14.0) (6.5) -	5Y7/1 灰白色	外面：回転ナデ、底部付近はヘラケズリ 内面：回転ナデ
	8	2	10K-3d		308 堅穴建物	須恵器盤	43.6 9.6 26.2	2.5Y7/2 灰黄色	外面：回転ナデ、下部1/3は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部はナデ
	9	2	10K-3d		308 堅穴建物	土師器杯B蓋	- 2.6 15.8	5YR6/6 橙色	外面：ナデ、ヘラミガキ、摘み部はハケ 内面：ナデ、ヘラミガキ
45	1	1	10J-6・7h		259水田	瓦器椀	(13.0) (2.9) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：口縁部はヨコナデ、端部に沈線 内面：ヘラミガキ 炭素の吸着なし、樟葉型
	2	1	10J-6i		255堤防 (新段階)	瓦器椀	(12.0) (3.7) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ 樟葉型
	3	1	10J-6i		255堤防 (新段階)	瓦器椀	(14.5) (4.2) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ 炭素の吸着なし、樟葉型
	4	1	10J-6i		259水田	土師器鉢	(23.8) (8.5) -	2.5Y6/6 橙色	外面：摩滅により不明 内面：ヘラケズリ
46	1	2	10K-6c		158溝	土師器皿	7.8 1.1 -	7.5YR6/3 にぶい褐色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	2	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) 0.8 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	3	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) 0.9 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	4	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) 1.0 -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	5	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	(8.0) 0.9 -	7.5YR6/3 にぶい褐色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表1-5 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径器高底径	色調	調整・特徴
46	6	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.1 1.2 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	7	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.1 1.2 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	8	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	(8.2) 1.2 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	9	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.2) 1.1 -	10YR6/1 褐灰色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	10	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) 1.1 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	11	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) 1.0 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	12	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	(7.8) 1.1 -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	13	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.1 1.0 -	7.5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	14	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.2 1.6 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	15	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.2 1.3 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	16	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.1 1.3 -	7.5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	17	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.2 1.3 -	7.5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	18	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.1 1.4 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	19	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	7.6 1.5 -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	20	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) (1.2) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	21	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	(8.0) 1.5 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	22	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.0 1.4 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	23	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) 1.3 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	24	2	10K-6c		158溝	土師器皿	8.0 1.5 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	25	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.2 1.2 -	7.5YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	26	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.4 1.4 -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	27	2	10K-7b・c		158溝	土師器皿	8.2 1.4 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	28	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(8.0) 1.1 -	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表1-6 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構面	遺構名	器種	口径器高 底径	色調	調整・特徴
46	29	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(8.4) 1.2 -	7.5YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	30	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(8.0) 1.1 -	7.5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	31	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	8.0 1.1 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	32	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(8.0) 1.2 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	33	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(8.0) 1.3 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	34	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(8.1) 1.4 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	35	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(8.8) 1.0 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	36	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	8.8 1.4 -	5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	37	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(8.0) 1.3 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	38	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(7.8) 1.5 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	39	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(8.0) 1.4 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	40	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(8.0) 1.1 -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	41	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(8.1) 1.3 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	42	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(8.0) (1.3) -	7.5YR7/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	43	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	8.4 1.2 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	44	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	8.4 1.5 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	45	2	10K-7b ・c		158溝	瓦器 皿	9.2 1.6 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	46	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	11.0 1.6 -	7.5YR6/1 褐灰色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	47	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(12.0) 2.0 -	2.5Y6/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ 被熱、煤付着
	48	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(12.0) 1.7 -	7.5YR5/2 褐灰色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
49	2	10K-6c		158溝	土師器 皿	(12.0) 2.0 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ	
50	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(12.0) 2.3 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ	
51	2	10K-7b ・c		158溝	土師器 皿	(12.0) 2.5 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ	

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表1-7 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径器高底径	色調	調整・特徴
46	52	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(12.0) 1.9 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	53	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(13.0) 2.0 -	7.5YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	54	2	10K-7b ・c		158溝	土師器皿	(12.0) 2.1 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	55	2	10K-6c		158溝	土師器皿	12.6 2.5 -	7.5YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	56	2	10K-7b ・c		158溝	土師器皿	(13.0) 2.0 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	57	2	10K-7b ・c		158溝	土師器皿	(13.0) 2.1 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	58	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(13.0) 2.0 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	59	2	10K-7b ・c		158溝	土師器皿	(13.0) 2.0 -	7.5YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	60	2	10K-6c		158溝	土師器皿	(13.8) 2.0 -	7.5YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	61	2	10K-7b ・c		158溝	瓦器椀	(11.0) 4.5 3.8	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジグザグ状の暗文
	62	2	10K-6c		158溝	瓦器椀	(12.6) (3.3) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	63	2	10K-6c		158溝	瓦器椀	(12.8) (3.8) (5.8)	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	64	2	10K-6c		158溝	瓦器椀	(14.0) 3.3 (3.3)	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジグザグ状の暗文
	65	2	10K-6c		158溝	瓦器椀	(13.0) 3.0 -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	66	2	10K-6c		158溝	瓦器椀	(12.8) (4.1) -	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	67	2	10K-6d		158溝	瓦器椀	(14.0) (3.9) -	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	68	2	10K-6c		158溝	瓦器椀	(13.5) 4.2 5.8	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	69	2	10K-7b ・c		158溝	瓦器椀	13.3 4.3 4.4	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジグザグ状の暗文
	70	2	10K-7b ・c		158溝	瓦器椀	(13.2) 4.5 3.7	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジグザグ状の暗文
	71	2	10K-6c		158溝	瓦器椀	13.3 4.5 (4.8)	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、ヘラミガキ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線、見込み部にジグザグ状の暗文
72	2	10K-7b ・c		158溝	瓦器椀	13.4 4.3 5.9	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジグザグ状の暗文	
47	1	2	10K-5b		469土坑	土師器皿	(7.2) 0.8 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	2	2	10K-5b		469土坑	土師器皿	(7.2) 0.8 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。



表1-8 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構面	遺構名	器種	口径器高 底径	色調	調整・特徴
47	3	2	10K-5b		469土坑	土師器 皿	(8.0) 1.0 -	7.5YR7/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	4	2	10K-5b		469土坑	土師器 皿	(7.4) 1.1 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	5	2	10K-5b		469土坑	土師器 皿	(7.4) 1.1 -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	6	2	10K-5b		469土坑	土師器 皿	(9.2) (1.7) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	7	2	10K-5b		469土坑	瓦器 椀	(11.6) (3.7) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部に暗文 樟葉型
	8	2	10K-5b		469土坑	瓦器 椀	(12.6) (3.5) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部に暗文 樟葉型
	9	2	10K-5b		469土坑	瓦器 椀	(12.6) 3.9 3.7	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部に暗文 樟葉型
	10	2	10K-5b		469土坑	瓦器 椀	(12.0) (3.0) -	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	11	2	10K-5b		469土坑	瓦器 椀	(12.0) 3.1 2.9	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部に輪状の暗文 樟葉型
	12	2	10K-5d		581ピット	土師器 皿	7.4 1.2 -	7.5YR7/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	13	2	10K-5d		581ピット	土師器 皿	7.0 0.9 -	7.5YR8/6 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	14	2	10K-5d		581ピット	土師器 皿	(7.2) 1.0 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、口縁部はヨコナデ
	15	2	10K-5d		581ピット	土師器 皿	(7.4) 1.1 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	16	2	10K-5d		581ピット	土師器 皿	(8.0) 1.3 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	17	2	10K-5d		581ピット	土師器 皿	(11.0) 2.1 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	18	2	10K-5d		581ピット	瓦器 椀	(11.4) (3.6) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	19	2	10K-5b		476土坑	瓦器 椀	(11.6) 3.8 -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	20	2	10K-8c		242ピット	土師器 皿	(7.2) (1.3) -	7.5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	21	2	10K-8c		242ピット	土師器 皿	8.2 1.7 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	22	2	10K-8c		242ピット	土師器 皿	12.8 2.9 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	23	2	10K-7c		125ピット	土師器 皿	13.0 2.7 -	10YR8/4 浅黄色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	24	2	10K-8c		241ピット	土師器 皿	8.3 1.2 -	7.5YR7/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	25	2	10K-8c		241ピット	土師器 皿	(8.0) 1.5 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表1-9 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径器高底径	色調	調整・特徴
47	26	2	10K-8c		241ビット	土師器皿	(14.0) (1.9) -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	27	2	10K-8c		241ビット	瓦器椀	(12.0) (2.0) -	10YR8/1 灰白色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線
	28	2	10K-8c		241ビット	瓦器椀	(14.0) 5.2 -	5Y7/1 灰白色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	29	2	10K-8d		57ビット (槽1)	土師器皿	(8.2) 1.7 -	7.5YR7/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	30	2	10K-8d		154ビット 掘立柱建物1	土師器皿	(10.0) (1.9) -	10YR3/1 黒褐色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	31	2	10K-8d		78ビット 掘立柱建物1	瓦器椀	(12.6) (4.4) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 炭素の吸着なし、樟葉型
	32	2	10K-3b ・4c		276溝	土師器皿	(8.4) 1.2 -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	33	2	10K-4a		276溝	土師器皿	(10.8) 1.9 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	34	2	10K-3b ・4c		276溝	土師器皿	(11.7) (2.3) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	35	2	10K-3b ・4c		276溝	瓦器椀	(12.0) (4.9) -	7.5Y5/1 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	36	2	10K-4a		276溝	瓦器椀	(13.4) (3.2) -	10YR8/1 灰白色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	37	2	10K-4a		276溝	青磁椀	(16.8) (5.2) -	5GY5/1 オリーブ灰色	外面：片切彫りの連弁文、施釉 内面：施釉 龍泉窯系青磁
	38	2	10K-3b		276溝	白磁 四耳壺	- - -	7.5Y8/1 灰白色	外面：回転ナデ、施釉 内面：回転ナデ、施釉
	39	2	10K-3d		276溝	陶器 盤	- (4.0) (12.8)	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	外面：回転ナデ、露胎 内面：回転ナデ、黄釉を施釉、鉄釉を線状に2条施す
48	1	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(7.0) 1.1 -	5YR8/4 淡橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	2	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(7.5) 1.3 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	3	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(8.0) 0.9 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	4	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(7.8) 1.2 -	7.5YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	5	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(8.4) 1.0 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	6	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(9.3) 1.8 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ 煤付着
	7	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(11.6) 1.7 -	10YR8/2 灰白色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	8	2	10K-5c		365土坑	土師器皿	(13.8) 2.0 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	9	2	10K-5c		365土坑	瓦器 椀	(11.8) (3.3) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 大和型

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表1-10 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径 器高 底径	色調	調整・特徴
48	10	2	10K-5c		365土坑	瓦器 椀	(10.8) 3.9 (3.4)	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部に暗文 樟葉型
	11	2	10K-5c		365土坑	瓦器 椀	(13.2) (3.9) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 樟葉型
	12	2	10K-5c		365土坑	瓦器 椀	(15.0) (3.0) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	13	2	10K-5b		467土坑	土師器 皿	(6.6) 1.1 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	14	2	10K-5b		467土坑	土師器 皿	(12.6) 2.1 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	15	2	10K-5b		467土坑	瓦器 椀	(12.4) (2.2) -	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 樟葉型
	16	2	10K-7d		120土坑	土師器 皿	(12.0) (2.0) -	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	17	2	10K-7d		120土坑	土師器 皿	(12.3) (2.5) -	10YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	18	2	10K-7d		120土坑	土師器 皿	(13.0) 2.0 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	19	2	10K-7c		157土坑	土師器 皿	(8.0) 1.2 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	20	2	10K-7c		157土坑	須恵器 鉢	- (3.0) -	N5/ 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 東播系須恵器
	21	2	10K-7c		157土坑	瓦質土器 鍋	(27.8) (2.7) -	N3/ 暗灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ
	22	2	10K-7c		157土坑	瓦質土器 羽釜	(16.4) (2.9) -	N4/ 灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ
	23	2	10K-7d		122土坑	瓦器 椀	(11.4) (2.9) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はナデ 内面：ヘラミガキ
	24	2	10K-7d		122土坑	瓦器 椀	(12.4) (3.1) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	25	2	10K-7d		122土坑	瓦器 椀	(10.5) 3.6 (4.1)	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	26	2	10K-7d		122土坑	瓦質土器 羽釜	(17.4) (6.5) -	N4/ 灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ
	27	2	10K-8d		53土坑	土師器 皿	(9.4) (1.6) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	28	2	10K-8d		53土坑	瓦器 椀	(13.0) (1.9) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	29	2	10K-8d		53土坑	瓦質土器 羽釜	(24.2) (4.2) -	2.5Y8/2 灰白色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ
	30	2	10K-5b		330ピット	土師器 皿	(7.9) (1.0) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	31	2	10K-5b		330ピット	土師器 皿	(7.8) 1.1 -	10YR8/2 灰白色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	32	2	10K-5b		330ピット	土師器 皿	(13.0) (3.0) -	5Y8/1 灰白色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表1-11 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構面	遺構名	器種	口径 器高 底径	色調	調整・特徴
48	33	2	10K-5b		330ピット	瓦器 椀	(13.5) (2.0) -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	34	2	10K-5b		330ピット	瓦質土器 羽釜	(20.6) (6.4) -	N1.5/ 黒色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ 煤付着
	35	2	10K-5c		363土坑	土師器 皿	(7.4) 1.0 -	7.5YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	36	2	10K-5c		363土坑	土師器 皿	(9.0) 0.9 -	7.5YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	37	2	10K-5c		363土坑	土師器 皿	(8.5) 1.4 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	38	2	10K-5b ・c		363土坑	土師器 皿	(8.8) 1.5 -	7.5YR7/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	39	2	10K-5c		363土坑	土師器 皿	(13.3) (1.9) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	40	2	10K-5c		363土坑	瓦器 皿	(8.8) 1.3 -	N4/ 灰色	外面：摩滅により不明 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	41	2	10K-5c		363土坑	瓦器 椀	(12.0) (3.5) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 椀葉型
	42	2	10K-5b ・c		363土坑	瓦器 椀	(12.9) (2.9) -	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 大和型
	43	2	10K-5c		363土坑	瓦器 椀	(13.8) (2.7) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 大和型
	44	2	10K-5c		363土坑	瓦器 椀	(13.8) (2.3) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 大和型
	45	2	10K-5c		363土坑	瓦器 椀	(13.6) (3.4) -	N4/ 灰色	外面：ヘラミガキ、口縁部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 大和型
	46	2	10K-5c		363土坑	瓦器 椀	(14.0) (3.5) -	N3/ 暗灰色	外面：ヘラミガキ、口縁部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 大和型
	47	2	10K-5c		363土坑	須恵器 甕	(21.2) (3.7) -	N3/ 暗灰色	外面：回転ナデ、ハケ 内面：回転ナデ
	48	2	10K-5c		363土坑	瓦質土器 羽釜	(13.0) (9.1) -	N4/ 灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ 三足羽釜
49	2	10K-5c		363土坑	土師器 羽釜	(21.2) (15.4) -	10YR7/6 明黄褐色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ、板状工具によるナデ 煤付着	
49	1	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 0.9 -	7.5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	2	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 0.9 -	7.5YR8/4 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	3	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 1.2 -	10YR6/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	4	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 1.3 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	5	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 1.3 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	6	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.2) 1.4 -	5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。



表1-12 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構面	遺構名	器種	口径器高 底径	色調	調整・特徴
49	7	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.0) 1.3 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、口縁部はヨコナデ
	8	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.3) 1.4 -	7.5YR7/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	9	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 1.6 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	10	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	6.8 1.4 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	11	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.2) 1.6 -	10YR7/2 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	12	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.2) 0.9 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	13	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.8) 1.3 -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	14	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(8.2) 1.1 -	5YR8/1 灰白色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	15	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(8.8) 1.1 -	7.5YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	16	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(8.0) 1.4 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	17	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(10.0) 2.1 -	10YR6/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	18	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.6) 1.4 -	10YR8/2 灰白色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	19	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.6) 1.5 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	20	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.0) (1.3) -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	21	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	7.0 1.4 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	22	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 1.3 -	7.5YR6/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	23	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.0) 1.2 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	24	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.0) 1.2 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	25	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.2) 1.4 -	7.5YR6/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	26	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(6.8) 1.5 -	2.5Y7/2 灰黄色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	27	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.0) 1.5 -	10YR6/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	28	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(8.0) 1.7 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	29	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	10.0 2.3 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ

法量：単位はcm、( )は復原径、残存高。

表1-13 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構面	遺構名	器種	口径 器高 底径	色調	調整・特徴
49	30	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.2) 1.8 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	31	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.4) 1.2 -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	32	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(8.0) 1.1 -	5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	33	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(7.6) 1.3 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	34	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(8.0) 1.2 -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	35	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(10.0) (2.1) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ハケ後ナデ、口縁部はヨコナデ
	36	2	10K-4b		728土間	土師器 皿	(11.0) 2.4 -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	37	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(10.0) (3.5) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	38	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(11.4) (4.1) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	39	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.0) (3.7) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部に楕円状の暗文 樟葉型
	40	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.2) (3.6) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	41	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.0) (3.0) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	42	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.2) (3.1) -	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	43	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.0) (3.2) -	N3/ 暗灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	44	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(13.5) (4.2) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	45	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.2) (2.2) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	46	2	10K-4b		728土間	土師器 椀	(12.0) (3.4) -	7.5Y6/4 にぶい橙色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	47	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.8) (3.6) -	2.5Y7/2 灰黄色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ハケ、口縁部はヨコナデ
	48	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.4) (3.1) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ハケ、ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	49	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.2) (2.8) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	50	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(13.8) (2.9) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	51	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(13.2) (2.8) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
	52	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(14.4) (3.2) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ
53	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(10.8) 3.2 4.1	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジクザグ状暗文	

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表1-14 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径器高底径	色調	調整・特徴
49	54	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(11.8) 3.8 3.0	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジグザグ状暗文
	55	2	10K-4b		728土間	瓦器 椀	(12.0) (3.6) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、底部はナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジグザグ状暗文
	56	2	10K-4b		728土間	青磁 椀	(16.0) (4.0) -	10Y4/2 オリーブ灰色	外面：施釉、連弁文 内面：施釉 龍泉窯系青磁
	57	2	10K-4b		728土間	陶器 平椀	(15.6) 6.2 (3.4)	5Y7/1 灰白色	外面：回転ナデ、高台部は削り出し、施釉、底部付近は露胎 内面：回転ナデ、施釉 瀬戸・美濃系陶器
	58	2	10K-4b		728土間	瓦質土器 羽釜	(23.0) (5.0) -	2.5Y7/3 浅黄色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、ヨコナデ
	59	2	10K-4b		728土間	陶器 播鉢	- (4.5) -	5YR4/1 褐灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
	60	2	10K-4b		731ピット	瓦質土器 播鉢	(26.2) 13.0 (9.4)	5Y3/1 オリーブ黒色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：播目
	61	2	10K-4b		731ピット	瓦質土器 播鉢	(32.4) 15.5 (10.0)	5Y6/1 灰色	外面：剥離・摩滅のため不明 内面：剥離・摩滅のため不明、播目
50	1	2	10K-7c	第1層		土師器 皿	(7.4) 1.1 -	10YR6/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	2	2	10K-7 ・8c	第1層		土師器 皿	(11.4) (2.4) -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	3	2	10K-7c	第1層		土師器 皿	(12.0) (2.4) -	7.5YR6/3 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、口縁部はヨコナデ
	4	2	10K-7c	第1層		瓦器 椀	(13.9) (3.4) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	5	2	10K-7 ・8c	第1層		瓦器 椀	(14.5) (3.9) -	N5/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 樟葉型
	6	2	10K-7c	第1層		青磁 椀	(15.4) (4.4) -	7.5Y5/2 灰オリーブ色	外面：施釉、連弁文 内面：施釉 龍泉窯系青磁
	7	2	10K-7c ・d	第1層		瓦質土器 羽釜	(6.4) (3.2) -	N4/ 灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ 三足羽釜、小型品
	8	2	10K-7c	第1層		瓦質土器 羽釜	(11.8) (5.0) -	N5/ 灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、ヨコナデ
	9	2	10K-8c ・d	第1層		弥生土器 壺	(15.2) (3.6) -	10YR6/6 明黄褐色	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ
	10	2	10K-7c	第1層		弥生土器 甕	- (4.9) (6.8)	7.5YR8/4 浅黄褐色	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ、ナデ
	11	2	10K-8c ・d	第1層		弥生土器 甕	- (2.8) (8.2)	10YR7/4 にぶい黄褐色	外面：ハケ、ケズリ 内面：ナデ
	12	2	10K-8c ・d	第1層		弥生土器 壺	- (3.1) 7.2	5Y6/1 灰色	外面：摩滅のため不明 内面：ナデ 外底面に葉脈痕
	13	2	10K-7c	第1層		弥生土器 甕	- (2.8) 5.4	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ 外底面に葉脈痕
	14	2	10K-8d		55落込み	土師器 皿	(8.6) (1.2) -	7.5YR8/6 浅黄褐色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	15	2	10K-8d		55落込み	土師器 皿	(12.8) (2.4) -	7.5YR8/4 浅黄褐色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	16	2	10K-8d		55落込み	瓦器 椀	(13.8) (3.2) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線 大和型

法量：単位はcm、( )は復原径、残存高。

表1-15 土器観察表

図番号	報告番号	調査区	地区	層位・遺構面	遺構名	器種	口径器高底径	色調	調整・特徴
50	17	2	10K-8d		55落込み	瓦器 椀	(17.5) (3.2) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、端部に沈線大和型
	18	2	10K-8d		55落込み	瓦器 椀	(14.4) (2.9) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	19	2	10K-8d		55落込み	瓦器 椀	(14.2) (4.4) -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ 樟葉型
	20	2	10K-8d		55落込み	弥生土器 甕	(16.9) (3.6) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ
	21	2	10K-8d		55落込み	土師器 甕	(17.0) (11.6) -	7.5YR6/6 橙色	外面：口縁部はヨコナデ、体部はハケ 内面：口縁部はヨコナデ、体部はケズリ
	22	2	10K-4e		756落込み	須恵器 杯A	12.4 3.9 7.2	2.5GY6/1 オリーブ灰色	外面：回転ナデ、ナデ、底部はヘラ切り、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ
	23	2	10K-3e		756落込み	土師器 皿	(7.0) 1.1 -	5YR7/6 橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	24	2	10K-3e		756落込み	土師器 皿	(9.0) (1.3) -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	25	2	10K-3e		756落込み	土師器 皿	(9.0) (2.1) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、口縁部はヨコナデ
	26	2	10K-3e		756落込み	土師器 皿	(9.7) (2.1) -	10YR7/4 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	27	2	10K-3e		756落込み	土師器 皿	(9.2) (2.2) -	10YR6/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	28	2	10K-5e		756落込み	瓦器 椀	12.0 3.8 -	N4/ 灰色	外面：口縁部はヨコナデ 内面：ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、見込み部にジクザグ状暗文
	29	2	10K-3e		756落込み	青磁 椀	- (4.0) -	5GY7/1 明オリーブ灰色	外面：施釉、連弁文 内面：施釉 龍泉窯系青磁
	30	2	10K-3d		756落込み	陶器 瓶	(5.6) 3.2 -	5YR2/4 極暗赤褐色	外面：施釉、回転ナデ 内面：施釉、回転ナデ 輸入褐釉陶器
	31	2	10K-3e		756落込み	陶器 椀	(18.0) (5.3) -	10YR7/2 灰白色	外面：施釉、中位は露胎 内面：施釉 瀬戸・美濃系陶器
	32	2	10K-3e		756落込み	瓦質土器 羽釜	(21.8) (4.2) -	N2/ 黒色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ
	33	2	10K-3e		756落込み	須恵器 甕	(30.6) (5.5) -	7.5YR5/1 灰色	外面：口縁部は回転ナデ、体部は平行タタキ 内面：口縁部は回転ナデ
	34	2	10K-3e		756落込み	瓦質土器 火鉢	(21.3) (4.3) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部に2条の凸帯をめぐらせ、その間に印刻 内面：ナデ 炭素の吸着なし
	35	2	10K-3e		756落込み	瓦質土器 火鉢	(29.6) 11.9 -	N4/ 灰色	外面：ナデ、ヘラミガキ 内面：ナデ
	36	2	10K-3e		756落込み	瓦質土器 火鉢	- (8.0) (29.0)	5Y8/1 灰白色	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ 外底面に砂付着
51	1	7	11L-7e	中世耕作土		土師器 皿	(9.8) (1.9) -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	2	5	11K-4 ・5j	中世耕作土		土師器 皿	(10.2) (1.6) -	10YR8/3 浅黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	3	5	11L-6c	中世耕作土		須恵器 鉢	- (2.0) -	2.5Y8/1 灰白色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 東播系須恵器
	4	5	11K-4 ・5j	中世耕作土		須恵器 鉢	- (3.7) -	10Y6/1 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 東播系須恵器

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。



表1-16 土器観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区	層位・ 遺構面	遺構名	器種	口径 器高 底径	色調	調整・特徴
51	5	5	11L-6c	中世耕作土		青磁 椀	(16.6) (4.9) -	5GY5/1 オリーブ灰色	外面：施釉 内面：施釉
	6	7	11L-6c	中世耕作土		瓦器 椀	- (1.2) (4.9)	N6/ 灰色	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ、見込み部に輪状の暗文
	7	7	11L-7c	中世耕作土		須恵器 鉢	(8.0) (2.4) -	N7/ 灰白色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
	8	7	11L-7e	中世耕作土		白磁 椀	(16.0) (3.0) -	2.5Y8/1 灰白色	外面：施釉 内面：施釉
	9	5	11L-6c	中世耕作土		瓦質土器 火鉢	- (7.5) -	N4/ 灰色	外面：ナデ 内面：ナデ
	10	4	11L-5a ・b		6溝	土師器 皿	(8.0) (1.3) -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、口縁部はヨコナデ
	11	4	11L-5a ・b		6溝	土師器 皿	(7.6) (1.7) -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	12	4	11K-4i ・j		6溝	土師器 皿	(8.0) (1.6) -	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	13	4	11K-5j		6溝	土師器 皿	(8.0) (1.4) -	10YR7/6 明黄褐色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	14	4	11L-4i		6溝	土師器 皿	(9.0) (1.8) -	7.5YR6/4 にぶい橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	15	4	11K-4j		6溝	土師器 皿	(11.9) (2.0) -	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面：ナデ、口縁部はヨコナデ 内面：ナデ、口縁部はヨコナデ
	16	4	11L-4i		6溝	瓦質土器 播鉢	- (4.5) -	7.5YR8/2 灰白色	外面：ナデ 内面：ナデ、播目
	17	4	11L-5a ・b		6溝	瓦質土器 播鉢	(24.9) (6.5) -	N3/ 暗灰色	外面：ナデ 内面：ナデ、播目
	18	4	11L-5a		6溝	青磁 椀	(12.4) (3.8) -	2.5GY5/1 オリーブ灰色	外面：施釉 内面：施釉 龍泉窯系青磁
	19	7	11L-8c		16井戸	青磁 椀	- (2.5) 5.4	5Y5/3 灰オリーブ色	外面：回転ナデ、底部は削り出し、施釉、外底面は露胎 内面：施釉、見込み部に施文 龍泉窯系青磁
	20	7	11L-8c		16井戸	瓦質土器 火鉢	- (6.4) (13.6)	2.5Y2/1 黒色	外面：ナデ、ヘラミガキ 内面：ナデ
	21	7	11L-8c		16井戸	瓦質土器 火鉢	- (9.5) -	N4/ 灰色	外面：ナデ 内面：ナデ
	22	7	11L-8c		16井戸	土師質土器 羽釜	(25.8) (5.2) -	10YR5/1 褐色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、ヨコナデ
	23	7	11L-8c		16井戸	土師質土器 羽釜	(27.2) (11.5) -	2.5Y7/2 灰黄色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ハケ、ヨコナデ
	24	7	11L-7c		14溝	瓦質土器 羽釜	(28.3) (7.1) -	N3/ 暗灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ
	25	7	11L-7c		14溝	瓦質土器 羽釜	(32.2) (5.5) -	2.5Y5/1 黄灰色	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ
	26	7	11L-7c		14溝	陶器 播鉢	(30.8) 11.5 (12.3)	10YR8/1 灰白色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、播目 信楽焼
	27	7	11L-7c		14溝	須恵器 杯B	- (3.3) (9.0)	2.5Y7/1 灰白色	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ
	28	7	11L-7c		14溝	須恵器 壺	- (5.1) (11.0)	5Y5/1 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 自然釉付着

法量：単位はcm、()は復原径、残存高。

表2 石器・石製品観察表

図 番号	報告 番号	調査区	地区制	層位・遺構面	遺構名	器種	石材	長さ 幅 厚さ	重さ	備考
52	1	2	10K-5c		398ピット	石鏃	サヌカイト	2.13 1.65 0.22	1.0	無茎三角鏃
	2	7	11L-7e	中世耕作土		石鏃	サヌカイト	2.71 1.40 0.35	1.1	無茎、挟り状に調整
	3	2	10K-3c・d		300土坑	石鏃	サヌカイト	(2.13) 2.20 0.29	1.3	凹基式
	4	2	10K-6a	遺構検出中		石鏃	サヌカイト	2.65 1.36 0.30	0.9	凹基式
	5	2	10K-5b		730竪穴建物	石鏃	サヌカイト	3.50 (2.20) 0.21	1.4	凹基式
	6	2	10K-5b		730竪穴建物	石鏃	サヌカイト	2.42 1.16 0.30	1.0	無茎、柳葉形
	7	2	10K-10b	遺構検出中		石鏃	サヌカイト	2.76 0.98 0.40	1.1	無茎、柳葉形
	8	2	10K-3e	遺構検出中		石鏃	サヌカイト	3.39 1.60 0.43	2.9	無茎、柳葉形
	9	2	10K-7d		120土坑	石鏃	サヌカイト	2.21 1.17 0.30	0.7	有茎、柳葉形
	10	2	10K-7・8c	遺構検出中		石鏃	サヌカイト	2.71 1.05 0.22	0.9	未成品
	11	5	11K-5i		9土坑	石鏃	サヌカイト	1.65 1.80 0.19	0.4	凹基式
53	1	2	10K-5b		730竪穴建物	石皿	安山岩	24.68 22.15 6.37	4340.0	表面の使用面は平滑で、複数方向の擦痕が認められる
54	1	6-2	11L-2・3h・i	包含層		石匙	サヌカイト	6.01 4.40 0.89	17.4	横型
	2	7	11L-6d	近世床土		石匙	サヌカイト	7.30 3.30 1.00	17.1	縦型
	3	2	10K-3d		276溝	スクレイパー	サヌカイト	3.69 2.21 0.71	5.3	片面調整
	4	2	10K-3c・d	遺構検出中		スクレイパー	サヌカイト	5.70 4.92 0.90	26.6	片面調整
	5	2	10K-5b		726ピット	スクレイパー	サヌカイト	6.60 4.50 0.88	24.0	片面調整
	6	2	10K-5c	遺構検出中		スクレイパー	サヌカイト	7.20 4.26 0.97	31.8	片面調整
	7	2	10K-3e	遺構検出中		楔形石器	サヌカイト	4.40 2.39 0.64	8.4	打点の位置につぶれ
	8	2	10K-4a・b	遺構検出中		剥片	サヌカイト	9.87 7.31 1.33	129.3	端部に自然面が残存
55	1	2	10K-6a		276溝	砥石	凝灰岩	5.53 3.90 1.58	60.8	中砥、上面に5ヶ所の円形の窪みがある
	2	2	10K-5c		365土坑	砥石	流紋岩	7.69 4.93 1.73	111.2	中砥
	3	2	10K-4e・5c	遺構検出中		砥石	凝灰岩	8.25 5.62 1.50	117.0	中砥
	4	2	10K-7c・d	包含層		砥石	凝灰岩	8.70 8.53 3.51	369.4	中砥
	5	2	10K-7c		157土坑	砥石	凝灰岩	7.24 8.03 5.24	420.1	中砥
	6	7	11L-6c		49土坑	砥石	凝灰岩	13.98 8.77 6.43	735.0	中砥、被熱
	7	7	11L-6c		49土坑	砥石	安山岩	21.10 15.20 9.02	3510.0	表面は平滑で、複数方向の擦痕が認められる、被熱、欠損した台石の可能性あり



# 付章 自然科学分析

## 第1節 44焼土坑・1区開析谷埋土の自然化学分析概要

はじめに

本節では、津田遺跡において実施した自然科学分析成果の要約を述べる。分析内容は、44焼土坑（土坑埋土の土壤薄片観察、熱残留磁気測定、焼土のX線回折分析）、1区の開析谷内埋土（花粉・珪藻・植物珪酸体分析）である。分析方法や詳細な結果等については、紙面の都合から割愛させて頂いた。

### 1. 分析結果

#### (1) 44焼土坑の分析

##### 1) 熱残留磁気測定

これまでの研究（たき火実験）によれば、被熱程度（温度×時間）と磁氣的性質（以下、磁性；帯磁率や残留磁化強度など）は正の相関を示す。つまり、被熱程度が高いほど土壤の磁性がより大きな値を示すようになり、新鮮な火山灰など一部を除いて、この正相関が成立することが知られている（Morinagaほか、1999）。

帯磁率を横軸に、消磁前の残留磁化強度を縦軸にとって、35個すべての試料の磁性を図1に示す。これまでの研究で認められた正相関（右肩上がりの傾向）がこれらの焼土にも認められる。この図の右上に位置する試料ほど被熱程度が高いことを表している。

この図で示すデータを詳しくみると、遺構床面から採取した試料1～5と埋土から採取した試料（6～15）は、その他の被熱変色部から採取した試料15～35のデータとはわずかに分布が異なり、帯磁率が小さい方にずれている。このことは埋土および遺構底面の土壤が、遺構床面や壁面の被熱変色した土壤とは違う種類である（違う履歴を持つ）可能性を示している。

##### 2) 考古地磁気年代決定

被熱変色部から採取し、磁性（残留磁化強度と帯磁率）の大きな試料16～35について、消磁前・後の残留磁化方向を図2（左：消磁前、右：6 mT消磁後）に示した。これら試料の消磁前の残留磁化方向は一部試料を除いて、まとまりが良い。一方、消磁後の残留磁化方向は大きくばらつくようになり、まとまりが悪い。一般には、二次磁化成分を取り除いた消磁後の方向データを用いて年代決定を行う。しかし、この図で認められるように、この遺跡の土壤は消磁後にばらつくものが多い。図4で認められるように、残留磁化強度の大きなパイロット試料には二次磁化成分がほとんど認められないので、ここでは消磁前の方向データを用いて年代決定を行うことにする。ただし、3つの試料の残留磁化方向は

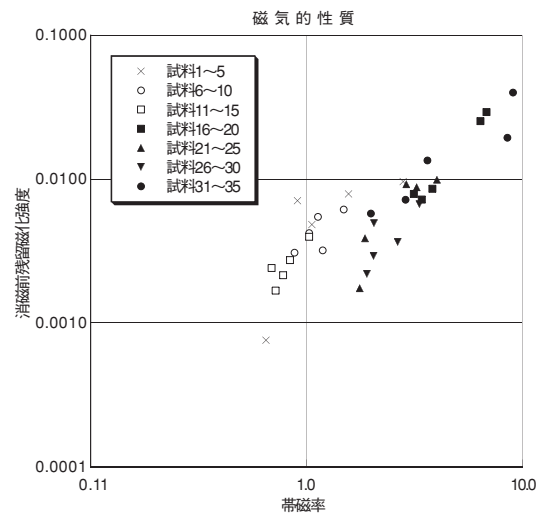


図1 採取土壤試料の磁氣的性質  
(帯磁率と残留磁化強度の関係)



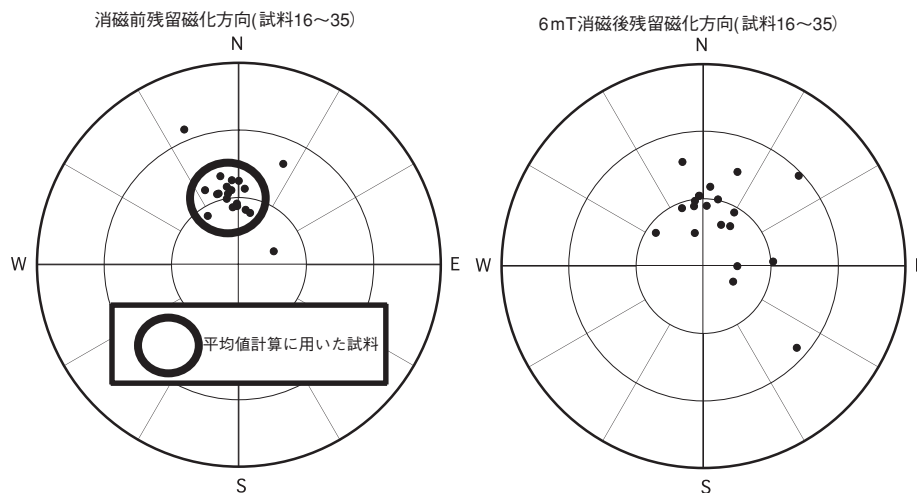


図2 被熱変色部試料の交流磁場消磁前・後の残留磁化方向

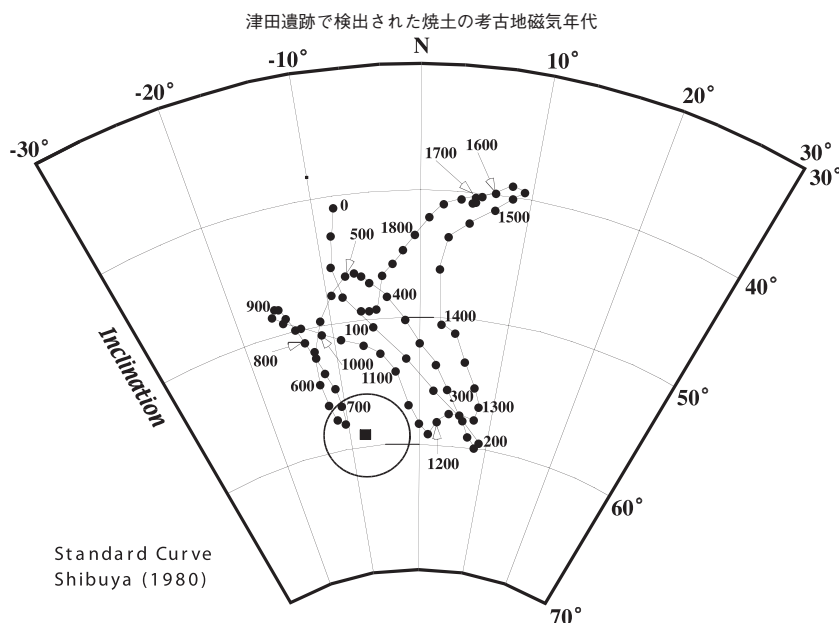


図3 被熱変色部、17試料の交流磁場消磁前の平均方向と近畿地方における標準考古地磁気曲線 (Shibuya,1980) との比較

他試料のデータの分布範囲 (図2左中の円内) から大きく離れているので、それらを除外して平均方向を求めた。その結果、17個の被熱変色部試料の平均方向値は、偏角 =  $-7.8^\circ$ 、伏角 =  $59.0^\circ$  (信頼度パラメーター = 116.0 : 大きいほど集中度がよい、フィッシャーの  $\alpha_{95} = 3.3$  : 小さいほど集中度がよい) であった。

この平均方向値と近畿地方における考古地磁気標準曲線 (Shibuya,1980) との比較を行った。その結果を図3に示す。標準曲線と平均方向の誤差円 ( $\alpha_{95}$ によって決まる) との重なりから年代を決定すると、被熱変色部の生成年代として西暦625年～725年が求められる。

### 3) X線回折分析

粘土を加熱していくと、種々の鉱物が生成し、あるいは逆に変態して消失する。X線回折分析は粘土のこの性質を利用し、試料中にどの種の鉱物が存在するかを検出することによって被熱程度 (焼成温度) を推定する手法である。粘土鉱物の消失および焼成温度は、例えば消失温度としてカオリナイトが  $600^\circ\text{C}$ 、パーミキュライト・緑泥石が  $750^\circ\text{C}$ 、イライトが  $950^\circ\text{C}$ 、斜長石およびカリ長石が  $1150^\circ\text{C}$ 、生成温度としてムライトが  $1050^\circ\text{C}$  以上、クリストバライトが  $1200^\circ\text{C}$  以上である。X線回折分析の結果、44焼土坑底部の焼土では、粘土鉱物の回折が全く確認されておらず、斜長石やカリ長石が検出されていることから、 $1150^\circ\text{C}$  がその上限となる。今回の分析では、地山層の分析結果が得られなかった。津田遺跡と比較的接近する讃良郡条里遺跡のデータを含む井上 (2005) で示された河内平野における遺跡採取の堆積物 (原土) 試料のX線回折分析結果では、すべての試料でイライトが検出されていない。また緑泥石については、一部の未検出試料を含むものの信貴山採取試料 (八尾市恩智神社～信貴山墓地公園付近)

を除き、ほぼ連続的に検出されている。

井上 (2005) の分析データから、今回の X 線回折分析データについては、緑泥石の消失に関して可能性が高いと考えられる。このことから、44 焼土坑内で行われた焼成は、750℃ 以上 1150℃ 未満の焼成温度であったと推定される。

#### 4) 土壌薄片観察

薄片観察に基づく土壌微細形態的特徴からは、土坑底部の被熱変色部の発達程度が非常に悪く、かつ不連続であることが読みとれる (図 5)。

被熱を受けた土坑

埋土下層 (図 40-4 ~ 8 層) では、炭化物が折り重なったり、密集したりするような産状を示さず、非常に細片の固体が碎屑物中に散在的に分布する。この部分には、不明瞭ながら線状の構造が観察される。線状構造には、水流の影響を示すような碎屑物の篩い分けや粒子配列が認められない。よって、線状構造は水流の影響ではなく、大気下においてなんらかの弱い営力による堆積物の再移動と積層によって形成されたものと解釈される。これらの薄片観察結果から、土坑底部では植物体が焼成した状態をそのまま保持していないと判断される。上記の観察をふまえると、土坑の底部では床面への強い影響を及ぼさない程度の焼成物を攪拌するような人為的な攪乱があったことが解釈される。

土坑埋土の主体をなす土坑埋土上層 (図 40-1 ~ 3 層) は、塊状無層理で炭化物がほとんど観察されず、さらに微小なブロック土と思われる集合体を多く含む。このような特徴から、土坑埋土上層は、人為営力による埋め戻し時に土坑内に充填された堆積物と判断される。

#### 5) まとめ

以上のような 44 焼土坑での分析結果から、本遺構では熱残留磁気分析により、その内部においてなん

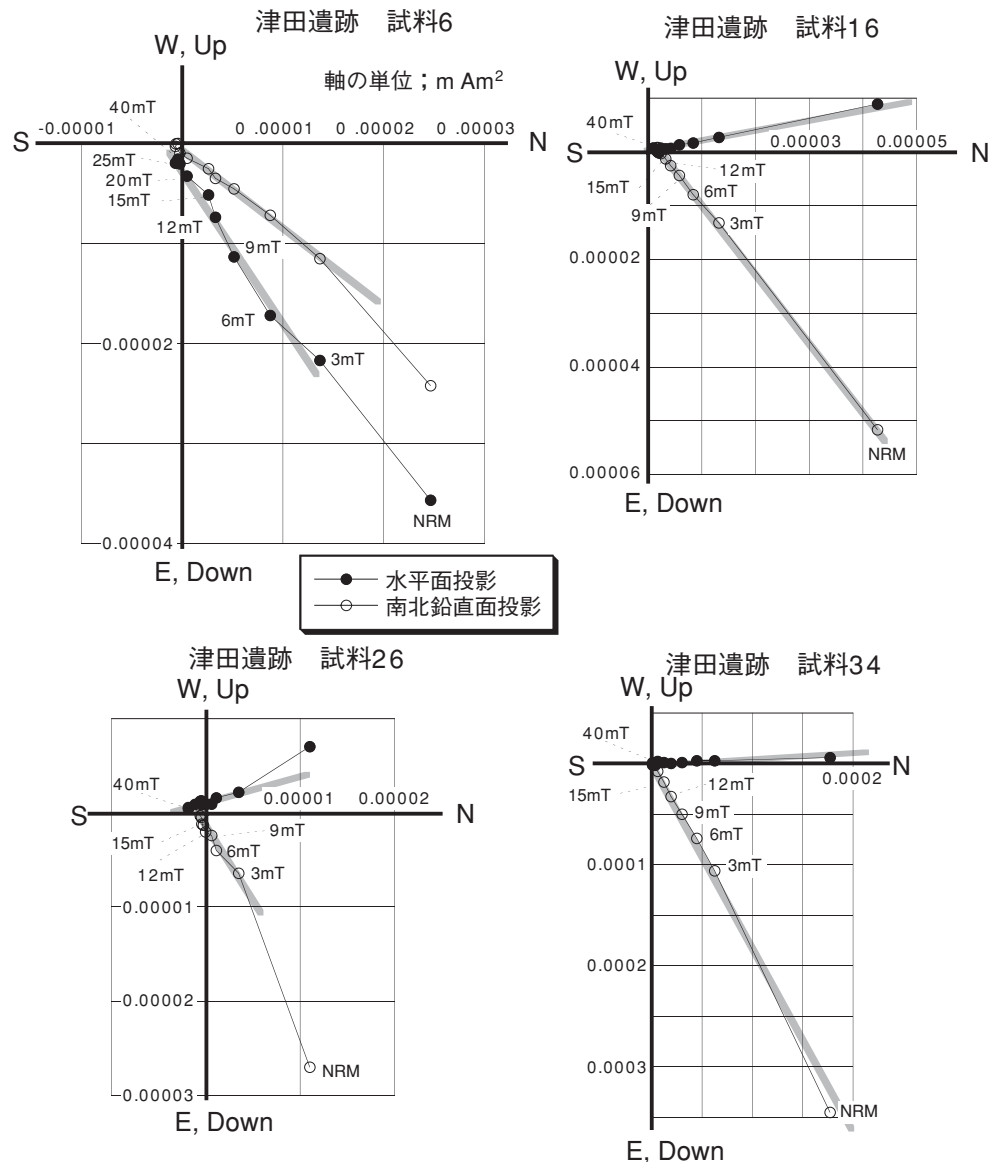


図 4 パイロット試料の段階交流消磁結果